
異世界ハーレム彼女の逆襲！

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ハーレム彼女の逆襲！

【Nコード】

N3797Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

あまりにも凶悪なその目つきのせいで女性に嫌われる主人公、晴樹。

そんな彼が召喚された異世界を救い、その報酬として神に要求したものが

「自分を嫌い、避ける全ての女性が自分を好きになる」という

『ハーレム機能』であった。

現実世界に帰った主人公は、その凄まじいまでの性能を誇る

『ハーレム機能』のおかげで、我が世の春を謳歌するのだが……。

山田晴樹のハーレム事情

「人を外見で判断してはいけません」

小学校の頃、誰もが一度は先生に言われた言葉だろう。

あの頃、純粹無垢だった俺はこの言葉を信じ、そして裏切られた。

こうして朝の身だしなみを整えるため、鏡の前に立つたびに決り出される俺のトラウマ。

数少ない（というかほとんど唯一と言ってよい）友人であり幼馴染でもある、美鈴が俺に向けて言った我が人生最悪の褒め言葉。

『晴樹ってさー、「容疑者A」の写真が一番かつこよく写るよね！』

……きっと美鈴本人は、必死に俺のいいところを探そうとしていたんだろう。そうに違いない。そう信じたい。生まれつき目つきの悪い俺は、何も知らずに見れば人の一人や二人簡単に殺してそうなのだ。その怖さは毎朝鏡を見るたびに俺が俺にビビるくらいすごい。身長体重、共に標準。運動神経だって頭の出来だって顔だって決して悪くない。そんな俺に彼女どころか友人一人出来ないのは、ひとえにこのハンパなく悪い目つきと、それにより幼少時から虐げられてきたせいですっかり歪んでしまった性格のせいなのだ。

あえて断言しよう。

人とは、外見が全てなのである。

だがしかし。三日前から俺の世界は変わった。

ぼっちだった三日前までの俺よ。さようなら！俺は、俺だけは

あんたのこと、嫌いじゃなかったぜ！

こんにちはリア充な俺。これから長い付き合いだけどよろしくな！

「さて、今日も俺のハーレムな一日が始まるぜ！」

……異世界、というものを知っているだろうか？

パラレルワールド、平行世界。呼び方は様々だが要はこの世とは違う世界の事である。

そんな世界に俺が呼び出されたのは三日前の昼休み。近づいてくるクリスマススの話題をする隣の席の女子たちに気を利かせ、トイレの個室に立てこもった時のことである。別にこの子たちを避けたわけじゃない。プライベートな予定に聴き耳立てるのはマナー違反だという紳士な俺の判断からである。……『やっぱり雪が降るイヴに真剣な眼差しで見つめられたら覚悟しちゃうよね！』という声に俺のトラウマが刺激されたからでは断じてない。……けっ。俺に真剣な眼差しで見つめられたら命と貞操を失う覚悟をするくせによ……。

いやまあ、俺の事はどうでもいい。

本題は、余鈴を聞きトイレのドアを開けたらそこが異世界だったということだ。

思わず呆然とする俺に、その世界の神を自認するおっさんは言った。

「異世界の子よ。貴様に力を与えよう。この世界を救ってくれ」

——正直、「やった！」と思ったね。

この世の全ての女性から（大多数の男性からも、なのだが、この際男なんてどうでもいい）嫌われていた俺にはこの世界に絶望しかなかったからだ。このまま、あと十五年ほど経過したら危うく剣も魔法もない魔物もないこの現実世界で立派な魔法使いになってしまふところだった。

RPGとSLGと凜子攻略はぼっちの嗜み。俺は、過去にやりこんだゲームの知識から思いつく限りのありとあらゆるチート性能を自称神に要求し、その全てを身に付けた。

もちろん、一番大事な『ハーレム機能』もぼっちりだ。

こうして万全の準備を整え、お姫様や女戦士や無口ながらも俺に好意を寄せる女魔法使いや女性神官や幼女に化ける俺にだけ懐く魔物などを従えた俺は。

なんと一日で魔王軍を壊滅させてしまったのである。しかも自分の力に依らずに。

——最大の功績者は人ではなく、もちろん魔物でもなく、現実世界で流行っていた『風邪』であった。この世界の魔物たちは、偶然風邪気味だった俺のもたらしたウィルスにひとたまりもなく敗れ、次々と勝手に倒れていったのである。

余りの事に呆然とする俺を尻目に、僅かな側近に守られた手負いの魔王を追う王国軍。

——やがてその首が獲られ、この世界に平和が戻った時、俺は滂沱の涙を流した。

一日！ たったの一日である。

これでは、ツンデレお姫様が俺にデレる時間も、普段は勝ち気な女戦士がベッドでは人が変わったように甘えん坊になる時間も、我が身を犠牲にして無口な魔法使いを守り抜いた俺に彼女がそっと寄り添ってくる時間も、貞淑な女神官がその経典に逆らい教会で俺に貞操を捧げる時間も、ネコ耳尻尾付きの魔物っ娘（娘と書いて『こ』と読む）とちよつとHなキャッキャウフフをする時間も、全くなかったのだ！

言葉もなく涙する俺を見て、なにを勘違いしたのか神は言った。

「この世界の平和の為に泣いてくれるとは……。よし。本来ならば在り得ぬことだが特例として認めよう。元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに与えた能力を持ったまま帰ることを許そう。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まっている。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！」

……ハーレムの王、山田晴樹の朝は早い。

「やっぱり朝のこのひと時は大事ですね。これから出会う様々な女性とのスムーズな会話の為にTV、新聞、ネットでの情報収集は欠かせませんよ」

思わずナレーション風に言ってしまったが、より良いハーレム生活の為に努力も必要なのだ。……嘘です。本当はもっと深刻な理由があります。

さて。今日も一日がんばるか。

母親の作ってくれた朝食を平らげ、俺はマンションのドアを開ける。

どん。

「きゃっ」

外に出た俺に、『食パンを咥え走ってきたかわいい女の子（笑）』がぶつかってくる。

「おっと失礼。お怪我はありませんか？ さあ、手をどうぞ」

「は、はい……ぼっ」

顔を赤く染めつつ、そつと手を差し出すその女の子。三日前の俺がやれば、手ではなく財布が、「こ、これで許してください……」という言葉と共に差し出されるところだ。

名残惜しげなその子と別れ、エレベーターに乗り込む俺。同乗するのはOL風お姉さん。

ガタン。

「きゃっ」

「おや？ 停電のようですね。エレベーターが止まっています」

「そ、そんな……暗くて、怖い……」

「だいじょうぶ。俺がついてます。さあ、手を握ってあげましょう」

「あ、ありがとう……。大きくて、安心する手……ぽっ」

もう放さないとはかりに力強く握りしめられる手。三日前の俺がやれば、エレベーターの管理会社の前に警察に連絡されるところだ。

名残惜しげなそのお姉さんと別れ、学校へ向け歩き出す俺。目の前を歩くのはなぜかふらふらしている清楚な女の子。

ふらっ。

「きゃっ」

「危ない！」

「あ、すいません……。ちよつと貧血気味で……」

「俺が支えなければ車道に出てしまふところでしたよ。思わず抱きしめてしまいました。が、苦しくはありませんか？」

「あ、ありがとう、ございます、平気です……。男性に抱きかかえられるのは、生まれて初めてです……。ぽっ」

なぜか俺の胸にのの字を書き始める女の子。三日前の俺がやれば、そのか細い指ではなくスタンガンとかそういった防犯アイテムが胸に突きつけられるところだ。

名残惜しげなその清楚な女子と別れ、また歩き出す俺。やがて見えてきたのは……

「なんだ。美鈴か」

「朝っぱらからなんだとは失礼ね……。はい。昨日の分」

怒りつつ、大きな紙袋を差し出す我が幼馴染、椎葉美鈴。

うすい茶色の髪を活動的なショートカットにした、やや釣り目がちの大きな瞳が印象的なこの女とは、幼い頃、何とお医者さんごっこをしたほどの仲。……例えそれが「俺患者さん。美鈴歯医者さん」という変則のお医者さんごっこだったとしても、だ。……ぐらついていた乳歯をこいつに引き抜かれた時の恐怖と痛みは一生モンのトラウマその二だ。

「内訳説明するよ。ラブレター十二通。手作りのお菓子が四つ。同じく手作りのお弁当が二つ。味はひとつはまあまあ。もうひとつは火加減が甘い。あとついでに私宛の『晴樹様に近づくな』という趣旨の脅迫文が一通。殺害予告が三通。この四つはこのまま警察に持っていくね」

……脅迫文より殺害予告のほうが多いことに、女子の想いの闇の深さを感じる。

いやそんなことより。

「なんで勝手に食ってるんだよ弁当。それ俺宛のдар？」

「だって二つも食べられないでしょ？ だから適当に私が減らしておいてあげたの。……だいたいいさ、最近の晴樹はおかしい。処構わず誰かれ構わずフラグたてまくるの、いい加減にやめなさい。一緒にいる私に迷惑がかかるから」

「そう思うからこそ、こんな早い、あんまり人がいない時間に登校してるんじゃないか」

「それでこれなの？ ちょっとあんたおかしいんじゃない？ 主に

目つきと性格が」

「目は関係ないだろう目は。泣くぞ？」

「性格のほうは否定しないんだ……」

……そうなのだ。神の力はやはり偉大で、今の俺は歩くフラグ製造機。登校するだけでこの始末だ。……ちなみにこいつ、幼馴染の美鈴にはチート能力が適用されない。俺の願いが『俺を嫌い、そして避ける全ての女性が』であつたためと思われる。なんだかんだいってコイツ、美鈴は俺を嫌ってはいないようだ。好意があるかどうかはともかく。あと目の事は言うな。悲しくなるから。

「……だいたい、なんでみんな私をメッセンジャーにするのよ。こんなののどこがいいのか知らないけど、気持ち伝えるなら直接言えばいいのに」

「誰もがお前みたいな鉄の心を持っているとは限らないだろ？」

…『ああ、愛しの晴樹様に気持ちを伝えたい。でも振られたらどうしよう……』ってなるのが乙女心というものなんじゃないか？」

「最近の調査によるとそういう『乙女』は二十年ほど前に絶滅したらしいわよ」

まじかよちゃんと保護しとけよ国！ イリオモテヤマネコより貴重だろうが乙女！

「それに俺だつて別に処構わずフラグ立ててるわけじゃねーよ。……つと、お嬢さん、なんで泣いているんだい？ ああ風船が木に引っ掛かってしまったんだね。……ほらとれた。もうなくしちゃだめだよ」

「ありがとうおにいちゃん！ みずき、おおきくなったらおにいちゃんのおよめさんになってあげるね！」

「……そうね」

「俺だって最初の彼女は理想通りの人を選びたいからな。誰かれ構わずなんてとんでもない。……もしもしそのお婆ちゃん。そんな大荷物持ったまま歩道を渡るのは危ないですよ。持ちましよう。…へえ、曾孫さんの顔を見に？ お婆ちゃんに似てきつと可愛らしいお嬢さんなんでしょうね」

「ありがとうよ、若いの……。あたしがあと七十歳若ければのう…」

「……理想が高いことはいいことだわ」
「だろ？」

「もういいわ。なんだか疲れた……。早く学校行こ。……あ、小鳥ちゃんおはよー」

嫌みのように俺に向かい溜息をついた後、別人のように爽やかな笑顔で挨拶をする美鈴。おい。たまにでいいから俺にもその笑顔を向けるよ。減るもんじゃねーだろ。

「あ、お、おはようございます。美鈴さんと……山田くん」

小さな声で挨拶を返してくる小柄な少女。前髪を切り揃えたセミロング？ とでも言えばいいのだろうか？ その表情は目を隠すように伸ばされた髪のせいでよく見えない。

「おはよー小鳥ちゃん。いつも早いねえ」

「そ、そんなことない、です。……あ、先、行きますね」

ぺこり。そんな感じで軽く会釈すると、小走りで行ってしまふ彼女。

「……小動物みたいな子だな。知りあい？」

「……ええ。私のクラスメイト」

僕と美鈴は腐れ縁とも言つべきか同じクラスになることが多い。
ちなみに今年も例年通り同じクラス、姫神学園高等部1年C組だっ
たりする。

「……いやまあ、ほら。俺、クラスの女子とあんまり口きかないし
……」

「……昨日の調理実習での課題のクッキーを、クラスのほぼ全ての
女子から貰った人の発言とは思えないのだけど？」

「お前くれなかっただろ」

「だから『ほぼ』って言った」

「じゃあ、きつとあの子もくれなかったんだよ」

「最後尾に並んでたわよ。小鳥ちゃん。……ちよつと大人しいけど、
いい子だよ。小鳥遊小鳥ちゃん」

「いい子かどうかはこの際おいておくとして、その名前の付け方は
どうかと思う。親の顔が見たいってこういう時に使う言葉なのか？」

字面を見れば韻を踏んできると言えないこともないが、手抜きにも
程があると思うぞ小鳥遊両親。俺が市役所の戸籍係だったら赤ペン
で添削して突っ返すところだ。

「ま、名前は本人の責任じゃないからね。……晴樹。長い付き合い
に免じて警告しておくけど、ああいう大人しい子ほど思い詰めたら
すんごいんだからね。下手に手出しはしないほうがいいわよ」

「了解。……とりあえず早く教室行こうぜ。これ以上フラグ立てた
ら身が持たないからね」

……この時、俺はもう少し考えてみるべきだったのだ。

小鳥遊 小鳥。 たかなし ことり。

この大人しそうな子が、三日前に変わった俺の人生を、もう一度
変えることになる。

山田晴樹のハーレム事情（後書き）

はじめまして。キタキツネと申します。

普段、割とよく人が死ぬようなものばかりを書いているのでたまにはお気楽に、ゆるいものを、と思い勢いで書いてみました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

小鳥遊 小鳥

「……やれやれ。すっかり遅くなっちゃった」
放課後。日直の仕事で遅くなった俺は、人気のない廊下を教室目指して急ぐ。

——『晴樹君との日直』は今のクラスの女子にとっては一種のステータスになるくらいの幸運らしく、黒板を消そうとして手が触れ合う、ゴミ出しに行つて折からの突風でスカートがギリギリまでまくれ上がり「……みた？」と上目づかいで言われる——黒だった。気合入りすぎだろう。山口さん——などと、フラグのオンパレードを積み重ね、ようやく担任の待つ職員室に日誌を提出するところまで行つたのだ。が。

そこで我らが担任、菊池先生（二十七歳。独身。大人の色気むんむん）と山口さんとの間で女の戦いが勃発。「日誌の内容に関して山田君に確認することがあるわ。個人的に」と俺だけを引きとめようとする菊池先生と、「いっしょにお家に帰るまでが日直です！」という遠足と混同しているらしい山口さんによる舌戦はお互い一歩も引かず、どういう流れでか「では実技によつて決着をつけましょう」という先生の挑発に「先生が失つた若さと言つたものを見せ付けてあげます！」と山口さんが言い返しつつスカートのホックに手をかけたあたりで男性教師による物言いが入り、ようやく俺は解放された。

ありがとう日本史の田中先生。あんたの授業、脱線した雑談と豆知識が多いけど俺は嫌いじゃないよ。もしタイムトラベルとかして過去に行ったら役に立つかもしれないし。

菊池先生と山口さんによる「実技対決」を見てみたい気持ちはもちろんあったが、それよりも俺にとっては夕方六時から再放送されているアニメのほうが重要だった。……『ハーレム機能』によりリアルでの女性との関係は大幅に改善されたとはいえ、二次元の女の子を愛する気持ちは失わない俺である。今日は青と赤の名シーンだ。見逃せないぜ。

逸る気持ちをそのままに、恐らく無人であろうと予想した教室のドアを勢いよく開ける俺。意外なことにその目に映ったのは、窓から差し込む西日に佇む一人の地味な女子生徒。

「あっ……」

小鳥遊さんだった。

「おう。小鳥遊さんか。もう遅いぞ？ どうした？」

「あ、あの……山田くんを、待ってました……」

Oh。素晴らしき『ハーレム機能』。この地味めな彼女にもしっかりその力は働いていたと見える。だがしかし。

「本当にすまん。小鳥遊さん。今日は俺、どうしても外せない用事があつて……」

ひとりぼっちは、さびしいからな。俺が見てやらなきゃいけないんだよ。テレビ。

「あ、あの、わ、私、山田くんが、山田くんのことから……」

「あれ？ 聞いてた俺の話？ 俺、今から大事な用事が」

彼女の様子を窺う。……あ、だめだこれ。ものすごくテンパって

る。震えるその小さな手はスカートの端をぎゅっと握りしめ、俯いたその顔は過度の緊張に赤くこわばり、多分、俺の声なんて一切届いていない。参ったなあ。

確かにアニメは予約録画している。でもな、リアルタイムで見ながら実況板に書き込むあの一体感がいいんだよ。俺たちぼっちが多くの同志たちと気持ちを一体にして感動を分かち合うことが出来る唯一の時間。それは何より貴重なもので、本物のBBS戦士と自負する俺としてはやはりここは話を切り上げて。

「め、迷惑かとは思ったけど！　で、でも、言わないで後悔するよりはいいかなって！」

そう言って自分を奮い立たせるように勢いよく顔を上げた小鳥遊さん。その拍子にトレードマークのように目にかかっていた長い前髪がさらりと顔の横に流れ、その潤んだ大きな瞳が見える。……あれ？　意外なほど整った顔？　というかちょっと幼い感じだけど、この子、前髪上げたらすつごく可愛くね？

「……わかったよ小鳥遊さん。話を聞くよ」

「山田くん……ありがとう。で、でも、気持ち落ち着けますから、ちよつとだけ待ってください」

すまん全国のBBS戦士たちよ。俺はちよつと遅れる。が、必ず参戦する。具体的にはオープニング後のCM中には行けると思う。だからほんのちよつとだけ戦線を支えていてくれ。今日も勢いTOPテン入り目指して頑張ろう。

すう……はあ……と数回深呼吸してから、やがて落ち着いたのか小鳥遊がついに言う。

「……私、山田くんのが、好きです。……良かったら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願いします」

……正直、すげえときめいた。外見的にも相当可愛い（しかも普段隠しているところが高ポイント）な小鳥遊さんが、その白い肌をうっすらと赤く染めながら、潤んだ瞳に少しだけ涙を浮かべつつ上目づかいで告白してきたこの光景こそは、俺が何度も夢見て、そして諦めていたものだった。でも。

「……ごめん。小鳥遊さん。今の俺は、特定の彼女を作る気がないんだ。だから、ごめん」
「あつ……」

そう言っただけで、俺は後ろ手に教室のドアに手をかける。そうなのだ。夢の『ハーレム機能』を手に入れた俺にとって、全人類のほぼ半数がそのターゲット。今の俺は選ぶ方の立場。小鳥遊さんが悪いという訳ではない。むしろ今現在においては彼女候補の筆頭と言ってもいい。でも、選択肢は多いに越したことはない。

まだ慌てる時間じゃない。諦めたらそこで試合終了なのだ。

100%理想の彼女を手に入れるその日まで、俺は、戦う。

「……じゃ、俺はこれで。ほんと、ごめんね」

がらつ。……ぬるん。びしゃ。

「ぬおおおおお……！ なんじゃこらあああ……！」

背後の小鳥遊さんに謝罪の意味を込めた眼差しを送りつつ、でも確かな拒絶の意志を見せるために教室のドアを開け廊下に出ようとした俺を、何かぬらぬらしたモノが押し戻した。

「しょ、触手！？ ええええっ！ なんでドア一杯に触手が蠢いてるんだよ！？」

思わず尻もちをついた俺は慌てて左右を見回し、ベランダ伝いに隣の教室から脱出するというプランを選択。猛ダッシュで西日差し込む窓へとりつく。

「ぐっ！ ま、窓も、開かない、だと……！」

「あ、あの、無駄、だと思います。『時空固定』、しちゃってます、から……」

恥ずかしそうな声でそんな厨二っぽい単語を言うのは、小鳥遊さん。

——『時空固定』……異世界に行った時に無口な魔法使い子から聞いたことがある。簡単に言うときを止める魔法だとか何とか。……そのまま窓から外を見る。確かにさっきから差し込む西日は一切の角度を変えず、テニス部が打ちあげたボールは空中で止まってる。この寒いのに下半身のみユニフォーム姿の女子のアンダースコートもめくれ上がったままだ。……あれはE組の武田さんか。いい脚している。やはり女性の価値は胸だけではなく脚にもあると言っているんだろう。ぜひ一度対戦（してじっくり鑑賞）してみたいものである……じゃなく！

「な、ななな、なんだと!? 魔法!? 魔法だつて!?!」

「は、はい。ちなみにその子は『触手結界』魔法の『うね子』さん、です」

そう言つて小鳥遊さんが指さした先は先程の触手ドア。うね子さんとやらが挨拶するようにうねうねしている。その動きに合わせてすごい勢いで俺のSAN値が削られていく。

あまりのことに呆然とする僕。それを不思議そうに見つめる小鳥遊さん。

「あ、あの? 時間がないということでしたので気をきかせてみたのですが……。余計なお世話でしたか?」

あー。そうか。時間が止まってるのならオープニングに間にあうね。よかった。

「……いやいやいや。落ちつけ俺。あの、小鳥遊さん? 魔法だつて?」

「はい。魔法です。山田くん、あつちで見たことなかったんですか? 『時空固定』」

なんだと!?

「あ、あつち……つて、小鳥遊さん。まさか……」

「はい。私も、山田くんと同じで、『あの世界』に呼ばれて、帰ってきたんです。ただ私は、神様じゃなく魔王さんのほうに呼ばれた側でしたけど……」

そうか！ 神様に呼ばれた俺がいるんだ。魔王側が同じことをしないという保証はない。

「つ、つまり、小鳥遊さんは向こうの世界で俺に倒された魔王の仲間だったと……。え、も、もしかして魔王を倒された復讐で俺を殺そうと!？」

ちよつとまってくれ！ 今の俺は戦闘能力皆無だぞ!? そもそも風邪ウィルスのせいで俺、向こうでも一切戦闘なんかしてないし！ このクラスの魔法使いに襲われたら俺なんか秒殺だぞ！

「へっ？ 復讐？ そんなこと考えていませんよ？ そもそも魔王さん、生きてますし」

「ちよつと待つて。国王軍が魔王の首獲つてきたの見たぞ俺」

「あれは魔王さんが用意した人形、ダミーです。……魔王さんは、確かに他の魔物さんたちと違って死ぬことこそなかったけど、でも衰弱したのは事実でしたから。……今は国王軍に見つかっていない隠れ家でじつと体力の回復を図っているはずです」

「なんてこつた……」

くそっ！ それならそうと言えよ魔王！ それ知ってればもう少し向こうに滞在して、姫や女戦士や女神官や女魔法使いや女獣っ娘との時間を堪能してきたのに！

「わ、私、ですね。魔王さんの側近として勇者のパーティーを迎え撃とうとして、気がついたんです。勇者が、山田くんだったことに……。春から、入学式からずっと気になってた山田くんが、私が呼び出された世界にいる……これって運命なんじゃないかな、って」

俺の動揺をよそに、夢見るように語り始める小鳥遊さん。……そ

の、はにかむような表情と、背後のドアから見え隠れする触手のコ
ラボレーションがえらくシニールだ。

「……そして、一日で魔王軍を壊滅させた山田くんが、敵であるはずの私たちのために涙を流すのを見て、確信しました。『ああ。私は山田くんの、敵にすら同情して泣いてくれるこの優しさを好きになっただんだ』って……」

勘違いですそれ。ハーレム計画が駄目になったと思って泣いてただけです俺。っていうかどいつもこいつも俺の涙を深読みし過ぎだ。もって考える。頭使え。

あとね、その気持ち自体も多分、自分自身のものじゃないから。それ俺の能力だから。

異世界にいた俺には、と言うか今でもだけど、『ハーレム機能』がついてるからさ、俺の事を見ただけで女の子は無条件で俺の事を好きになっちゃうんだよ。

「だから、思い切って魔王さんに話したんです。全てを。そうしたら魔王さん、私の気持ちに同情してくれて、この世界に帰してくれました。……向こうで身に付けた、魔法の力を全てそのまま、で」

なんてことしてくれやがる魔王！　ってか覇肩だろそれ！　俺は『ハーレム機能』だけだったぞ！

「……そんな魔王さんの気持ちに応えるためにも、私、勇気出しました。……ずっと隠しているつもりだった気持ちを打ち明けようと……勇気がなくて、三日もかかったし、実は昨日、ちよつとズルして調剤した『惚れ薬』入りのクッキーも渡してみたのですけど、効果、なかったみたいですし。……やっぱり勇者様の力はすご

いですね」

控え目ながらも可愛いラッピングとは裏腹に、もの凄くどす黒い気配を感じるクッキーがあったのはお前のだったのかよ！ 何となく嫌な予感がして食わなくてよかったよ！

「だから、今度はもう一度。ちゃんと自分の口で言います。……好き、です」

「いや。小鳥遊さん。気持ちはいれしいけど、さっきも言ったように」

ピキン！

そんな効果音を出しつつ、教室の床、壁、そして天井までが一瞬で凍りつく。

これは『絶対零度』の魔法！？

別名『エターナルフォースドブリザード』！？ 俺は死ぬ！？

「ご、ごめんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくて……。か、感情が高ぶったりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって……！」

……『デット オア アライブ』ならぬ『デット オア ラブ』か……しゃれにもならねえよそんなの。……俺は必死に、生き残る術を考える。

「小鳥遊、さん」

「は、はい！」

「ごめん。今は彼女作る気になれないって言うのは本当なんだ。それに俺たち出会ったばかりでしょ？」

「あ、あの、一応クラスメイトになって八ヶ月ほどたってます、けど……」

間違えた。

「し、親しくはなつてないって意味ね！……だから、そのと、友達からということではどうだろう？」

「お、お友達、からですか？」

「そう。友達。俺、友達少ないからさ、人づきあいとか苦手なんだ。だから、その、い、いきなり彼女とかだと困るけど、まずは、友達からってことなら、いいかなあって」

正確には『少ない』ではなく『いない』のだが、この際そういう細かいことはどうでもいい。……それ認めると悲しくて涙が出ちゃうしな。

俺の起死回生の一言。俯いてその言葉を噛みしめるように聞いていた小鳥遊さんが、やがて、顔を上げて言う。

「わかりました。私、がんばります。いっぱい、いっぱいいっぱい尽くして、いつか山田くんに認められるようにがんばります。よ、よろしく、お願いします！」

そう言って控え目ではあるが、やっと笑ってくれた小鳥遊さんの笑顔は直視できないほど眩しくて、俺は危うく本気でこの子に惚れてしまうところだった。……が。

「だ、だから。浮気は、だめ、ですよ。山田く……ううん。晴樹く

ん！ …… あ、あの、私の事は『小鳥』って呼んでください、ね…
…」

……こうして俺の夢のハーレム計画は崩壊することとなった。

——異世界ハーレム彼女の逆襲によって。

小鳥遊 小鳥（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

一級フラグ建築士 VS 隼のフラグブレイカー

——異世界。

そこは俺にとって夢のハーレムであった。

豪華な椅子にふんぞり返った俺は、さて今日はどの娘とナニして遊ぼうかと、周囲に待るたおやかな女性たちを見回す。俺を見上げるその瞳はうっとり濡れ、「さあ私を選んで！　そして食べて！」言っているようで、この中から一人を選ぶという作業がまた、楽しくも心苦しい。

迷いに迷いつつやがて一人を選んだ俺が、『そうか。別に一人じやなくてもいいじゃん。よしこの際あと二、三人……』と他の娘たちも物色し始めたその時、轟音と共に雷が落ち、天から一人の小柄な人物が舞い降りる。その表情は長い前髪に隠れ、見ることが出来ない。

——その人物が、小さな口から呪詛の言葉を紡ぎだす。

「晴樹くん……。浮気はだめって言いましたよね……」

こつ、こつ、こつと軽い足音を立てて近づいてくるその人物。彼女が軽く左右に手を振るだけで、俺の命よりも大事なハーレム要員たちが一人、また一人と声もなく消えていく。

「や、やめろ……。近づくな……」

——『……私、山田くんのが、好きです。……良かったら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願いします』——

……昨日のことが思い出させられる。

前髪上げたら実は可愛かったというのは『眼鏡を外したら美人』に通じるものがあり、それだけでご飯三杯はイケる。控え目な態度、鈴を転がすような声。正直言って小鳥遊は俺の好みにはうちりあつてはいる。だがしかし。

問題は、ふたつ。

その一。……いくら可愛いとはいえ、チート機能を使ってまで迫ってくるのは反則だと思ふのだ。小鳥遊君。告白の為に時間を止める魔法使いなんて聞いたこともねえよ。

その二。……お前がチート機能を持っているように、俺も『ハーレム機能』を持っているんだ。俺の夢はハーレムを作り、さらにそこから厳選した最高の彼女を見つけること。その崇高な野望を邪魔すんじゃねえ。

「……って、本人を前にしたら言えないしなあ……」

凄まじい威力の『ハーレム機能』を持つこと以外は、今の俺はただの人。

魔王からその凶悪な魔法の全てを受け継いだ小鳥遊を振って怒らせてしまったら……そう考えるだけで身震いがする。

「何とか対策考えねえとなあ……」

頭の中で『脳内ハルキ君』一号から五号までを呼び出し、対策会議を開きつつ登校しようとマンションのドアを開ける俺であった。

「お、おはようございましゅー！」

囃んでる。ましゅってなんだよましゅって。可愛いじゃねーか。

ではなく。

俺は目の前に立つ小柄で伏し目がちな女の子に問い掛ける。

「た、小鳥遊！？　なんでここに！？」

「あ、あの……いっしょに登校したいなあ……って思ってた……」

「あ、そ、そうなんだ。ハハハ光荣だなあ。でもよく俺んち知ってたね？」

「そ、それは、その、こ、この子が調べてくれました……。探索系使い魔の『ミシル』ちゃんです」

きしゃあああー！！

挨拶のつもりなのだろうか？　小鳥遊の華奢な肩に止まっていた化け物、——外見的にはそうだな。ひよこくらいのエイリアンに悪魔の羽を付けたような感じ？　——が、まともに聞いたら石化してしてしまいそうな鳴き声を上げる。

朝っぱらからヘヴィなモノ見せるな。SAN値が下がるわ。

そんな俺の動揺をよそに、その『ミシル』ちゃんとやらの顎を撫でる小鳥遊。

「ありがとう。ミシルちゃん。あとでおいしいごはんあげるからね」

きしゃああああああ！！

多分喜んでいるのだろ。ばつさばつさとその蝙蝠のような翼を
はためかせるミシルちゃんという生き物。……こいつにあげる『お
いしいごはん』とやらが一体何なのかちよつと気になったが、それ
聞くとSAN値だけではなく食欲までなくなりそうなので黙ってい
た。

とりあえず。

「そろそろ行こうか小鳥遊。さ、そのミシルちゃん戻して。目立つ
から」

「あつ。は、はい」

小声で何かを呟く小鳥遊。その声が終わると、ぼんつという音を
立ててミシルちゃんが煙に包まれ消える。便利なもんだ。

「よし。じゃあ行くか。……つて、あれ？ あの娘は……？」

そう言っただけで歩き出そうとした俺の視界に、昨日の食パン娘が映る。

反射的に手を挙げて挨拶しようとした俺は妙なことに気がついた。
誰かを探すようにきよきよと周囲をうかがう食パン娘の目には、
俺が入っていないようなのだ。

やがてちよつとがっかりとした風に肩を落とし、歩き去る食パン娘。

「……なんだ？ おかしいな」

フラグが立たないなんて。

「え？ 何か言いましたか？ 晴樹くん？ ……あ、忘れてた」

何かを思い出したように軽く手を振る小鳥遊。その途端、ぱちんという軽い音がして、俺たち……というかこの一帯を覆っていた透明な膜のようなものが弾ける。

「何だ今のは？ 小鳥遊？」

「えっと、『隠密結界』を解除しました」

「なんでまたそんな物騒な物を？ 誰かに狙われているのか？」

ゴルゴ三十さんとかに。

「や。そうじゃなくなつて……。は、晴樹くんのお家の前で待つてるところ、見られたら恥ずかしいなあ……って思つて……。あ、でも嫌つて意味じゃないですからね」

そういつてうつむきもじもじしている小鳥遊。その仕草は可愛いけどやつてることは意外に大胆というか凶悪。それで今日、新聞届いてなかったのか。新聞屋すら追い払つたのかよ隠密結界。新聞代返せ小鳥遊。

「ん。……解除したのなら、まあいいや。行こうぜ。エレベーターはこつちだ」

そう言つて今度こそ歩き出した俺。

エレベーターの前で到着を待つのは、昨日のあのOL風お姉さん。ここはひとつ、爽やかなあいさつで更に好感度を上げておくべきだと、俺の中のハーレム魂が告げている。朝から（正確には夢の中

から）続くゴタゴタで引きつり気味の顔を無理に笑顔へと変え、声をかけようとする俺。しかし。

「あ。晴樹くん。エレベーター待たなくても平気ですよ。——えいっ」

グイン。

「うおうつ！ な、なんだ！」

一瞬で、五階にいた俺たちは一階のエントランスへと移動する。

「瞬間移動です。便利、ですよ？」

ほめてほめてと言わんばかりに小鳥遊が俺を見上げる。尻尾とかついてたらぶんぶん振り回しそうな勢い。相変わらず小動物系な彼女。名前は鳥類だけど。……ではなく。

「あ、あのな。小鳥遊。便利なのは認める。認めるけどな、こうぼんぽん魔法を使ったら目立つちまうだろ？ 少しは控えようぜ」

「あ……。そ、そうですね。ごめんなさい……」

途端にしゅんとしてしまう彼女。もともと小柄でうつむきがちなこの娘には、こういう表情もよく似合う。思わずSに目覚めてしまっている。しないけどな。女の子は愛でるものであって苛めるものではない。断じて。……いやでも本人が望むのなら別ではないか？ 小鳥遊って案外Mそうだし……。

先程逃げ出した『脳内ハルキ君』たちが再び集合し、『SMは有りか否か』という全人類にとって有意義な会議を開き始めてしまっ

たため、不覚にも俺は、エレベーターから出てきたOL風お姉さんに気付くのが遅れた。

あつ……そう思った時には件のOL風お姉さんは、軽くこちらに目線を送り、小鳥遊といっしょにいる俺を見てちよつとさびしそうに微笑んだまま歩き去っていくところだった。

……まただ。またフラグを立て損ねた。

絶対の自信を持つ『ハーレム機能』がうまく働かないことに不審を覚え、立ち尽くし考え込む俺の袖をそつと引つ張る弱々しい力。

「何だ小鳥遊。今ちよつと考え事をだな」

「そ、それ……。その……こ、小鳥つて呼んでほしいなあ……つて」
「ああ」

そう言えば昨日、そんなこと言ってたっけ。んー。でもなあ。

「すまん。小鳥遊。やっぱりその頼みはちよつと聞けないかも」
「え……。やっぱり私って迷惑ですか……」

先程とは比較にならないほどの暗い顔。というか泣き出す寸前にすら見える。

「違う違う。どっちかつーとお前が想像する理由とは逆のベクトルの理由だよ。……いいじゃん。小鳥遊つて名前。俺はそっちの方がいい」

小鳥も確かに珍しい名前だけど、小鳥遊姓は俺にはうらやましい。これは全国の『山田』だけではなく『田中』君『鈴木』さんも同

じように思っんじゃないかな？　ありふれた姓をもつ俺たちは『小鳥遊』のような個性ある姓名に憧れるのだ。

「『山田』なんかよりよっぽどいい名前だよ。『小鳥遊』。俺は好きだな」

そう言っただけで歩き始める俺。いい加減急がないと遅刻しちまうわ。

「まあ、『小鳥遊小鳥』って続くと正直どうかとも思うが……。あれ？　小鳥遊？　おい。なにしてんだ、早く行こうぜ？」

返事がないことに違和感を覚えふと振り向くと、エントランスで固まっている小鳥遊がいた。その顔は限界まで赤く染まり、今にも倒れそう。

「や、『山田』姓より『小鳥遊』姓がいいって……。そ、それってもしかして婿入りしたいっていう意思表示、もももしかして、プロポーズでしょうか……？」

「ちげえよ！　バーロー！　早く来い！」

すげーポジティブだなこいつ！　高校一年生の身分で求婚なんかするか！

俺は夢見がちなの少女の手を強引にとり、引きずるようにして歩き出した。

「……やっぱり遅すぎたか。美鈴、行っちゃったなあ」

「いつも美鈴さんと登校してるのですか？」

「んー。何しろ保育園以来、十年に渡る習慣だしな。……誤解するなよ？ 腐れ縁ってやつだからな？」

「あ。はい。わかってます。……いい人ですよ。美鈴さん」

「そうかあ？」

思いつき疑問形で言ってみる。いい人は俺に一生モノのトラウマを植えつけたりしないと思うぞ？ しかも複数。

「はい……。私、人見知りだからクラスにも馴染めなかったのですが、美鈴さんは数少ない友人です。いつも優しくしてくれます」
「そついうもんかねえ……。あつ！！」

それに気がついた俺は無意識に飛び出す。目の前にいるのは昨日の清楚な女の子。昨日と同じようにふらふらと車道に出そうになっている。

——昨日と違うのは車道のほう。そんな彼女に向かい、一台のトラックが速度を上げて迫ってくる。運転手は携帯片手に通話中のようで、歩道をよるめく彼女に気がついていない。

『危機的状況にある女の子を救う』……一級フラグ発動だ。

でも待て神様よ！ 確かに俺はハーレムが欲しい！ でもそのために女の子が危険な目に合うようじゃ本末転倒なんだよ！

「くそつたれ！ 間にあえ！！」

俺は限界まで腕を伸ばし、その女の子を引き戻そうとする。しかし、その手はむなしく宙を掴むだけで、彼女の身に届かない。

もういつそ俺自身の体をクッションにして彼女を救おうと思い、車道に飛び出す覚悟で足に力を入れた俺の顔の横を、凄まじい突風が吹き抜けた。

「っっっ！」

そのあまりにも強い風力は、よろける女の子をその威力で歩道側に戻し、俺の目の前で展開される予定だった悲劇は俺以外のだれにも悟られることなく回避される。

——その風は、俺の後方から吹いていた。

正確には、小鳥遊小鳥、その掌から。

「ま、間にあつて、よかったあ……」

そう言つてへなへなと座り込む小鳥遊。

「……よくやった。小鳥遊。風系統の魔法も使えるんだな」

「えっと、実は風系統が一番得意です。……あつちにいた時は、魔物の皆さんたちから、風みたいに早い小鳥つてことで『隼の魔法使い』って呼ばれてたんですよ。えへへ……」

異世界にもいるのかハヤブサ。いらん豆知識をありがとう。

ぺたんと地面に座り込みつつも、ほめられたのがほどうれしかったのか、にこにここと微笑む小鳥遊。ご褒美代わりに何となく頭を撫でてやる。

「わあ……」

わあってなんだわあって。頭撫でただけだろ。そんな蕩けそうなほど幸せな顔すんな。俺の方までときどきしちゃうじゃねえか。

「……って、しまった！ あの子は無事か！？」

慌てて振り向いた俺の目に映ったのは、風魔法の衝撃で転んでしまった女の子を抱えているトラックから降りた運ちゃん。……やがて二人の間に何らかの話がまとまったのか、女の子はトラックの助手席に乗り込み、運ちゃんはハンドルを握る。……恐らく念の為に病院にでも行くのであろう。

……なるほど。二度あることはサンドマン。砂男だ。いや意味不明。

俺はいまだに座り込んだまま呆けている小鳥遊を見下ろす。

つまり、こいつだ。こいつが全ての原因だ。

多分、本人にその気はない。ないと思う。ただ、溢れんばかりの俺への想いが、俺の立てるフラグを結果的に片っ端からへし折っていくのだ。恐らく、無意識に。

「……上等じゃねえか……！」

めらり。そんな音を立てて俺の中の『ハーレム魂』に火が灯る。

そっちが凄腕のフラグブレイカー……そうだな。異界での二つ名をもじって『隼のフラグブレイカー』とでも呼ばせてもらおうか……
…だとしても、俺だって捨てたもんじゃない。自称『一級フラグ建築士』である俺と、小鳥遊、お前のその力。

どちらが上か、白黒つけさせてもらおうか……。

静かに闘志を燃やす俺と、そんな俺が無意識に頭を撫でまわしているせいで、魂が抜けかけてしまっている小鳥遊。……そんな俺たちは時間が止まったようにその場に立ち尽くし……。

その日、学校に遅刻した。

一級フラグ建築士 VS 隼のフラグブレイカー（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています

「……すいません。山田です。遅刻しました」

「す、すいません！ 小鳥遊小鳥です！ 遅刻です！」

……『ハーレム機能』不調の理由と小鳥遊の正体に気がついた俺が闘志を燃やしていた時間は結構長かったようで（あとついでに小鳥遊の魂が抜けていた時間も）、結局、俺たち二人はホームルームの時間に間に合わず遅刻してしまった。

不幸中の幸いだったことは、今日の一時限目がロングホームルームだったこと。ロングホームルームは各クラスの担任が教壇に立つので、つまり。

「あら。山田君。先生心配したわよ！ ……あ。小鳥遊さんも遅刻だったのね。まあいいわ。二人とも席について」

……こういうことだ。『ハーレム機能』がばっちりかかっている菊池先生（二十七歳。独身）は俺に甘いのでお咎めなしで済んだ。……それはいいけど、菊池先生？ 小鳥遊の扱いがあんまりな気がしますぜ？ ついでに、小鳥遊。遅刻したことに気付かれないって、お前普段どれだけ影が薄いんだよ。

「……ふう」

朝から激しくSAN値が下がる展開が続いたため、席に着くなり溜息が出る俺。そんな俺に小声で話しかけてくるお隣さん。美鈴。

——席まで近いとか、腐れ縁にも程がある。

「……どうしたのよ。あんたが遅刻って珍しいじゃない」

ぼっちは目立つことを嫌うため、基本的にルールを守る。少し前までの俺もそうだったし、最近はフラグ乱立防止のため更に早起きだったから、確かに遅刻は珍しい。

「いやまあ。いろいろあつてな……」

思わず遠い目をしてしまう。イベント盛りだくさんの朝だった。うん。

「ふうん……。それって、小鳥ちゃんに関係あることなの？」

「……何でそう思う？」

「そりゃいつしよに遅刻してくればそう思うつしよ。それに……」

そう言いつつ、美鈴がちらりと目線を上げる。つられてそちらを見ると、何やら挙動不審な小動物——小鳥遊と目が合う。慌てて視線を逸らす小鳥遊。

「さっきからずっと晴樹を気にしてるみたい。……何があつたのよ？」

「何って言われてもなあ……」

むしろ俺が聞きたい。俺、昨日『友達から』って言ったよなあ……？

「昨日も言っただけど、ああいう大人しい子ほど危ないんだからね。手作りチョコに何か混ぜられたり、家の前で待たれたり、あんたに近づく女の子を排除したりとかしかねないんだから。そうなる前にちゃんとしておきなさいよ」

先生。うちの幼馴染がチートでピンポイントな千里眼の持ち主です。

あともうそれ全部体験済みです。かなり手遅れです。女って怖い。お前も小鳥遊も。

「ちゃんと……ねえ」

俺はもう一度小鳥遊を見る。

……俺の視線に気がついた小鳥遊が、小さく控え目に、指先を振っていた。

「さあ。今日のロングホームルームは月一回の恒例席替えタイムですよー！」

いえーい！ とノリのいい何人かの生徒たちが応えた。

何がそんなに楽しいんだお前ら。……いや、楽しいんだろうな。学校生活を満喫しているお前らにとって席替えは重要イベントの一つなんだろうよ。俺たちぼっちにとってはせいぜい「後ろの方がいいな」とか「日当たりいいほうがいいな」くらいしか希望はないけどさ。

……と、先週までの俺ならそう思ってたろう。

今は別の意味でどこでもいい。なぜなら俺には無敵の『ハーレム機能』がついている。隣がどんな女子であれ、一瞬でフラグを立てることが可能だからだ。

俺はのんびりと担任の用意した席替え用クジに並ぶクラスメイトたちの最後尾につく。……と思っただけだった。後ろにちっこいのがいた。小鳥遊だ。

「……晴樹くんの近くになれますように晴樹くんの近くになれますように晴樹くんの近くになれますように……！」

「……おい小鳥遊。目立つからそうやって俺の名前呪文のように連呼すんな」

怖いわ。

「ひゃい！……あ、でもきつと目立ちませんよ、多分……」

「なんでだよ？……まさかまた隠密結界でも使ってるのか？人前で魔法使うのはやめとけとあれほど」

「違いますよう。……だって、ほら」

そう言っつて小鳥遊が指さしたのは女子の一群。何やら大騒ぎしている。

「山田君の隣を！お願い神様！」

「やまだーやまだーやまだー……」

「山田晴樹！山田晴樹の近くを一枚よろしく！」

「やっまっだっ！やっまっだっ！」

「山田君が教卓の真ん前になりますように……。いつそ担任特権で……」

……。

何あの山田祭り。山田特売日か？
ちよつと君たち怖いんですけど？
あと約一名、生徒じゃない大

人の女性の声が混じっているような気もしましたが、俺の勘違いですよね菊池先生？

異様な教室の状況に怖いっているうちに、くじ引きは俺の番になる。その瞬間、教室は静寂に包まれ、俺の一挙一足にクラスメイト全て（プラス大人気ない大人一名）の視線が集まる。その有様は、まるで年末恒例の異種格闘技トーナメント抽選会場のよう。もちろん俺の立場は大本命選手。俺の引く一枚に、このクラスの女子の思惑が何重にも絡まる。

ゴクリ。

その雰囲気吞まれた俺は箱の中から一枚のくじを取り出し、何となくやらなくてはいけないような、そんな義務感に駆られ、そのクジのナンバーを読み上げる。

「や、山田晴樹。十一番」

うおおおおおおおお！！！！

「十一番！？　つてことは隣は五番と十七番ね！」

「外れたわ！」

「五番ありませんかー。五番買いますよー」

「納得できません！　やり直しを要求します！」

「やり直し要求多数により再実施はありね……。いつそもう山田君の席は教卓前の指定席に、うっん、この際だから教卓を席にしてみようのも……」

うん。もう一度言う。お前ら怖い。

俺の隣の席を売るな買うな。ダフ屋は違法行為だ。ちなみに幾ら出す気だ？

あと菊池先生はもう少し自重してください。大人なんだから。

一部女子生徒（プラスどうしようもない大人一名）によるクジの再実施が叫ばれたが、この展開に呆れている男子生徒たちが率先して民族大移動を始めると、やがて諦めたように女子も動き出す。…すまん。男子生徒の諸君。俺も君らの立場なら呆れる。というかむしろ怒る。それどころか呪いすらしたかもしれない。比較的大人しい男子ばかりのクラスで良かったと心からそう思う。

窓際最前列から一、二と続き、廊下側最後尾の三十六で終わるこの順番、つまり俺の席は窓際から二列目、後ろから二番目、なかなかいいポジションだ。

「俺の席はここか。……一ヶ月よろしくな。お隣さん」

「ええ。『また』一ヶ月よろしく。お隣さん」

右隣にいたのは見慣れたというよりもはや見飽きた顔。美鈴。

腐れ縁もここまで来るとすごい。もう鎖縁と表現を変えるべき。

ま、気心が知れているってことではある意味よかったのかもしれないけどな。

「で、左隣は……っと」

反対側に振り向いた俺は、ふわりと爽やかな柑橘系の香りに包ま

れる。

こ、これは、まさかっ……………！！

「一ヶ月、よろしくね山田君。いい席取れてよかったー」

そう言つてにこりと微笑んだこの天使。いや違う。長谷川佐代子さん。

「……………神様……………！」

俺は思わず胸の前で十字を切る。いや別にクリスチャンって訳ではない。

それぐらい、うれしかったのだ。長谷川さんの隣が。

クラスでも目立つ方じゃない。でもきつと密かなファンは多いと思う。

綺麗に切り揃えられた前髪。でもそのさらさらの髪は実は腰に届くほど長く艶やかだ。ちよつとたれ目がちな瞳と小さな口が上品さを醸し出し、それでいて常に笑顔で周囲に優しい雰囲気振りまく。

何より。

『ハーレム機能』を手に入れる前の、凶悪な俺の目を避けることなくまっすぐ見つめ、他のクラスメイトたちに対する態度と一切変えることなく接してくれた彼女。それが当時の俺にとってどれほどうれしかったことが……………。

「……………山田君。山田くん。おーい」
「はっ」

危ない。幸せの余り思わずトリップしてしまった。もう異世界には用はないのに。

「……こちらこそ、よろしく」

クールに行こうぜクールに。

「はい。……やー、実はこの席売ってくれて言われてただけどねー。日当たりいいし、やめといてよかったよー」

そう言つて陽だまりの猫のように目を細める長谷川さん。『隣の隣で良かった』なんて、そこまで言ってくれることまでは期待しない。……それに、今の俺には『ハーレム機能』がついている。この力があれば、すぐに長谷川さんとも仲良く……。

つんつん。

「ん？　なんだ？」

控え目に背中をつつかれる感触に、俺は振り返って——絶句した。

そこにいたのは、長い前髪では隠しきれないほど瞳を輝かせた小鳥遊小鳥。

俺には小鳥遊がうれしさのあまり力一杯振り回している尻尾の幻すら見える。何でお前そんなに子犬っぽいんだよ。お前鳥だろ。鳥類だろ。隼なんだろ。

残念。小鳥遊さんは人間でした。だから日本語を話します。小さな声で。

「やった。やりましたよ晴樹くん。お隣にはなれませんでしたけど後ろです」

「俺の後ろに立つな」

無意識に撃つちまうから。

「授業中ずつと背中を見つめていられます」

「黒板見ろ」

俺の背中に穴が開くから。

「じゃあ語りかけます」

「ノートとれ」

俺の背中に呪文呟くんじゃねえ。何か湧いて出てきたらどうする？

小鳥遊の発言一つ一つにダメ出しをする俺。でも小鳥遊の笑顔は崩れない。何だこいつ？ やっぱりMなのか？ 普通ここまで言われたら心折れないか？

「えへへ……。なんか、いいですね。こっこの」

「お前やっぱりM……。っと。じゃない。……。一体、何がいいんだ？」

「か、会話のキャッチボール？」

「……………」

……その時俺の脳内には、俺が力一杯、明後日の方向へ投げつけるフリスビーを全力疾走でうれしそうに追いかける子犬の姿が浮かんだ。……うん。ぴったりだ。

「ま、お前が楽しいのならそれでいいや。……くれぐれも言うっておくけど、学校で魔法使うなよ。問題起こすなよ。俺に迷惑かけるなよ。わかったな」

「はいっ！」

声は聞こえていないだろうが、そんなやり取りをする俺たちを興味深げに見つめる美鈴。……うーん。こいつ鋭いからなあ。千里眼

だし。気をつけないと……

ほんと、何も無いことを祈ろう……。

——往々にして、神様というのは案外性格が悪いものである。彼らは、真剣な願いであればあるほど、叶えてはくれない。

俺の真摯な願いは、早くも次の授業で裏切られることになる。

カリカリカリ……。

鉛筆を走らせる音だけが、静かな教室に響く。

二時間目。数学の授業は小テストだった。

背後に不安を抱える俺にとって、ディスカッションをしるとか言われる授業よりテストのほうが、むしろ今は都合がいい。

「あつ……」

小さな声が隣から聞こえる。そつとそつちを見ると、長谷川さんが消しゴムを落とした模様。それはころころ転がり俺の足元へ。

……やるじゃねえか『ハーレム機能』。ちょっと控え目なフラグだが、つかみとしてはむしろこのくらいでちょうどいい。

俺は数学担当の森先生に気付かれないよう、そつと屈んで消しゴムを取ろうとする。

「あつ……」

もう一度、先程と同じ声。違ったのは発せられた位置。それは驚くほどすぐそばから聞こえた。具体的には、互いの吐息が顔にかかるくらいの近さから。

消しゴムを掴むつもりで握った俺の手は、柔らかく華奢な長谷川さんの手を掴んでいた。……俺に気を使って自分ですらとらしたのであろう。目の前に、俺と同じく屈みこんだ長谷川さんの、綺麗な白い顔がある。

「……」

俺は無音で叫び声をあげる。我ながら器用だと思う。その表情に驚く長谷川さんは、しかし、すぐにいつものように優しく微笑み、そっと人差し指を立てて自分の口に充てる。

「しーっ……ねっ？」

ずきゅーん。

撃ち抜かれた。いや、もう木っ端みじんに打ち砕かれた。おいだめだろうその天使。なんでそんなに可愛いんだよちくしょう。ついでに神様。『ハーレム機能』をありがとう。また何かあったら呼んでください。いつでも馳せ参じます。

……しかし、幸せな時間は長くは続かない。

キーンというその微かな音。それに気がついた人は他にもいたかもしれない。しかし、その音の正確な意味を知るのはこの世でただ一人。いや二人だけだ。

その音は『向こう』でよく聞いた音。……すなわち、魔法の起動音。

慌てて視線を上げる。ちょっとだけ悲しげな表情をした小鳥遊。その視線は握りあった俺と長谷川さんの手に固定されており、自身の発動する魔法に気が付いていない。

——『う、ごめんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくて……。か、感情が高ぶったりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって……！』——

昨日の放課後、小鳥遊の言っていた言葉が脳裏によみがえる。

まずい。まずいますまずいます、まずい！！

命の危険もさることながら、このまま魔法が発動したら小鳥遊の正体がばれる。

現代社会に登場した魔法使いがどんな運命をたどるか、どう考えても悲惨な未来しか見えない。国に捕まり実験動物扱いとか、さすがにかわいそうだろ！

……気がついた時には体が勝手に動いていた。

「小鳥遊！　ここがわからん！　教えてくれ！！」
「きゃっ！」

振り向きざまにそう叫びつつ、小鳥遊の肩を押さえる俺。いきなりの事に驚いた小鳥遊から、無意識に発動しかかっていた魔法の気配が消える。よかった間にあつた！

「おい小鳥遊。お前今魔法を……」

「え、あ、ああ！？」

「……つたく。仕方のないやつだなお前は」

「……仕方のないやつなのは、お前だ。山田」

「へっ？」

振り返るとそこには、鬼の表情をした森先生。わお。

「先生、教師生活は結構長いが、これほど堂々としたカンニングを見たのはこれが初めてだ。……何か、反論はあるか？」

「……あー、えー、はい。すいませんでした。全面的に俺が悪いです」

「ではこのテスト、お前の答案は没収。後日、補習で再実施ということでもいいな」

「はい。もう先生のおっしやるままに……」

おかしいなあ。俺、先生を含めたクラス全員の命の恩人のはずなんだけどなあ。

「とりあえず、廊下に立ってなさい」
「はい」

すくすく廊下へと旅立つ俺に向け、何度も何度も涙目で頭を下げる小鳥遊。

……ま、いいよ。

さすがに鳥類魔物目イヌ科の小鳥遊とはいえ、実験動物にされるのを黙って見ていたら夢見が悪いし。だからこれはお前のためじゃない、今後の俺の安眠の為にしたことだ。そんなに気にするな。……でも。でもな。そんな些細なことより許せんことがある。

無人の廊下に出た俺は、一人、魂の叫びをあげる。

「……くっそお!! せっかくいい雰囲気だったのに! ……おのれ『隼のフラグブレイカー』! 次は絶対負けないからなあああ! ……!!」

がらっ!

「うるさいぞ山田! 廊下じゃなく外に出るか! ああん?」
「す、すいませんでした先生! 静かにします!」

……とほほ。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています（後書き）

12/16、まさかのジャンル別日刊二位……。

信じられないというか、「まさかドッキリ？」というのが本音です。
読んで頂いた皆さん、本当にありがとうございます。

多くのお気に入りだけではなく、ワールズエンド様から
素敵なレビューまでつけて頂き、この作品は幸せ者ですね。

更新がんばります。

もしよろしければ感想が頂けたら、とても、とってもうれしいです。
これからもよろしくお願い致します。

幼馴染は千里眼

米つきバツタというものをご存じだろうか？

日本名でシヨウリュウバツタというバツタの通称である。こいつが後ろ脚を押さえられると、まるで米をつくように頭を上下に振ることからその名がついた。ちなみにその姿を揶揄してペコペコと頭を下げる人という意味に使ったりする。

何でそんないらん豆知識を披露するかって？

その理由。それは今、俺の目の前に等身大（よりやや小さい）の米つきバツタがいるからだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」

授業終了のチャイムと同時に、弾丸のごとく廊下にいる俺の元に走り寄り、それはもうすごい勢いで頭を上下に振る小鳥遊。見てるこっちの目が回りそう。

「あー……。もういいから。うん。次から気をつける」

本当は全く許してなどいないが、小鳥遊本人の涙目よりも周囲の目が痛いのでそう言っておく。目つきの悪い俺に小柄な小鳥遊が頭を下げまくる姿は、他人から見たらチンピラが小学生女子相手に力ツ上げしているようにしか見えないだろうし。

そういう訳で大変不本意ながら、もう怒ってないぞーという意味を込め、二、三度軽く小鳥遊の頭をポンポンと叩き、俺は教室に戻る。置いてきぼりを食った小鳥遊が肩を落としているようだが、ま、

少しは反省してもらわないと困るし、いいだろ。

「おー。カンニングの現行犯だー。おかえりー」

間延びした声でそう言いつつ、俺を迎えてくれるお隣の天使。いや長谷川さん。

「あれ？ でも山田君、カンニングしなきゃいけないほど成績悪かったっけ？」

俺が答える前に、横から口を出してくるお隣の悪魔。いや美鈴。

「晴樹、数学は悪くないよ。前回のテストでもこのクラスで二位だったし」

「よくそんな細かいことまで覚えてるな、美鈴」

「うん。だって一位、私だし」

うわー性格悪いなこいつ。知ってたけど。

「だからカンニングの必要なんてないはずなんだけどね。……さすがにもう、ごまかしはきかないと思うわよ？ 晴樹。悩みがあるなら言いなさい」

「む……」

——実は異世界からチート機能持ち帰った小鳥遊さんに迫られているんです。

……言えねえ……。

「……すまん」

「そ。無理には聞かないから言いたくなったらどうぞ」

これが美鈴の数少ない美点の一つ。こいつは俺に対して踏み込み

過ぎることがない。なんだかんだと世話を焼きたがるが、ある一線を超えることはない。多分、この絶妙な間合いを維持できるからこそ、俺と美鈴は腐れ縁のままでいられるのだ。その点には、まあ、ほんの少しだけ感謝していてもいい。

「……あんたのことは、まあいいわ。でも『あれ』なんとかしたほうがいいわよ」

俺は美鈴の視線に合わせて『あれ』とやらを見る。……小鳥遊が掃除用具入れのロッカーとお話をしていた。……大丈夫かあいつ？ どうでもいいけど、隅っこが似合うなあ。小鳥遊。

「よく言うでしょ？ 『ペットを飼うからにはちゃんと世話をしなさい』って。あんた、飼い主として何とかしなさい」

「俺も結構ひどいこと言うほうだけど、お前には負ける。あと俺は飼い主じゃねえ」

友達をペット扱いするなよ。そりゃ確かに小鳥遊は小動物系だけどさ。

「……ま、昼休みにでも話しておくよ。ありがとな。美鈴」

しかし、この日、『小鳥遊小鳥と語り合う昼休み』は来なかったのである。

四時限目。相変わらず雑談の多い日本史の時間に、それは起きた。

「あー。次のページ。小鳥遊さん。読んでください」
田中先生のご指名は小鳥遊小鳥さん。

「……ん？」

返事がない。ただの……ではなく。どうした小鳥遊？ 今度は机とお話するのに夢中で指名に気がつかないのか？ 仕方ないな。

「おい、小鳥遊。指されてる指されてる。五十二ページから……」
振り向いた俺はそこで言葉に詰まる。前髪に隠れていてわかりにくいが、小鳥遊の顔色が悪い。悪いというか白い。え？ どうした小鳥遊？ 机にひどいと言われて傷ついたのか？ チビとか小動物とM体質とか。

「あ、ごめんなさい。晴樹くん……。五十二ページ、ですね……」
「お、おい。顔色悪いぞ？ 平気か」
「だいじょうぶですよ。だいじょうぶ……」

ボタン！

「うおっ！」

無理して立ち上がろうとした小鳥遊が前のめりに倒れる。つまり俺の方へ。

反射的に受け止めた俺は、その想像以上の軽さと細さに驚く。

「た、小鳥遊さん！ 山田君！ 平気かね！？」

「お、俺は平気です田中先生。でも小鳥遊が……」

完全にくたつとしている。おかしいのは顔色だけじゃない。なん

か変な汗をかいてるし、呼吸も早い気がする。

「おい。小鳥遊！　おい！？」

「ん……。ごめんなさい。晴樹くん。なんか、くらくらして……」
意識はあるみたいだ。一安心……。はできないよな。仮にも女の子だし。

「田中先生。小鳥遊、体調悪いみたいです。このまま保健室行つてきます」

そう言つて俺は器用に体を反転させ、小鳥遊を背負う。……うわ、やっぱり軽い！　これ本当に俺と同じ年の人間の体かよ。女体の神秘だわ。

……ここでドラマや映画なら『お姫様抱っこ』とやらをしていくのだろうが、さすがにそれは……。ねえ。いや、そんなこと考えてる場合じゃない。しっかりしろ俺。

「山田君。任せました。あとで担任に報告もお願いします」
「了解しました。行つてきます」

「……疲れによる貧血。二、三時間寝てれば歩けるようになる。以上」

そう男前に断言するこの人。擁護の吉田先生。眼鏡に白衣の美人教諭。

「言いきりますねえ。ホントに大丈夫なんですか？」

「私の言うことを疑うのか？ ああん？」
「滅相もございません失礼しました！」

この吉田先生に『ハーレム機能』が通用しない理由。それは極めてシンプル。

俺なんかより段違いに怖いのだ。この人の目。俺がチンピラクラスだとしたら吉田先生はもう完全に本職。ヤの付く職の人にしか見えなない。ヤ。ト運輸の人ではないぞ。

俺の『ハーレム機能』は俺を嫌い避ける女性にしか通じない。つまり俺を恐れないし、嫌つてもいない、というか歯牙にもかけていない吉田先生には全く通じないのだ。

「ま、心配ならあとで様子を身に来い。……ほら、チャイムが鳴った。ぐずぐずしていると昼飯食い損ねるぞ？」

「ん……。そうですね。じゃあ俺は戻ります。失礼しました」

「おう。こいつも動けるようになったら教室に戻す。担任にもそう伝えておいてくれ」

「イエッサー、ボス」

——しかし小鳥遊は、昼休みが終わり、午後の授業が全て終わっても、教室に戻ってくることはなかった。

「……はい。晴樹。これ」

西日差し込む放課後。考え込む俺の前にカバンと子犬模様の巾着

袋が置かれる。

「なんだこれ？ 荷物もちか？ 俺まだジャンケンしてないんだけど？」

「小学生じゃあるまいし……。それ、小鳥ちゃんの。行くんでしょ？ 保健室」

「待て美鈴。なぜ俺が保健室なんかに」

「顔に書いてある。『小鳥遊が気になる。でもどうしよう。行こうかなやめようかな』。……他の人はだませても、この私だけはだませないよ。晴樹」

降参。

「二時間目の事があるからな。小鳥遊も俺と顔合わせづらいんじゃないかと思ってる……。って言ったら、これは『逃げ』かな？」

「逃げ、だね。……ま、いいわ。そんな迷った顔見せるくらいなら今日はやめておいたほうがいいかもね。私が届けてあげ……」

そう言いつつ荷物を持ち上げた美鈴の声が止まる。何だ？

「……と、思ったけどやめた。やっぱり晴樹。あんたがいくべき。じゃあ私は帰るから、あとはよろしく。逃げるなよ……。あ。あとこれ。あげる。飲みかけだけど」

そう言っただけ渡されたのはペットボトルのお茶。……なんだこれ？ 意味不明なんですけど美鈴さん。お茶でも飲んで落ちつけて意味か？

「どういう意味だこれ……？ って！ お、おい。美鈴！」

俺の制止の声に振り向きもせず、ひらひらーっと手を振って行ってしまう美鈴。意味がわからん。いいじゃんカバンくらい届けてやれよな。冷たい奴め。

仕方なく二人分の荷物を手に保健室に向かう。ほんと、今日は厄日だ……。

「失礼しまーっす。……あれ？ 先生いないのか……。おい小鳥遊ー。少しは体調戻ったかー？ 荷物持ってきてやったぞー」

わざわざ大声で言うのは、ベッドに横たわる女性に対する礼儀だ。もし衣類が乱れてたとしても、この声を聞いて正せる時間がとれるだろ？ うん。俺マジ紳士。あれだよ。無神経にカーテン開けたら、着替え中の美少女が「きゃっ！」って悲鳴を上げるとか、そんなのは二流ハーレム師のやることなのさ。

「あ……は、晴樹くん！？ ご、ごめんなさいまた迷惑を」

「いいから。友達だろ？ 気にすんな」

意識的に『友達』に力を入れてみる。効果、あるのかなあ？

「ほんとに私ダメダメで……。泣けてきます……」

俺の知る限り小鳥遊。お前は人生の半分近くを涙目で過ごしているような気がするんだが？ ま、それはどうでもいい。俺の人生じゃないし。

「で、もう平気なのか？ 体調？」

「は、はい。ぐっすり寝たので……。寝不足で倒れるなんて恥ずかしい……」

「そうか寝不足だったのか。そりゃ寝れば治るわな……って、おいノリ突っ込みって難しい。芸人さんって大変だ。……ではなく。」

「人を散々心配させといて寝不足だあ！？ おいこら小鳥遊！」

「ご、ごごごごめんなさいっ！」

俺はベッドに横たわる小動物を睨みつける。前髪のカーテンをも貫くその眼光に怯え、もそもそと布団に潜り込む小鳥遊。

「じ、実は、この三日ほど、あんまり寝てなくて……ごめんなさい」「あ、そっか。すまん。異世界からこっちに帰って来たばかりだもんな。そりゃ向こうの事も魔王の事も気になるだろうし、寝れなくても仕方ないか」

意外に繊細なんだなあこいつも。怒鳴ったりして悪かったよ。

「二日前までは『どうやって晴樹くんに告白しようか』って考えてたら眠れなくて、昨日は『ついに告白しちゃった……』って思い返してたら寝れないし……で」

「何でお前の頭ん中は晴樹くんしかいねえんだよ！ 晴樹ハーレムかよ！ この鳥頭が！ あっちの世界の魔王とその一味に謝れ！

ついでに俺にも！」

「ご、ごめんなさい魔王さん。ごめんなさい魔物さん。ごめんなさい晴樹くん！」

律儀な奴め。あと魔王魔物と同列で俺に謝るな。なんか俺まで魔王軍の仲間みたいじゃねえか。俺、勇者だぞ一応。何もしなかった

けど。風邪ウィルス万歳。

「……まったく。もういい。俺は帰る。小鳥遊は念のためもう少し休んでろよ」

心配して損したわ。寝不足程度なら一人で帰れるだろ。

そう考えつつベッドに小鳥遊の荷物を置こうとして、うっかり巾着の紐を引っかけてしまう。子犬柄っていうのがこいつらしい。……っと。中は見ちゃいかんよな。女の子の秘密のブツとか出てきたら気まずいし。

しかし、俺は見てしまった。入っていたものはそんなブツではなく……。

——その巾着の中身。ピンクの小さい弁当箱と、それと比べるとやたらとでかい、明らかに男性用とわかるもう一つの弁当箱。

……その意味を理解し、思わず固まってしまった俺。そして、黙り込んでしまった俺が気になったのか恐る恐る布団から顔を出す小鳥遊。

「あっ……」

「あ、その、悪い。勝手に見るつもりはなかったんだ。なんか、こう、紐がベッドの柱に引っかかって……」

しどろもどろになる俺を見つめ、やがて寂しそうに微笑む小鳥遊。

「あはは……。それ。それも寝不足の原因なんですよね。……晴樹くん、何が好きなーとか、卵焼きは甘いほうがいいのかなーとか、いつしょにお昼とか幸せだなーとか、いろいろ考えてたら、何かすつごく時間たつのが早くって……」

「……………」

「でも、やっぱりダメですね私。せつかく作ってきても、肝心のお昼の時間にぐーすか寝ちゃうなんて。笑っちゃいますよね。バカですよねえ」

……うん。お前はバカだ。こんなハーレムが夢とか本気で言うてる男にそこまで惚れてしまったお前はバカだ。……でも、俺は笑わない。笑えるか。

「……よこせ」

「へっ？」

「それ、よこせ。あと箸も」

「は、はいっ！ どうぞっ！」

しゅぱ！ そんな効果音がつきそうな勢いで箸と弁当箱が差し出される。

「お前も食え。昼、ぐーすか寝てて食ってないんだろ？」

「え、でもここ保健室……」

「いいから！」

「は、はいいい！ ……あ、でも飲み物が……」

どん。

「お茶でいいだろ？ 紙コップなら薬飲むとき用のがあるしな」
「は、はあ……。用意周到なんですね……」

俺の、チートでピンポイントな千里眼の持ち主で、お節介な幼馴染が、な。

「いただきます」

「い、いただきます」

「……小鳥遊。揚げ物にはソースだろ？」

「え？ うちマヨネーズですよ？」

「このマヨラーが。ブルドック様とオタフク様に謝れ」

「マ、マヨネーズだっておいしいのに……」

「明日もマヨネーズかけの揚げ物が出たら残すぞ」

「そ、そんなに嫌がらなくても……って。え？ 明日？」

「もう一度言おうか？ 明日もマヨネーズかけの」

「は、はいっ！ 今日、帰りに買います！ ソース！ 各種！ 箱で大人買いします！ 買い占めます！ そして明日のおかずは原色が見えないほどソースまみれにします！」

「それはやめろ。『高血圧で早く逝け』って意思表示かと思っちまうから」

コクコクと頷く小鳥遊。

「……心配だから監視する。メシ食ったらスーパー行くぞ。お前がちゃんとソースを買って帰るか不安だからな。飼い主としてきちんと見張る義務がある」

「か、飼い主って……。あと、さすがにソースくらい一人で買えます……え？ あ、あれ？ それってもしかして送ってくれるって」

「その先を口にしたら今すぐ俺は帰るからな。一人で」

慌てて口を両手で押さえる小鳥遊。オーバーアクションなやつだ。

ま、あれだ。食いものには罪はない。

だから、今日は負けてやるよ。

「隼のフラグブレイカー」

明日は容赦しないからな。『ハーレム機能』の真の力、見せ付けてやる。

「……は、晴樹くん、晴樹くん」

「なんだ？」

復讐に燃える俺に小声で話しかける小鳥遊。その手にはフォークに刺したタコさんウィンナーが……。

「あ、あーん……」

「するかボケえ！ 調子に乗んなこの鳥類が！ こんな保健室にいられるか！ 俺はもう帰るぞ！」

「あ！ 冗談ですごめんなさい！ 待つて！ 帰らないで！ おいてかないでええええ！！」

やっぱりダメだ！ ペットは甘やかすと付け上がる！

明日こそは泣かせてやるからな小鳥遊！
いつも泣いてる氣もす

るけど！ 吠え面かせてやるから覚悟しとけよ！！

……いぢぢぢぢぢぢ。

幼馴染は千里眼（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

はじめてのおかいもの……は修羅場

——ここは姫神商店街。

調子に乗った小鳥遊の「あーん」発言により、買い物に付き合う約束を本気でキャンセルしようとした俺に対し、小鳥遊はその小さな体の一体どこに……と思うようなすごい力でしがみつき、この世の終わりが来たような悲しい目で見上げてきた。

……あれだ。子犬のしつけで「お預け！」を教えようとした飼い主が、いざやってみたらその子犬のあまりに切なげな表情に負けてしまった……。そんな感じ。

結局、渋々ながら買い物に付き合う俺は、多分、将来ペットブリーダーにはなれないと思う。なる気も無いけどな。俺の夢はハーレム王だし。

「……な、なんか、すごいですよね。ほんと」

「なにがだよ？」

「え、その……晴樹くんとお買い物すると節約になるなあ……って」

しみじみとそう呟く小鳥遊のマイバック（子犬柄）は、溢れんばかりの食材でぱんぱんだ。大根一本はいい。切り売りとかより新鮮そうだし。……白菜丸ごと1個、ネギが3本……小鳥遊家は今夜

はお鍋だなきつと。……ニンジン2本、ゴボウが5本……混ぜご飯の具としては最適だな。うん。……しかしニンニク20個。カイワレ4パック、ナス6パック……これらはどう処理するのだろう？特にニンニク。窓から吊るして魔除けにでもするのだろうか？異世界の仲間たちやミシルちゃんが悲しむぞ？

当然、小さな小鳥遊の小さなマイバック（子犬柄……が限界まで詰め込まれた野菜のせいで引き伸ばされブルドック柄化している）にそんな大量の野菜類が収納しきれないわけは無く、大変に不本意ながら俺もその一部を持つ羽目になる。

「あ、あの、すみません。荷物持ちさせちゃって……」

「……そう思うならなぜこんなに買い込む？それとも小鳥遊家はTVが取材に来るような大家族なのか？」

「うちはお母さんと私の二人暮らしです。お父さんは単身赴任で海外です」

「そりゃ寂しいな。……おいまで。二人暮らしでこの量って……？」

「だ、だってそれは……」

「あつ！小鳥ちゃん！今日は鶏肉のいいのが入ってるよ！買っていきなよ！……あれ？その人は彼氏かい？」

「あ。お肉屋のおばちゃん。こんばんは。……この人は、お友達、の、晴樹くんです」

『お友達』のあたりで少し言葉に詰まっていたが、気が付かなかったことにする。

「へえ、そうかいそうかい！……いやあ、いい男だねえ！おばちゃん気に入った！よし！今日の特売品のこの上ロース、十円でいいや！もってきな！お兄ちゃん！」

「じゅ、十円！？ありがとうございますおばちゃん！頂きます！」

「いやまで小鳥遊！これ以上まだ買うのか！肉だからか！？やっぱリイ又科なのかお前！？」

「だって十円です！買います！買わずにはいられません！」

「そ、そのかわり、小鳥ちゃん……。またそのお友達、連れてくるんだよ……」

「はい！任せてください！」

「てめえ小鳥遊！勝手に俺を売るな！あと肉屋のおばちゃん！

……心配しなくても今度は俺一人で来ますよ。素敵なあなたに会いに……」

「……ぽっ」

「ああっ！お肉屋のおばちゃんが恋する乙女の顔になってます！」

……そう。そうなのだ。今の俺は『ハーレム機能』全開中。

さつきからずっと、どの店に入っても店番が女性であればこの調子で、値引きとおまけのフルコース。また小鳥遊が『値引き』とか『おまけ』とかいう言葉に弱く、勧められるもの全部受け取るのでこの有様。……しかし上ロース十円って何の冗談だ。怪しげな生き物の肉ではないだろうな？ミシルちゃんとかの。明日の弁当には注意したほうがいいかもしれん。

しかし。

「……なあ、小鳥遊。お前、気にならないの？」

「はい？ 何がですか？」

「なにつて……あー、やっぱいいや」

「????」

……普通さ、自分が好きな相手に他の女性が色目使ってるのを見たら気にならないか？ 俺、長谷川さんに声かけるナンパ野郎見つけたら呪うぞ？

「やっぱり男の人とお買い物ものするのっていいですねえ。荷物持ってもらえるし、何よりその相手が、か、かつこいいと、おまけまでしてもらえますし……えへへ」

「照れるくらい言うな」

小鳥遊さん、超ご機嫌。……何か納得がいかない。

こいつには嫉妬とかいう感情が存在しないのかもなあ。……試してみるか。

「小鳥遊。ちょっと休憩しないか？ ワックあたりで」

日本中にあるファーストフード『ワック』。正確にはワクトナルド。関西では『ワクト』と呼ぶのが一般的。

「わっく……？ 女性自衛官教育隊のことですか？」

「そりゃWACだ！ ここは朝霞じゃねえ！ 東部方面混成団は駐屯してねえよ！」

なんで知ってんだよそんな自衛隊豆知識！ 本気で驚いたわ！

……ああ、この会話に興味を持った人がいるのならばあとでググる

といい。検索ワードは『女性自衛官』な。
え？　なんで俺が知ってるのかって？　そりゃあんだ、軍服着た女性らしい。それ以上の説明が必要か？　いらんだろ？　いるわけがない。

「あ、ワクドナルド屋さんのことですね」

なんだよワクドナルド屋さんって。お前は田舎のおばあちゃんか。

「い、いいですけど……。私、あんまり利用したことがないので……」

「へえ。珍しいな今時。ファーストフード嫌いなのか？」

「いえ。そういうわけでは……。ああいうお店って、女の子一人で入るのって結構勇気があるんですよ？」

「そういうもんかねえ」

言外にある『私、あんまり友達いないので……』という言葉に気がつかないふりをしてあげる俺は優しいと思う。まあ、こいつも俺と同レベルくらいのぼっちっぱいしなあ。

「で、でも晴樹くんといっしょならどこでも行きます！　たとえ異世界でも！」

「いや。俺はもうあっちには行きたくないから。行くならお前ひとりで行け」

「……冷たいです。晴樹くん……」

恨みがましい目で俺を見る小鳥遊を連れ、ワック店内に入る。
実際、疲れてはいないが喉が渴いているのだ。

——我が幼馴染、美鈴からもらったお茶。その行為自体には感謝している。が。

そのお茶、えらく濃厚な抹茶風味のお茶で食事のお供には向かなかった。何しろ飲むことによつてかえって喉が渇くレベル。その名も『濃〜い。お茶』。……これを開発販売したメーカーは利益より笑いをとることを狙っているとしたか思えない。倒産してしまえ。

俺はカウンターの店員を見る。……よし。バイトの女の子、多分女子高生だな。

……狙いは単純。さっきの商店街での買い物では、個人商店中心に回っていたため、年配の女性とのやり取りばかりだった。……それゆえ、鈍い小鳥遊では嫉妬心が働かなかったのかもしれない。だからこういう店で、自分と同年輩の女の子を俺が口説く姿を見せれば、さすがの小鳥遊でも何らかの反応は示すはず……。

願わくば、『こんな誰にでも声をかけてしまうハーレム男なんて嫌いだわ!』という展開になってほしい。……それを狙って、この買い物中ずつと『ハーレム機能』を全開にしているのだ。これで小鳥遊が俺に幻滅してくれなければ、安く大量の食材を手に入れたこいつの一人勝ちになってしまう。それは避けたい。

「腹は減ってないよな。飲み物だけでいいか？ 小鳥遊？」

「はい。お任せします」

「ん。……すいません。注文いいですか？」

俺はカウンターの女の子に近づく。

「いらっしゃいませーこんにちわーご注文をどうぞー」
いかにも『アルバイトです』という投げやりな雰囲気の店員さん。
しかし。

「ウーロン茶ふたつ。以上で」

「はい。ありがとうございます……い？　ます?」

みるみるうちに赤くなる店員さん。……ハーレム機能、発動。

「あ、あの！　ごいっしょに私はいかがですか!?」

「えーと、どうしようかなあ」

「今なら『可愛いわ・た・し』キャンペーン中で無料ですいてきま
すけど!?」

「じゃあひとつお願い」

「ありがとうございます！　こちらでお召し上がりですか!?　そ
れともお持ち帰りますか!?　制服は着たままのほうがいいです
か!?」

すごい勢いで迫ってくる彼女。さらに後ろから別の店員さんも身
を乗り出してくる。

「お得なセットはいかがでしょう!?　今なら私も付いてきます!」

「おお。じゃあそうしてもらおうかな」

「ちよつとあんた！　ひっこんでなさいよ!」

「なによ！　あんた彼氏いるじゃない！　この人は私に譲ってよ!」

「あんたは調理担当でしょ！　後ろでポテトでも揚げてなさい!」

このイモ娘!」

「なにをー!!」

——カウンターで取っ組み合いのけんかが始まる。いわゆるひとつの修羅場というやつである。原因はこの俺。俺が色目を使ったから。……迷惑通りとはいえちよつと罪悪感が沸く。ごめんな店員さん。今度お詫びにお持ち帰りするから許してくれよ。その時は制服着用で頼む。

さあ、この様子を見れば、さすがの小鳥遊でも……。

「は、晴樹くん。見てください！ お子様セットのおまけ！ ワンちゃんのぬいぐるみです！ すっごく可愛いです！」

まったく見ていなかった。

「てめえ小鳥遊！ 目を輝かせながら何を見てやがる！」

「メニュー見てます！ ほら！ 百十九種類あるみたいです！ 買い占めましょう！」

「なんだと！？ あこぎな商売にもほどがあるぞワック！ 小学生の娘さんにコンプリートせがまれるお父さんの立場になつてみる！ お小遣いいくらあつても足りねえじゃないか！ ……じゃねえええええ！！！」

……カウンターの前では怒りの叫び声を上げる俺。カウンターの内側では接客そっちのけで喧嘩している店員さんたち。まさに阿鼻叫喚。

そして、そんな騒ぎには目もくれずお子様セットのメニュー前に張り付く小鳥遊。

……俺の心が、折れた。

さすがにいたたまれず、テイクアウトに変更した俺たち。店員さんたちごめん。

今は最後の買い物であるソースを求め、スーパー『ニヤオン』に向かう途中。

「……なんか、騒がしいお店でしたねえ」
ちゅうちゅうとウーロン茶を吸う小鳥遊。実に小学生っぽい。

「真の原因はお前なんだけど……。もういいや。疲れたから直球で聞くぞ?」

「はい? なんですか?」

「お前さ、俺が他の女の子と仲良くしてても気にならないの? お前、俺のこと……。好き、なんだろう?」

うわあ恥ずかしい。自分で言うとはント恥ずかしい!

——最初、俺の言葉の意味がわからなかったのか、きょとんとし

ていた小鳥遊は、やがてこいつにしては珍しくにつこりと笑って言った。

「別に気になりませんよ？　だって晴樹くん、かつこいいし優しいし、女の子に好かれるのは当たり前ですから。……だって私が好きになった人ですもの」

……………絶句した。

俺の全力の直球が、場外ホームランで打ち返された気分。

「確かに晴樹くん。最近急にモテるようになったなあ……とは思ってます。でも、そんなのむしろ遅かったくらいです。だってこんなに優しいんですから。……でも、ですね。晴樹くんの魅力に一番最初に気がついたのは私ですからね。……だから、別に平気ですよ」

……………こいつは、こいつは、こいつはもう！　本当に！　あああもうー！！！！

「は、恥ずかしいこと言ってんじゃないよ！　おら！　いくぞ！」
「はい！　どこまでもついてきますー！」

——『一級フラグ建築士』、山田晴樹、完敗。

……しかし、波乱万丈だった今日は、まだ終わらない。
ラスボスは、スーパー『ニャオン』で待ち構えていたのだ。

夕方のタイムサービス狙いでごった返すスーパー『ニャオン』に足を踏み入れた俺たちに、いつもの間延びした声で話しかけてきたその人物。……彼女の名前は。

「あれー？ 山田君と小鳥ちゃんだあ。二人もお買い物のかなー？」

——長谷川 佐代子という。

はじめてのおかいもの……は修羅場（後書き）

今回は構成上、ちょっと短めになりました。
ちなみに作中のWACは実在します。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

野望の理由

——四月。桜舞い散る入学式。

「……ほら。晴樹。いつまでも拗ねてないでさあ……」

「ほつといってくれ美鈴……。どうせ俺なんかヤンキーなんだ……」

新しい環境。新しいクラスメイト。俺は期待していた。この西の名門といわれる姫神学園の生徒なら、俺を見た目だけで不良と決め付けずに接してくれるであろうと。

しかし現実是非情である。

出席番号順で隣の席となった女子には、初対面で「ひっ……」と息を吞まれ、また背後からはひそひそと、「なんでこの学園に不良がいるんだよ……」と呟かれ、あげくのはてには担任ですら、クラスで唯一、俺にだけ名前に『君』ではなく『さん』とつける始末。

やさぐれもしようつてものである。……またその態度がさらに誤解に拍車をかけてしまう悪循環。もうやだ。引きこもろうかな？ 凜子画面から出てこないかな。

「あーはいはい。愚痴なら後で聞くからさ。とにかくこっちきなさい。先生が四人一組になれってさ。オリエンテーションするそうよ」

……学校の先生と言うのは、時にとても残酷だ。——『。人一組になつてー』……。この悪魔の言葉に怯えるぼっちが如何に多いかと言うことを、奴らは知らない。

「……俺はいいよ。余り者同士で組むからさ。俺に構っていると前まで孤立しちまうぞ？　だからさっさと行け。気持ちだけ受け取っとくからさ」

「あーもー……。面倒くさい男だなー晴樹は！」

「そう思っならほっとけ！　いいから早く俺以外と」

——その言葉は、春風に乗ってふわりと漂う柑橘系の香りによって中断される。

「あの一、お話し中すいませーん。まだ四人揃ってませんか？　もしそうなら、良かったら私も入れて欲しいなー……なーんて」

俺と美鈴は舌戦を中断し発言の主を見る。さらさらの黒髪。愛嬌のあるちよつとたれ目がちのその瞳。そしてその笑顔。まるで春の陽だまりのように優しく暖かい。

「長谷川佐代子っていいますー。やー、我慢できなくてトイレ言ってる間にすっかりグループ作りに出遅れてしまいましたー。仲間に入れてくれたらありがたいなーと」

「あ、うん！　もちろん！　私は美鈴！　前田美鈴ね！　で、こっちの目つきと第一印象の悪いのが晴樹！　山田晴樹！　よろしく！」

おい美鈴てめえ初対面の女の子に俺のトラウマ暴露すんな！
そんなこと言ったら、せっかく話しかけてくれたこの子が怯えて……。

「はあい。こちらこそー。美鈴さんに山田君。一年間よろしくねー」

にににににに。

……あれ？

「……ね、ねえ？ 長谷川さん？ 変な事聞くようだけどさ、こいつのこと怖くないの？ この晴樹の、特に目と性格」

「目はともかく初対面で怖がられるような性格はしてねえよ！」
そんな的確に人の心を傷つけるお前のほうがよっぽどひどい性格だわ！

「んー？ 山田君は怖い人なんですかー？」

「え。い、いやそんなことないと自分では思うけど……。どうだろう？」

「なんで自分のことなのに疑問系なのよ晴樹……」

仕方ねえだろう美鈴！ 生まれてこの方、お前以外の女の子とこんなにも会話をしたことがねえんだからさ！ そら緊張もするわ！

……真剣な表情の長谷川さんに上から下までじーっと見つめられる。あ、目。目は見ないで。他はともかく目つきは確かに悪いって自覚あるし。だから目は……。

「別に怖くないですよー？ これから仲良くして下さいねえ」

長谷川さん、いや現世に降り立った天使はそう言ってもう一度微笑んだ。

——俺は長谷川さんに、出会って五分で惚れた。

「よ、よろしくな！ 長谷川さん！ さあ、さっさと四人組作ろうか！ 俺と長谷川さんと美鈴……。あ！！ おいそのちっちゃいの！ お前だお前！ その影の薄そうなお前！ まだグループ作ってないだろ！ うちこいようち！ ここ、あと一人で揃うんだ！」

——十二月。あちこちに死闘の後が残る異世界。その地に立つ神は言った。

「……お主のおかげでこの世界には平和が戻った。元の世界に戻る前に、心からの礼を言っぞ。……どうした？ なぜ泣いておるのじや勇者よ？」

「だ、だって、だって……ヒックヒック」

一日で滅びるなよ魔王軍！ これじゃ俺、何の為にこの世界に来たのかわかんねえよ！

この世界の平和なんてどうでもよかったんだよ！ 俺は俺に冷たい現実世界に絶望して、俺のことが大好きなあの子たちといちゃつくためにここに來たのに……！！

ああ、ツンデレ王女が武骨な女戦士が無口な女魔法使いが貞淑な女神官が可愛い獣娘が俺との別れを嘆き泣きながら手を振っている……。帰りたくないよう……。……。

「……その涙……われらのために泣いてくれるのか勇者よ……」
ちげえし。

「お主の優しさには感服した。本来、認められぬことだが、元の世界に返す際、何かひとつ願いをかなえてやるとしよう。ささやかな礼じゃ」

……え！ マジで！？ じゃ、じゃあ、じゃあ！！

「長谷川佐代子さんが俺のことを好きになるようにしてください！」
「長谷川……？ ああ。元の世界の女性か。……すまぬ勇者よ。われはこの世界の神ゆえ、お前の世界の住人に直接関与することは適わぬのじゃ」

ちっ！ 使えねえな神！ 滅びろ！ パルス！ パルスパルスパルス！

「ちくしょう……。やっぱり神なんていないんだ……」
「いやいるし。ここにいます。お前の目の前にいます」

神のつつこみが鬱陶しい。口調まで違うじゃねえか！ なめんな！！

「お前の世界にいる者に何かをする事はできぬ。ゆえにこうしたらどうであろう？ ……元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに与えた能力を持ったまま帰ることを許そう。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まっている。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！」

……長谷川さん一人だけを手に入れることが出来ないのなら、全世界の女性ごと全てもらってしまえばいいのだ！ 俺自身を『ハーレム機能』に特化させ 現実世界にハーレムを作り上げてやる！
そしていつかそこに100%理想の彼女、すなわち長谷川佐代子さんをも迎え入れるのだ！！

——ハーレム王に、俺はなる。

——そして、今。 現実世界。 スーパー『ニヤオン』 入口。

「あれー？ 山田君と小鳥ちゃんだあ。二人もお買い物のかなー？」

なんとという幸運！ 愛しの長谷川さんに偶然出会えるとは！ ……
あ、いや、ちょっと待て。 ……あれ？ 二人？ これ下手したら誤解されるんじゃない……。

「あれー？ あれあれあれー？ もしかして私、おじやま虫ー？
はさんで捨てられちゃう感じかなー？」

きよとんと首を傾げ、立てた指を頬にあてる長谷川さん。可愛い！　じゃなく！　あああやつぱり誤解されてる！　ついでに挟んで捨てるのは泣き虫と毛虫な！

「ち、ちがうちがう！　長谷川さん勘違い！　俺はこのマヨラー小鳥遊にソースの素晴らしさを教えるために……！　な！　小鳥遊！　そうだよな！」

「……………」

「ん？　おい。小鳥遊？　小鳥遊！」

「あ、はい！　そうですそうです長谷川さん！　晴樹くんが『一日だけ待ってくれ。お前に本物のソースというものを見せてやる……』って」

「言ってねえよそんなこと！」

どこのグータラ新聞記者だよ俺は！　見ろ長谷川さんがひいて……ひいて？

とことこ歩いて行った長谷川さんが棚から取ったのは一本のボトル。なんだ？

「このソースを作ったのは誰だあ！　女将をよべい！」

「ちよつとまって長谷川さん！　作ったメーカーだから！　女将とかいないから！」

てへーと笑う海原……ではない。長谷川さん。迫力が足りないよ。あの料亭の主人は間違ってもそんな可愛い顔で微笑んだりしない。愛らしさなら圧勝だけど。

「どうかなー？　にてたー？　ものまねー」

「うっん。全然。まったく」

可愛すぎるのも問題ってことだ。長谷川さんには悪役のマネは出来ない。

「ちえー。残念。……でも、そつか。ただのお買い物なんだね。私、てつきり山田君と小鳥遊さん、デートなのかなーって思っちゃったよー」

「ないないない」

「まー確かに、デートでスーパーっていうのも……、んー、アリかな？」

「アリなのか？ なにすんだよスーパーで？」

「『オススメ！ 彼女と廻る試食コーナーの旅！』とかどうかなー？」

「いいの長谷川さん！？ そんな貧乏くさいデートでいいの！？」

驚愕した俺の突っ込みに、長谷川さんは意外なほど真面目な、ちよっとお姉さんぶった表情で立てた人さし指を目の前で振りつつ言う。

「わかってないねえ。山田君はー。……好きな人といっしょなら、どこにいても、何をしてても楽しいのが乙女というもののさー。あっはっはー」

……至高の言葉。頂きました。心のメモ帳に付けておきます。うん。

「……で、長谷川さんのほうは買物なの？」

「うんー。私はお母さんとー」

え？ まじで？ ちょっと挨拶とかしちやおうかな。「お嬢さんとお付き合いと結婚させて頂く予定の山田と申します」とか何とか言っちゃって。

「お母さん、今あつちにー」

脳内で長谷川さんの頑固お父さんに向け正座して頭を下げてるシーンまで高速展開していた俺は、長谷川さんのその声で我に返り、その指し示す先を見る。

「ん？ 『タイムセール！ 豚汁無料配布中！』か」

広い駐車場の一角。そこに簡易テントを備え付け豚汁の無料配布をしているらしい。言われて気がついたが食欲を誘う匂いが風に乗ってここまで来ている。

「もうすぐご飯だからやめようよー……って言ったんだけどねえー」
「あれだ長谷川さん。主婦はほら、『無料』とか『おまけ』って言葉に弱いからな。さっきもこの小鳥遊だって、もう持ち切れないほどのおまけを……。ん？ 小鳥遊？」

隣にいるはずの小鳥遊が妙に大人しい。反応が鈍いな。おいお前どうし……

「……………！！　おい！　小鳥遊！　おい！！」

——小鳥遊の瞳から光が消えている。のっぺりとした漆黒。目だけではない。その表情。一切の感情が削げ落ちたようなその顔。まさか、まさかまさかまさか！！

どおん！！！！

腹に響く轟音が無料配布イベント会場のほうから聞こえた。

「なっ……………！」

音の反応した俺が見たもの。それはイベント会場備え付けのコンロから軽く3mは伸びあがった炎の柱。プロパンガスの爆発ではない。テントの外に設置してあるそれはどう見ても無事だ。そもそもあれはプロパンガスの火力じゃありえねえ。

紅蓮の炎はコンロ上の鍋を吹き飛ばし、テントの布製の屋根を舐めつくし、やがて徐々に『何か』の姿を形成しようとしている。

ギロリ。

そんな音が聞こえた気がした。あの炎、あれには意思がある。その証拠に炎の中に瞳の様なものが見える。現代社会の人間にとって『目の錯覚』『気のせい』扱いされるだろうが、異世界からの帰還者である俺には、はっきりとそれが認識できる。

あれは、きつと、火の精霊。つまり小鳥遊の召喚魔法が発動しているってこと。

「えっ！ えっ！ なにかなあれ！ ごめん山田君！ 私、ちょっとお母さんのところ行ってくるね！」

「お、おう！ 長谷川さん！ 気を付けて！」

危険かもしれない。止めるべきかもしれない。でも俺は『これ』の原因を知っている。長谷川さんの身を案じるならば、今は一刻も早くその原因を何とかするべきだ。

「小鳥遊！ おい小鳥遊！ しつかりしろ！」

肩を掴んで揺さぶる。反応がない。まるで人形を振り回している気分だ。何でだ！？ 数学の授業の時はこれで止まったじゃないか！

……唐突に異世界の事が思い出される。無口な魔法使いが言っていた言葉。

——『精霊召喚魔法を使うと、術者はやがてトランス状態になる。外部からの反応に極端に鈍くなり無防備になる。……だから、私が精霊召喚魔法を使う時は、ハルキ、あなたが守って』——

「なんてこった……。他に手はねえのか？ 働け俺の頭！！」

……次に思い出したのは有名なラノベのシーン。確か映画にもなったはず。

小鳥遊と同じように無意識で、いや夢の中でだったかな？ とにかく不思議な力を使ってしまったヒロインを正気に戻すのに主人公が使った手は……。

「き、き、き……」

キス……だった。——やだ照れる。……じゃねえ！！

がっとな力を入れ小鳥遊の肩を掴む。正面からその小さな顔を見る。その下の方。自然に軽く開かれた唇。今は寒さのせいかちよつと色を失ってるそこ。すげー柔らかそうな……。

ごくり。

で、できるのか俺！？ しちゃうのか僕！？ やるしかないのか
オイラ！？

いや待て落ちつけ山田晴樹。これは言わば緊急避難！ ほらあれだよ海で溺れた少女を助けるために人工呼吸するじゃないか！ あれと同じだって！ 命を助けて強制わいせつ罪で訴えられたって話も聞かないしな！ どうでもいいけど『溺れた少女に人工呼吸したら訴えられました』ってなんか最近のラノベのタイトルっぽいな！ 将来作家になったらそんな話書いてみようか！……ってええええ！！ 落ちつけ俺！ 脱線してる！ 混乱するな覚悟決めろ！

「す、すまん小鳥遊。……許せ！」

そう呟くと俺は小鳥遊に顔を近づける。……うわあ、まつ毛なげえ。肌しろい！。しかもすべすべー。そ、そして唇。や、やわ、やわ、やわらかそうで……。

「……って！！！！ できるかボケえ！！！！！」

俺はそう叫んで店内に猛ダッシュ！ ショーケース内にあつたそれを掴み、リターンして戻ってくる。結果的に火事場泥棒の万引き状態になっているが、金は後で払う。今は『あれ』を何とかしないと！！！！

「小鳥遊いいい！！！！ 目え、覚ませえええええ！！！！！」

びたん。

その唇ではなく、左右両方のちよつと横。よく伸びそうなのその頬にそれを押しつける。

一、二、三、四、五！！

「……ひゃ、ひゃあああ！！ つつつべたい！！ な、なんですかいっしたい！？」

「よっしゃああああ！！！！！」

おっし！ やった！ さすがアイスの王様『カリカリ君』！！
伊達にコーラ味とソーダ味はしていない！ 意味わかんねえよ俺！
とにかく成功！ わーい！

——反応が無くなるのではない。『極端に鈍くなる』のならば、
それを上回る刺激を与えてやればいいのだ。例えば、凍るような寒
い冬の夜に、地肌にアイスを押しつけるような……な。

「話はあとだ！ とにかくあれ！ あれお前の仕業だろ！ なんと
かしろ！」

「え……。あ！ あ！ わ、私、私また……」

「反省するのも落ち込むのもあとだ！ 小鳥遊！」

「は、はいっ！」

慌てて手を組み何かの詠唱を始める小鳥遊。

途端にその威力を失い始める火の柱。……それは徐々にその姿を
小さくしていき、やがて消える。……消え去る直前、ある筈のない
瞳に睨まれたような気がしたが、見なかったことにする。

「
……………」

……騒動は、終わった。

「……あ。いたいたー。おーい山田くん小鳥遊さーん」

ヤジ馬から抜け出てきた長谷川さんが無言で佇む俺たちを見つ
け、近寄ってくる。無事なようで何よりだ。ああよかった。

「お母さん、平気だった？」

俺の将来の義理の母は。

「うんー。お母さんだけじゃなくてねー、怪我人は一人もいないら
しいよー。でも驚いたし、今日はこのまま帰ろうーって。だから、
じゃーねー。ふたりともー。またあしたー」

そう言って小さく手を振る長谷川さん。それに返しつつ、俺は小
声で言う。

「さて……」

びくつ。

俺の言葉に反応する小鳥遊。

「……ご、ごめんなさい。晴樹くん。あの……ごめんなさい」

「謝罪はもういい。何度も聞いたからな。ただ、ちゃんと話しても
らうぞ？ 時間、平気か？ ……悪いけど、ダメって言われても今
日は話すまで帰さないけどな」

なにしろこっちは命がかかってる。門限破りくらいは覚悟しても
らおう。

「……はい」

——そう呟いた小鳥遊は、いつもよりもさらに小さく、儚げに見えた。

「……ほれ。何が好きか知らんからお茶にした。受け取れ」

俺はそう言つて、ベンチに座り俯く小鳥遊にペットボトルのお茶を差し出す。『はああっ！ お茶っ！』というその商品名にはもはや突っ込む気にもなれない。当然、『濃〜い。お茶』と同メーカーの商品である。商品名に感嘆符つけるとか、そろそろ本気でこの会社は開発陣を変えたほうがいい。

「ありがとうございます。……ごきます。お金、払います。いくらですか？」
「いいよジュース代くらい。……それより一気に飲むなよそれ。カ
イロ代わりなんだからな。ここ、寒いし」

……そうなのだ。ここはスーパー『ニヤオン』近くの公園。……
すごく、寒い。

『ニヤオン』駐車場は小鳥遊の引き起こした騒動のせいで、警察やら消防やらヤジ馬やらとても話が出来る状態ではなく、ここに場所を動かした。

俺も小鳥遊の隣に腰掛け、自分用の缶コーヒーを手に弄びつつ小鳥遊が話したすのを待つ。

手持無沙汰に、何となく空を見上げる。オリオン座が綺麗だった。

「……ごめん、なさい」

やがて隣から聞こえた声は、余りにも小さく、うつかり聞きもらしそうになった。

「いやもう、だからな？ 謝るのはいいつて。幸い、怪我人も出なかったし火事になった訳でもない。……まあ、テントは燃えたけど保険で何とかなるだろ。だからさ、俺が聞きたいのはそういうことじゃなく、その……何で、なんだ？」

この『何で』の意味はさすがに鈍い小鳥遊でもわかるだろう。

——俺があれば多くのハーレムフラグを立てても、まったく動じなかった小鳥遊が、『何で』あの時、感情を昂ぶらせて魔法発動に至ったのか？

俺には聞く権利くらいあるよな。

「……言わないと、ダメですか？」

俯きつつそう問いかける小鳥遊。当たり前だ。しかし……。

「どうしても言えない……っていうのなら仕方ないけど……。ああそうか。例えばお前を呼び出した魔王の秘密が絡んで、言ったら殺されるとか言う事情なら言わなくていいぞ」

何しろ相手は魔王だしな。そういうこともあるだろう。

しかし小鳥遊は力なく首を振る。

「そういうのではありません……。晴樹くん、本気でわかりませんか？ それともいじわるでそう言ってますか？ どちらですか？」

「わかんねーよ。なんだよいじわるって。人聞きが悪い」
俺がいつもおまえをいじめてるみたいじゃねーか。

やがて静かに、小鳥遊が立ち上がる。

何かを覚悟した表情をして、まっすぐ俺を見て、その小さな口を開ける。

「長谷川さん、が、いたからです。……晴樹くんが好きな、長谷川さんがいたから」

……俺の手から缶コーヒーが滑り落ちる。

無人の公園に、カランという乾いた音が響いた。

野望の理由（後書き）

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

続きは本日中に予約投下されます。

彼女の秘密、そして異世界ハーレム彼女の逆襲！

「……na、naniwo itterunda takanasi.
……sonnawakenaidarou?」

「晴樹くん晴樹くん。動揺すぎです。日本語になつてないどころか英語にもなつてません。それただのアルファベットです」

なんで声だけでそうわかるんだよ小鳥遊。いやまあ事実だけど。

コホン。

「何を言ってるんだ小鳥遊。……そんなわけないだろう?」

「……さすがに、今の反応の後で、それは通じませんよ、ね。晴樹くん」

悲しげな声で続ける小鳥遊。

「好き、なんですよね? 晴樹くん。長谷川さんの事が。ずっと前から」

喉が、はりつく。言葉が、出ない。

……自慢じゃないが俺にはいわゆる『恋バナ』をするような友達はいない。そもそも友達自体がない。だから、俺の想いを知っている奴なんて、きつと美鈴しかない。あいつは多分、何も言わないけど気が付いていると思う。……でも美鈴は、俺の密かな想いを他人に話したりは、絶対しない。ってことは、お前まさか……。

「小鳥遊、お前もしかして魔法で俺の」

「その先を言ったら、いくら晴樹くんでも許しません。魔法で人の好きな人の心を盗み見るなんてこと、私は絶対にしません」

「……すまん。今のは俺が悪かった」

俺は頭を下げた。今のは俺が悪い。十対零で俺が悪い。保険適用外だ。

「でも、じゃあなんで俺の気持ちを……」

小鳥遊は微笑む。悲しげに、寂しげに。目にうつすらと涙を浮かべつつ。

「そんなの簡単ですよ。……私、ずっと前から晴樹くんが好きでした。だからいつも晴樹くんのことを見てました。……だから、気がついちゃいました。晴樹くんが、誰を見ているのかを。……いつも一人でいて表情が変わらない晴樹くんが、美鈴さんと長谷川さんにだけは、怒った顔と楽しそうな笑顔を浮かべることを」

俺は、俺は何も言い返せない。

「美鈴さんは、いいんです。幼馴染ですよ？ 彼氏彼女っていうより、本当に気心が知れた仲間みたいな感じでしたから。……でも、長谷川さんは違いますよね？ 長谷川さんとお話している晴樹くんは、本当に楽しそう、あ、ちょっと違いますね。本当にうれしそうで、それを見ていると胸が痛くなつて」

ぽろっと、小鳥遊の瞳から小さな光の粒が流れ落ちる。

世の中には、綺麗な泣つてものが、存在するらしい。

「晴樹くん」を『誰が好きになっても私は平気です。さっき言ったことは嘘じゃないです。……でも、晴樹くん』が『好きな人には、私はダメな子だから、嫉妬、しちやいます。……だからさっきも、気持ちを抑えきれなくなつて、あんなことになつちやいました。……ごめんなさい。晴樹くん。ごめんなさい」

——神様。ごめんなさい。

鈍かったのは俺の方でした。どうしようもないやつです俺は。俺はこんなにも想われていたというのに、気付きもしませんでした。

ハーレム王、失格ですね。

しばらく、二人とも無言だった。でも俺には聞きたいことがある。いや聞きたいことが出来た。これを聞くのは残酷なことなんだろうか？

「……何で、俺？」

きつかけが、わからない。クラスでは、というよりもっとスケールが大きくこの世界では嫌われていたはずだぞ。俺。この目のせいで。

「……入学式。オリエンテーション。四人一組って言われても、友達いなくて誰とも組めず、知らない人をお願いする勇気もなかった私を、強引に自分のグループに入れてくれたのは、晴樹くん。あなたでした。……正直に言いますね。出会って五分で恋に落ちました。ほとんど一目惚れでした」

……痛い。心が痛い。同じぼっちとして、その気持ちは俺が世界一よくわかる。なぜならそれは、俺が長谷川さんに惚れた理由と同じだからだ。

「そのあと八ヶ月。ずっと晴樹くんが好きでした。でも気持ちを伝える勇気はありませんでした。……どういう訳か異世界に召喚されちゃって、一年くらい何とか無事に戦い続けていられたのも、晴樹くんのおかげでした。私、向こうにいた時はずっと思っていました。『私、現実世界に帰れたら、晴樹くんに告白するんだ……』って。そのおかげで異世界に一人ぼっちでも耐えられました」

それ清々しいまでの死亡フラグだからな。よくそれを乗り越えて帰ってこれたなあ。小鳥遊。……いや突っ込みどころはそこじゃない。

「い、一年！？ お前一年もあつちにいたのか？ 計算おかしくないか！？」

「カレンダーがあつたわけじゃないから、正確に一年かどうかはわかりませんけど……。あ、そうか。晴樹くんは聞いてないのかもしれないですね。向こうとこっちでは時間が一致していませんから、私も晴樹くんみたいに、『向こうへ行つた直後』の時間に戻してもら

っているんですよ。……晴樹くんも、そうですね?」

「あ、ああ……。しかし、一年か。よく耐えたなあ、小鳥遊」

「過ぎてしまえばあっという間でしたけどね。でも、向こうで一年、晴樹くんへの気持ちを熟成させてきたから、戻って告白する勇気が持てました。それに」

くすりと笑う小鳥遊は続けて言う。

「ずっと思い続けた人が、でももう会えないかも……。なんて諦めかけていたその人が、なんと自分の飛ばされた世界に来てくれたんです。それだけじゃない。私が一年かけても終わらせることが出来なかった戦争を、立場は違うとはいえ、たったの一日で集結させて、結果的に私が元の世界に戻れるようにしてくれたのも、晴樹くん。あなたです」

その言葉には一片の迷いもなく、その表情には微かな躊躇いもなく、小鳥遊はまっすぐ俺を、……ちがう。俺のコンプレックスの塊であつた俺の目を見て言う。

「これで、その人を好きにならなかつたら、それは嘘ですよ。……晴樹くん、私はもう、あなたしか見えません。あなたが、好き。大好きです」

「……ひとつ、謝ることがある」
「はい？ 謝ること？」

全てを打ち明けてくれた小鳥遊には、俺も応えなくてはいけないだろう。

「お前が魔王からチート能力をもらったように、俺も神様からもらった力がある。——笑わば笑え。俺がもらったのは『ハーレム機能』だ」

「は、はーれむ機能？ なんですかそれ？」

説明させるか小鳥遊よ。それは拷問だぞ。

「……俺、世界中の女性に嫌われてると思っていたからな。だから、こっちに戻る時、神様が願いを聞いてくれるっていう言ってくれたから、迷わずこう返した。『長谷川佐代子さんが俺を好きになってくれるように』って」

「あっ……」

「悲しそうな顔するな。それはダメだったんだ。向こうの神様はこっちの人間に直接関与できないんだとき。……だから、願いを変えた。『世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！』ってな。……つまりこれが俺の能力。無条件に女性に好かれる能力。……こんな手段を使っても、俺は長谷川さんと付き合いたいと思ってたんだ」

「……………」

「軽蔑するならしろ。……正直に言うぞ？ そんな力があるものだから、小鳥遊。お前からの好意もその力のせいだと思ってた。すまん。謝る」

「……………」

「な、なあ小鳥遊。無言って怖いんだけど……？ 怒る気持ちはよくわかる。だから何か言ってくれとありがたいんだが……」

俺の言葉に、何やら考え込んでた小鳥遊が、我に返ったように顔を上げる。

「あ、いえ、違うんですよ。……もちろん、怒ってないってわけじゃないくて、『この鈍感男！』とか『にぶちん！』とか『朴念仁！』とか言いたくても言えない気持ちがあります」

小鳥遊。言ってる言ってる。言葉のナイフが俺に突き刺さってる。

「そうじゃなくて、ちょっと考え事を……というか、疑問が解けたっていうか……」

「なんだそれ？ 意味わからん？ もうちょっと詳しく」

何やら躊躇っていた小鳥遊が、やがてため息一つついてから話します。

「……実は、おかしいとは思ってたんです。晴樹くんが素敵な人だっていうのはよく知ってましたけど、最近の晴樹くんのモテかたはさすがにおかしいな、って」

「だからそれが俺の力なんだって」

「はい。そうです。それはわかりました。……でも、だからこそ、目立っただんです。前と態度が一切変わらなかった人、が」

何を言い出すんだこいつ？

「クラスの全女子が晴樹くんのことを好きになっちゃっておかしな行動をとるようになって、全く態度が変わらない人がいたんです。なんでかなーって思ってたんですけど」

なんだそんなことが。

「そりやお前。俺の願いが『世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！』だからな。もともと俺に悪意を抱いてなかった美鈴の態度は変わらないだろ。それに、お前が知らないだけでそういう人物、ほかにもいるぞ？　うちのかーちゃんとか吉田先生とか、な」

——正直、かーちゃんの態度が『晴樹くん愛してる！』に変わったらさすがの俺も本気で樹海行きを考えるとところだった。親の愛情はあつたらしい。

俺の言葉を聞いた小鳥遊は何やらまだ迷っているようだった。

二、三度、何かを言いかけては躊躇う、そんなことを繰り返す。

「あのな、小鳥遊。さっきのでも俺は十分傷ついたからな？　この上少しくらいひどいこと言われても構わない。……だから言いたいことは言ってくれ」

逆に気になるから。

「……わかりました。晴樹くん、本当に鈍いんですね。ショック受けると思いますから覚悟してくださいね。……態度が変わらなかつた人、それは美鈴さんだけじゃありません。——長谷川さんも、です」

……………。

「……は？ いやそんなことないだろう？ フラグ立ってたし。そんなことはそれを見て暴走したお前が一番知ってるだろ？」

「えっと、確かに私が嫉妬するような出来事がありました。でも、よく思い出してください。……他の人、他の女の人は、晴樹くんと何かあるとすっごい勢いで迫ってきましたよね？ 長谷川さんはどうでした？ 迫ってきましたか？」

……確か一回目は数学のテスト中。消しゴム落とした長谷川さんの手を勘違いして握りしめた俺に向かって、長谷川さんはいつものように優しく微笑んでくれたっけな。

で、二回目。偶然スーパーで出会った長谷川さんは、俺たちに気さくに声をかけてくれて、話に乗ってくれて、いつものように優しく笑ってくれたんだよね……。

——そう。いつものように。いつものように……！

「あ、あ、あ……」

「……晴樹くん。長谷川さんは最初から、晴樹くんのことを嫌ったりしてなかったんですよ。……あえて、晴樹くんのことを好きだった、とは言いません。美鈴さんみたいな例もありますしね。でも、少なくとも嫌ってはいなかった、これだけは確かです」

視界が暗闇に塗りつぶされる。俺の脚はもう俺自身の体を支えられない。

がくりと膝をつき、俺は地面を掴む。

「な、なんてこった……。じゃあ、じゃあ長谷川さんには通じねえじゃねえか。俺の、無敵の『ハーレム機能』……」

——長谷川さんの誰にでも注がれる優しさを好きになった。でも、その優しさがあるからこそ、俺の力は彼女には届かない。

なんて、なんて皮肉な話なんだろう。

俺は、最初から間違えていたのだ……。

——誰にでも愛される力を持っているのに、本当に好きな人にはその力が届かない俺と、そんなどうしようもないジレンマを持つ男を好きになってしまった悲しい少女。

月は優しく、そんな愚かな二人にも光を降り注ぐ……。

……どれくらい時間が経過したか、覚えていない。

やがて俺は、ゆっくりと立ち上がり、目の前の少女と向き合う。

愚かな小鳥遊と鈍い俺は、それでもその時だけは目で通じあった。これから先は、儀式。他の言葉に置き換えるとすれば、様式美つてやつだ。

……前と同じように、二、三度深呼吸をする小鳥遊。俺は黙ってその先を待つ。

「晴樹くん。私はあなたが好きです。もしよかったら彼女にしてください」

それに対する俺の答えを知りつつ、でもしっかりとそう言いきる小鳥遊。

「ごめん。俺好きな人がいるからそれは出来ない。ごめん」

前と違い、今度は誤魔化すことなくはっきりと答える俺。

……二人の儀式はこれで終わった。
だから、ここから先は新しい物語。

——愚かな彼女は執念深かった。異世界で一年間、孤独な戦いを

繰り広げつつも男を忘れなかつたくらいに。

——鈍い男は諦めが悪かった。たった一人を手に入れるために全員を捕まえようとするくらいに。

「……私、諦めませんから！　いつか絶対！　晴樹くんを振り向かせてみせますから！　そのために毎日まとわりついて尽くして尽くして尽くし続けますから！」

「上等だいつでもかかってこいや！　こっちだってなあ、絶対そんなのに揺らぎはしねえわ！　俺の長谷川さんへの想いの深さを舐めんじゃねえぞコラ！」

……うーっと思りつつ睨みあう二人。

やがて、どちらからともなく嘖き出す。

「お、おかしいですよね晴樹くん！　なんで『俺の事を嫌いな……』なんて願ひ事にしちゃったんですか！　もう！　それがなければ恋は実ったのに！」

「だつておまえ！　仕方ねえだろ！　言つてなかったけどなあ、俺子供のころからこの目つきで嫌われてたし！　そもそもお前！　お前がもつと早く告白してくれれば、『ああ、俺の事を嫌わない女性もいるんだ』って安心して、神への願ひ間違えずに済んだのに！」

「ええっ！　ひどい言いがかりですそれ！　それにそれじゃ私、私があんまりにも可哀そうじゃないですか！　振られる前提ですよそれ！」

「別にいいじゃねえか！　二回が三回になつても、もう大して変らねえだろ！」

「ひ、ひどい！　あんまりです！　最低です！　大嫌いです！」

「あ、そう。じゃあそういうことで」

「あああああ！　うそですうそです大好きです！　うつつ…大好き

ですよ」

……無人の公園。二人のはしゃぐ声が響き渡る。
開き直った者は、強い。だから。

「見てろよ神様。俺は絶対、長谷川さんを彼女にして見せるから！」
「見ててくださいね。魔王さん。私は絶対、晴樹くんの彼女になつてみせますから！」

俺たちは月に誓う。
綺麗なオリオン座が輝いていた。

「女神テレビ。朝のニュースの時間です。まずは昨晚、スーパー『ニヤオン』女神店でおきたボヤ騒ぎからです」

俺は朝飯を食いつつそのニュースを見る。……うん。やっぱり犠牲者怪我人0。
『不思議ではあるが、ガス漏れか何か』で片づけられそうであった。

「まあ、怖いわねえ。晴樹、あんたもいたんでしょ？」
「ん。でもまあ遠くから見たただけだしな」
実は原因も解決も俺たちの仕業だけだな。かーちゃん。

「怪我がなくてよかったわ。最近医療費も高いし」
家計よりまずは俺の身を心配してくれ。

「ありがと。……ところでカーちゃん。すまん。言っの忘れてた。
俺、今日から弁当いらねえから」

「あら？ ダイエット？」

「……他人の家庭はよく知らないが、普通、年頃の息子がこんなことを言い出したら彼女の存在を疑ったりしませんかねお母様。

「ん。……まあ面倒くさいからそれでいいや。……じゃあ、行つてきます」

「あ、晴樹。本当にいいのお弁当！ カーちゃんにまで見栄張らなくていいんだよ！」

「……気を使ってくれてありがとうなカーちゃん。ちょっとむかつきたけど。

でも大丈夫だ。なぜならこのドアの外にはきつと

がちゃ。

「お、おはようございます！ 晴樹くん！ 今日の揚げ物はちゃんとソースまみれにしてみました！ 期待してくださいね！」

「だから『まみれ』にしてどうする！ あれか！ 早く逝けつてことか！？」

「だ、ただだだって晴樹くん、ソース好きって言ってましたし！」
「限度があるだろう限度が！ ……ああ、もういい行くぞ！」

「ああああ、待って！ 待ってくださいあい！」

『一級フラグ建築士』 VS 『隼のフラグブレイカー』

今日もその戦いはこうして始まる。でも。

「が、がんばって作りましたから、いっしょに食べてくださいね…」

はにかみながらそう呟く宿敵の言葉に、早くも俺は防戦一方。

まさに。これこそ。この控え目ながらも眩しく力強いこの笑顔こそ。

異世界ハーレム彼女の逆襲。その証明であった。

「ま、負けませんから！ 異世界帰りの誇りにかけて！ 負けませんからね！」

彼女の秘密、そして異世界ハーレム彼女の逆襲！（後書き）

次話は近日中に投稿する予定です。

なお、この作品に対する作者の見解を活動報告に載せています。
ここまで読んで頂いた皆さんにはぜひ見て頂きたい内容ですので、
お時間があるときで結構です。
宜しければご一読くださいませ。

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

不幸な彼女のクリスマスイヴ　く前編く

……彼女は焦っていた。時間がない。

彼女が狙う、王と呼ばれる男。王には隙がなかった。唯一人であっても彼女の攻撃を易々と無効化する王、しかしその王に傲慢さと油断は一切存在しない。

この数日、王は自身を狙う何かの正体に気が付いているのか、常に側近を引き連れており彼女に攻撃の機会を与えない。

焦れた彼女は待ち伏せを試み、ようやく出来た王一人の瞬間に仕掛けてはみたものの、その攻撃は王の鉄壁の防御によって容易く防がれてしまう。

彼女は一流の戦士だった。攻撃力、防御力もさることながら、その本質はサバイバーでありスナイパーである。隠密行動、そして一撃必殺こそが彼女の得意とする業であり、それゆえ、孤独な戦場において一年という長きに渡り生き延びることが出来たのだ。

その彼女が、攻めきれない。それどころか、攻撃を仕掛けることすら敵わない。

……王と呼ばれるだけあって、自身が狙うには強大すぎる相手だ。それは初めからわかってはいた。しかし彼女にも矜持というものがある。あの過酷な戦場を生き延び、その後も多大なる努力を重ねてきたのは、この為。

王に一矢報いる、その瞬間の為に彼女は生きてきたのだ。

しかし、こうして王の側に忍び、はや三日。

刻一刻と近づくタイムリミットは今日の夕刻まで。

余りにも少ない残り時間を思い、思わず強く唇を噛む彼女。

……しかし、最後の瞬間に神は彼女に微笑んだ。

常に王の側に控え、王と行動を共にする側近中の側近が、ついにその側を離れたのだ。

彼女は王に迫る。誰よりも早く。疾風のように。隼のように。その二つ名に恥じぬ速さで。

……唯一つの誤算。それは王が彼女の攻撃を予想していたこと。王は既に心構えが出来ているかのように、彼女に対し正対する。

しかし彼女は止まらない。どちらにしろ時間がないのだ。ここで終わらせなければ、もう彼女には手はない。ある意味捨て身の特攻ともいえる無謀さであった。

——きやがった！

この三日間、常に俺の隙を窺っていた奴が来た！

おっし上等！俺も伊達に『ハーレム王』と自称している訳じゃない。こんな小動物、ここで返り討ちにしてくれるわ！

「あの！」

「だめだ！」

「二十四日！」

「予定がある！」

「ほんの少しいいので！」

「一日中『凜子愛してるよ』と呟く大事な仕事だ！」

「会ってもらって！」

「あと田舎のばーちゃんが危篤になる予定だ！」

「いつしよに！」

「この明日は一人乗りなんだの。太！」

「クリスマスを！」

「ごめん俺ブードゥー教徒なんだ！」

「祝いませんかああ！！！！……言いきましたよおお！！　晴樹くん！！！」

「てめえ小鳥遊！　普通ここまで言われたら心折れて泣くはずだろうが！！？」

「ただ打たれ強いんだよお前は！！　Mか！？　やっぱりMなのか！？」

「あ、いや多分すごいへこんでいる。涙目通り越して半ベソ、いや八割ベソくらいになってやがる。泣くくらいなら諦めればいいのに。執念深い奴め」

「ふ、ふん！　晴樹くんの、そういう冷たいお返事にも慣れましたもんね！」

「その割にはすっげー涙目だぞ小鳥遊」

「こ、これは泣きじゃありませんもん！　心の汗ですもん！」

文学的解釈では、そのことを涙って言うんだと思うぞ？ 小鳥遊よ。

あと『もん！』っ言うな。ただでさえ見た目小学生なんだから。

「こ、この三日間、ずっとこれ言おうとしてたのに！ 晴樹くんってばいつも美鈴さんといっしょにいるし、通学前に家で待ち伏せしても、変な歴史の豆知識とかすごい勢いで一方的に話してきて隙みせないし……。泣きそうですよ……」

変な豆知識って言うな。桶狭間前の織田軍がどこに集結していたかなんて普通の高校生じゃ知る機会なんてないぞ？ それが役に立つ機会もないと思うけど。

「そうは言ってもな、小鳥遊よ。この三日間のお前、獲物を狙う隼みたいな目して俺の事見てただろ？ そら俺だって警戒するわ」
「……気がついてたのならせめて話くらい聞いてくれても……。もっと早く言うつもりだったのに、結局機会がなくてこんなギリギリになっちゃいましたし……」

——あのスーパー『ニヤオン』事件から三日が過ぎた。

今日は十二月二十二日。終業式の日である。今はその退屈な式典も終わり、解放感に包まれながらの幸せな放課後、帰宅中の通学路である。

意外なことに、登校時は迎えに来る小鳥遊は帰宅時はついてこな

い。

多分、美鈴に遠慮しているのではないかと思う。正確なところは聞いた訳ではないので不明だが。ただ単に美鈴が怖いという可能性もある。あーでもどうだろう？ 美鈴って俺以外には結構優しいしな……。差別反対。もっと俺を愛して。

ま、『いつしよにいない』ってだけで、ずっと物陰からついてきてはいたけど。

忍者かお前は？ 存在感ないし魔法使えるし、もしかしたら天職かもな。

ちなみに美鈴さん、今はコンビニにお花を摘みに行ってます。

『濃』い。お茶』を飲み過ぎたらしい。気に入ってるのかよあれ。趣味悪いな。

その隙について突っ込んできたのがこの小鳥遊なわけなんだが……。

「……で、どうでしょう？」

得意の涙目＋上目づかいで再度聞いてくる小鳥遊。……うーん。困ったなあ……。

「正直に言えば予定はない。ああないさ！ ないよこんちくしょう！」

「なんで怒るんですか……？」

そりやお前、『イヴに予定ありません』なんて悲しいこと言わせるからだよ……。ああ泣きてえ。いつそ凜子連れて熱海でも行こう

かな？　そういうサービスあるらしいし。

「よ、予定がないなら……」

「小鳥遊。お前の言いたいこともわかるんだがな。……そういうのは俺的にどうかと思うんだよ。……なんつーか、不誠実なんじゃないかって、さ」

俺はこの小鳥遊を振っている。

『諦めない』とこいつは言っていた。その後の行動でもそれを示している。それはいい。有言実行で格好いいとさえ思う。たまに行き過ぎてるけど。

でも、それに俺が甘えるのは違うと思うのだ。『振った』以上、毅然とした態度をとるのが振った側の最低限のマナーじゃないのか？　……こいつが、すごいいいやつだということ、それから本気で俺なんかを好きになってくれたこと、それはよく知っている。だからこそ、俺はこいつに不誠実なことだけはしたくないのだ。

そしてもう一人。自分が惚れている女の子。長谷川さんの存在。本気で好きなんだよ長谷川さん。そのために『ハーレム』作ろうとしたくらいに。

それほど好きな女性がいるのに、その子以外の女の子と特別な日を過ごすのは、これもまた『不誠実』なんじゃないかって。

え？　だったら長谷川さんを誘えばいいって？

……俺はまだ三日前の事件から立ち直っていないんだ。

『ハーレム機能』が通じないってことは、変な行動すれば当たり前のように嫌われるってこと。そのリスクを乗り越えて長谷川さんを誘うことなど、ぼっちレベルカンスト、リア充レベル1の俺には、まだできない。

情けない俺を笑ってくれ。ただし、片思いの相手がいる奴はそいつに玉砕覚悟で気持ち伝えてから笑え。できるか？　なかなかできねえだろ？　なあ？

——そういう訳で、イヴの俺には予定はない。そりゃ『ハーレム機能』があるからお誘いはいっぱいあったさ。でも、その全てを断り今に至るわけだ。

古くさいと笑わば笑え。これが山田晴樹の生きる道だ。
……いいもん。俺には凜子がいるもん……。

「……不誠実、ですか……えへへ」

なぜか俺の発言を聞いてうれしそうな笑顔を浮かべる小鳥遊？
あれ？　今の話のどこにこいつの喜びポイントがあった？

「……やっぱり、優しいです晴樹くん。……でも、そんなに気を使

つてくれなくてもいいんですよ？　もう私、吹っ切れましたし」

「いやでもな。小鳥遊よ」

「いいじゃないですか。予定の無い寂しい者同士、慰め合うつてことだって。友達……として会ってくればいいんですよ。気楽に」

「……………うーん」

「それにどうせ、イヴに晴樹くんと一日いたりしたら、私きつと緊張で死んじゃいますし、いつしよにいても楽しませたりできませんしね……地味だし……」

そう言いつつ勝手に地味に落ち込んでいく地味小鳥遊。まさに地味。

いや。お前見てると結構飽きないぞ？　なんていうか、そう。滑車の中で全力疾走しているハムスター見てるみたいで。うん。

「だから、十分、いえ五分でいいんです。ほんと、会ってくれるだけでもいいんです。……それだけでも、ダメ、でしょうか……？」

——ここまで言われて断れるほど、まだ俺の心は強くなかった。

翌日。二十三日。我が自宅にて。

ぴんぽーん。

「……………凜子、愛して……………あー、はいはい。今行きますー」

がちゃ。

「晴樹ー。今年も来た。お裾わけ」

「おう美鈴か。さんきゅーな。ついでにお茶でも飲んでけ」

「ん。そのつもりで持参してきた。おばさんは？」

「買い物いつてるわ。……また『濃』い。お茶』かよ……」

「くせになるのよこれ。おじゃましまーす」

腕に山盛りのみかんとペットボトルを抱えて現れた幼馴染。

こいつの母方の実家が農家を営んでいるそうで、この季節には毎年お裾わけを頂く。恒例行事だし、うちの実家から送られてくるものをお返しするからいまさら遠慮はしない。

リビングに通し、二人でこたつに足を入れる。

「ふー。あったかい。今日はまた特に寒いねえ」

「しらん。うちから一步も出てないしな」

「明日は雪かも……って話よ。まー引きこもりの晴樹には関係ないか」

「大きなお世話だ。それに明日は出かける予定がある」

「あれ？ 明日発売のゲームあつたつけ？」

そう言いつつ、ペットボトルに口をつける美鈴。

「いや。小鳥遊と約束がある」

ぶーっ！

「おい美鈴！ カーペットに染みが出来るだろ！ 早く拭け！」

「げ、げほっ！ げほっ！ ちょ、ちょっと待って！ 今なんて！？」

むせながらも必死に問いかけてくる美鈴。おい、いいからカーペツトを。

「なんで！？ まさか付き合うことにしたとか！？」

「おいカーペツ」

「そんな後でぴっぴかにしてあげるわよ！ それよりどういうこと！？」

なんでそんなすごい勢いで迫ってくるんだよ！？ 俺悪いことしたか！？

「……なりゆきだなりゆき！ 付き合ったりしねえよ！ 確かに告白はされたさ！ そんならいお前ならわかるだろ！ でもちゃんと断った！」

「あ。やっぱりね。それは、うん。なんとなーく気がついてた」

……そこは驚かないんだな。やっぱり千里眼持つてるだろお前。

「あーびつくりした。むせちゃったじゃない。まったく」

あれ俺が悪いの？ ねえ俺が悪いの？

「でも、おかしくない？ 振ったんでしょ？ なんでイヴに会う約束なんか？」

「それはむしろ俺が聞きたい。……『五分でいいから』ってせがまれてなあ」

俺の返答に、何かに納得したようにうんうん頷く美鈴。

「なるほどね。『五分』か……。それ、未練ありありよ？ 気付い

てる？」

美鈴のその言葉に返答に困る俺。そんな俺をせかすでもなく、間を持たすようにゆっくりとお茶を口に含む美鈴。こういう心遣いが出来るのがこいつの美点だ。

「でもなあ。俺、ちゃんとやったんだぜ？ 『好きな人がいるからごめん』って。でも小鳥遊のやつ、それも知ってて」

ぶぶーっ！！

「おいてめえ美鈴！ 今度は俺の顔面に向けて発射かよ！ 上等だ表でろ！」

「晴樹！ げぼげぼっ！ 晴樹晴樹晴樹！！！」

「なんだよ！？ いいからまずそのティッシュよこしやがれ！」

粘度の高いこのお茶が顔面についてると気持ち悪いんだよ！ 緑だし！

しかしこの失礼な女は、ティッシュを取るより先に俺の胸倉をつかむ。

「あんた！ 今なんて言ったの！？ りぴーとあふたーみー！！」

「え？ え？ 『好きな人がいるからごめん』？」

その迫力にビビりつつさっきの発言を繰り返す。

それより美鈴！ 顔！ 顔、地下一階、違う近い近い！

「そつちじゃない！ そんなの知ってる！ そのあと！」

「『小鳥遊のやつ、それも知ってて』？」

この発言に何の意味があるんだ？ …… っていうかやつぱり『俺には好きな人がいる』のは知ってるんだな美鈴よ。幼馴染ってすげーよなあ。俺はこいつの好きな奴なんて見当もつかないけど。

「……はあ。そっか。そうなのかー……」

「おい美鈴。いい加減に離せ。あと自分一人でわかるな俺にも教える」

……やがて美鈴は俺の胸倉から手を離し、こたつに戻る。

「小鳥ちゃん。本気だよ。本気も本気。うん。すごいね」

「まあ……うん。それくらいは俺にもわかる」

というか命がけで思い知らされたしな。教室とかスーパールとかで。

「晴樹。あんたに好きな人がいるのは知ってた。名前は出さないけど、多分、間違っていないと思う。そういう確信がある」

「……お前ならば、わかるだろうよ」

千里眼だしな。

「それは私が晴樹を生まれた時から知ってるから。幼馴染だからね」
「生まれた時の記憶はないけど、まあそうだろうよ」
「ちなみに美鈴のほうがちょっと誕生日が早い。」

「小鳥ちゃんは、私が積み上げてきた時間があるからこそ見抜いた晴樹の気持ちに、たったの数ヶ月の付き合いで気がついたんだよね」
「……………」

正確には小鳥遊的には一年八ヶ月の付き合いだけだな。異世界分足して。

「それからもうひとつ。あんたに好きな人がいること。私は知ってたけど、あんたの口から聞いた訳じゃない。その答えをあんたから引き出した小鳥ちゃんはすごい」

「いやそれはほら、告白されたからであって……」

「ウソだね。晴樹は他人に本心見せないもん。仮に誰かから告白されたとしても、その答えはきっとこう。『今は誰とも付き合う気がない』」

……まるで見てきたかのように言うよなあ。事実を。

確かに一回目の告白の時はそう答えたよ。俺。

「恋ってすごいね。うん。すごい。私はしたことないけど、誰かを好きになるってこんなにもすごいことなんだ。正直、驚いたよ」

「あれお前そういう経験ないのか」

俺の言葉に皮肉っぽく笑う美鈴。

「それ、晴樹が言うかなー。私にはずっと昔からあんたがいつしよにいたからね。男の子って存在に近すぎたんだと思う。晴樹がいたせいで誰も寄ってこなかったなんてことは思っていないけどさ、男女間の友情ってやつ？ あれが成立する人になっちゃったんだよねえ」

「そりゃ悪かったな。でもそんなもんかねえ？」

「私もわかんない。……でもさ、恋ってやっぱり、よくわからない存在の異性とだから成立するんじゃないかなーって思うんだ。だから、ずっと晴樹といたせいで『男の子』っていうものに慣れ過ぎちゃった私は、まだ恋愛が出来ないんだと思う。自分でもよくわから

ないけどね」

——そう呟く美鈴は、見たことがないような『女の子』の顔をしないで、なぜか俺はそれを直視できずつい冗軽口を叩いて流そうとしてしまう。

「全人口の十％は同性愛者だって聞いたことあるぞ。全国の百合の人に謝れ」

「今の私、いいこと言っただからさー。ちゃかさないの」

「……はいよ」

……なんとなく、沈黙してしまう俺たち。ああ、別にこれが嫌ってわけじゃない。口をきかなくても、何もしていなくても気まずくならない。幼馴染ってそういうものだ。

「……うん。決めた。明日から……は学校ないから新学期からね。登下校、晴樹とするのはやめる。一人で帰ることにするよ」

唐突にそう言いだした美鈴。……おい、なんだって？

「は、はあ？ お前それって小鳥遊を応援するってことか？」

「ううん。違うよ。……あー、うん、どうだろ？ 結果的にはそうなるのかもしれないけど、別に小鳥ちゃんの味方ってわけじゃないんだよ。うん」

「意味わからん。くわしく」

「んと、なんて言ったらいいかな？ ……自分でもちよつとわからないから支離滅裂な説明になるかもだけど、いい？」

いつも快活な美鈴にしては珍しく迷った表情。無言で頷く俺。

「小鳥ちゃんの恋。それからあんたの恋。どっちも別の応援はしないよ。晴樹、そういうの嫌いだもんね。……でも、この経験は、絶対あんたのためになるよ。高一になるこの年まで晴樹見てきて、この変化は初めての事だもん」

「変化？ 俺は別にかわってなんか」

「かわったよ晴樹は。他人に初めて本心を見せた。私にさえめったに見せない本心を、今の晴樹はほんの少しだけ見せてる。小鳥ちゃん限定だけどさ。これって絶対いいことだよ」

「……………」

そうなのかな？ 俺は小鳥遊と出会ってかわってきたのだろうか？ 俺自身にはわからない。

考え込む俺に美鈴がさらに続ける。

「……だからこれも、お節介を承知で言う。晴樹。ちゃんと準備してあるよね？」

「なんのだよ？」

アレのことだろうな間違いなく。うん。

「プレゼントのお返し。……『五分でいい』ってことはそういうことだよ。いくら付き合う気はないとは言っても、お返しは必要だと思う。例えそれが『友達として』会うんだとしても。ううん。それなら、なおさらに対等でいないと」

「受け取らないって選択肢はないのかな？」

「それができる人ならさ、晴樹。そもそもイヴに会うのを断れると思う」

……想像してみる。プレゼントを抱えた小鳥遊に「いらん」という俺。

あ、だめだ。すでに小鳥遊泣いてるもん。俺絶対断れねえ。弱いなー俺。

「……………なあ、美鈴。お前今から暇だったりしねえ？」

「暇だけどね。さすがにそれを他の女に選ばせるのはダメだと思うよ。うん」

「あー……………うん。そうだな。…………でもな、こんな経験ねーじゃん？選べとは言わない。自分で買いに行くさ。だからせめて、何かヒントくれ。じゃないと俺、何買うかわからんぞ？」

混乱した俺がペットフードとか買ってきたらどうする。

…………まあ、それでも小鳥遊は喜びそうな気はするが…………。

「…………うーん。付き合ってる訳じゃないし、重いのはダメかもね。というわけで光りものは却下。リングとかはだめってこと。だから言ってお菓子とかで済ませるのもどうかと思う。ゲームソフトとかは論外ね。…………そんなに高くないアクセあたりが順当かなあ…………。あ、でもピアスはダメね。小鳥ちゃん、穴開けてないみたいだし」

おいちよつと全国のぼっち仲間の諸君。プレゼント選びすぎてー大変みたいだぞ？ 将来、そういう相手が出来た時に苦しみ。あと爆発しろ。

「…………でも、まあ」

美鈴が優しい顔で微笑みながら言う。

「晴樹が選んだ物なら、なんでもいいんだよきつと。晴樹がさ、小鳥ちゃんに似合うと思うものを買ってきなさい。それがきつと正解だよ。うん」

……俺はその後、このくそ寒い真冬の空の下、実に五時間かけて『小鳥遊に似合うもの』を求めさまよい歩くことになる。

こういう時、『ハーレム機能』はじつに鬱陶しい。どこの店に行っても女性の店員さんが寄ってくるからだ。アクセの店なんか、女の人しかいないからな。詳細は省くが、もう言ってみれば『ハーレム地獄』みたいなもんだった。思い出したくもねえ。

……やつと決めた一品、それを持ち帰った俺はそのままベッドに飛び込んだ。

似合うかどうかは責任もたん。小鳥遊が喜ぶかどうかも知らん。

でも。ま。

なんとなく、あいつは喜んでくれそうな、そんな気は、した。

不幸な彼女のクリスマスイヴ　く前編く（後書き）

まさかの前、後編仕様に……。

まとめ能力のない作者ですいません。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

追記

12/23、累計PV53,000over、そしてユニーク万人達成しました。

ちよつとだけ早いクリスマスプレゼント、ありがとうございました。

不幸な彼女のクリスマスイヴ 〔後編〕

翌日。十二月二十四日。全国的にクリスマスイヴの日。呪われる。

小鳥遊との約束は姫神駅前に十二時。

基本的に約束は守る俺は、当然待ち合わせ時間前に起床し、まあ、なんだ。『イヴに女性といてもおかしくない』格好などをしていた。断じてオサレなんかしていないぞ？ 何しろ相手はあの小動物だし。

イヴ当日、この期に及んでもどこか腰が引けてる自覚がある自分。本当に会いに行つていいものなんだろうかねえ……。

今更のようにそんなことを考え、自分で淹れたコーヒーをすすりつつテレビを見てみると、珍しいことに自宅の電話が鳴った。うちのかーちゃんと俺の二人暮らし。当然二人とも携帯持っているので、固定電話はほとんど鳴らない。

「はい。もしもし。山田ですけどー？」

かーちゃんの声が聞こえる。そういえばさ、固定電話だと必ず使う「もしもし」ってやつ。携帯だと誰も使わないよな。なんでだろ。

「へっ？ あ、はい！ はい！ います！ はい！」

何やら動揺するかーちゃん。まさか田舎のばーちゃんが倒れたとか言っんじゃないだろうな？ ないか。妖怪みたいに長生きしそうだしな、あのばーちゃん。

「は、晴樹！ あんたあて！ 小鳥遊さんって女の子から！」

ぶーっ！

コーヒー吹いた。昨日からうちのカーペットはお茶やらコーヒーやら大惨事だ。

いやそれはあとでいい。何してくれやがる小鳥遊！ 見るあのかーちゃんの興味津々な眼差し！ これあとで言い訳大変だぞ！

俺は気持ち悪い笑みを浮かべるかーちゃんから子機をひつたくる。

「おいてめえ小鳥遊！ まだ時間じゃねえだろ！ 嫌がらせか！？」
『あああ！ ごめんなさい！ 晴樹くん！ あの、その……ごめんなさい！』

ん？ なんか様子がおかしいぞ？ 声が切羽詰ってる。それはいつもか。

「落ち着け小鳥遊。どうした？ なにかあったんか？」

『あの！ あの！ お、お父さんが事故にあったって連絡があつて！ それで、ごめんなさい！ 今日、約束してたのに、約束してたのに！ あの！』

「……わかった。そういう事情ならしかたねーだろ気にすんな。親父さんのほうが大事だ」

『で、でも！ 私！』

「興奮すんな。約束は守る。そっち落ち着いてから会えばいいだろ？ 明日でも明後日でもこっちはいいからさ。今は親父さんのこと考える。……親父さん、確か海外だろ？」

『ジ、ジンバブエです……』

そりやまた遠いというか……。

「……最悪、新学期始まってからでもいいしな。な、小鳥遊」

『ごめんなさい……。ううつ、せっかく約束したのに……。』
「とにかく事情はわかった。今日はキャンセルな。……じゃあきるぞ。そっちも大変だろうけどとにかく落ち着いてな」
『は、はい……。わかりました。……約束ですからね。忘れないでくださいね。……じゃあ、失礼します……。』

ガチャ。ツーツーツ……。。

……なんつーか、あれだよな。不幸属性だよな小鳥遊。
親父が事故っていうのも不幸だけど、その、今日っていうのが、
な。

……さて。

「おいこらそこ。そこで盗み聞きしてるあんだあんだ。かーちゃん」

「うふふ……。美鈴ちゃん以外の女の子から電話ねえ……」

「何か勘違いしているようだが、ただの『友達』だからな」

「友達でもいいわよ。男友達からすら電話なんか来たことないじゃないあんだ」

性別以前に友達そのものがないからな！ くそう！

「お母さん、今日は買い物で夜まで帰ってこないからね！ その、家に呼ぶならもう遠慮なく使ってくれていいからね！」

「余計な気を回さなくていいわ！ もういい！ 出かけてくる！」

「あー、晴樹だ。約束、今からのの？」

マンションの外に出た途端、今度は幼馴染に捕まった。まさかお前とかーちゃん、結託してるんじゃないだろうな？ …… ありえる。

「いや。あー、……確かに昼からだっただけだな。キャンセルになった」

「はあ？ なにそれどういうこと？ まさかあんた、小鳥ちゃんに何かひどいことやらしいこと言って怒らせたか泣かせたかしたんじゃない……」

「どうしてそう悪意を持って解釈する？ 違うわ。……なんか、小鳥遊の親父さんが事故にあったらしくってな。キャンセルというか正確には延期だ」

俺の言葉に目を丸くする美鈴。

「それは……なんというか、大変よね」

「しかも親父さんジンバブエだ」

「ええっ！ それ年内に帰ってこれるの？」

「どうだろうなあ……」

実際のところ俺は、ジンバブエがどこにあるかなんて知らないし。ものすごいインフレの国という知識しかない。紙幣の額面じゃなく重さで取引されるとか？

「ふーん……。で、晴樹は落ち込んで……わけじゃないわねその顔は」

ばれたか。

「あーあれか。『ほんとに今日会っていいのかなあ』なんてうじうじ悩んでいたところにキャンセルの電話が来た……そんなところかな？」

「千里眼持つお前に隠してもしょうがねえよな。その通り」

「持っていないわよそんなもの。……でも、ま、いいか。じゃあ晴樹、暇なのね？　せっかくだしお昼でも食べに行こう」

「……しかし、小鳥遊さんもついてないよねえ」

「本質的に不幸なんだよあいつは。不幸属性持つてる。しかもM A Xで」

……姫神商店街のはずれにあるパスタ屋。美鈴はここがお気に入りで、二人で食事をするときはいつもここを使っている。今は食後のお茶の時間。

「せっかくイヴの約束取り付けたっていうのに……相手はこんなだけだ。……そう言えばすっかり聞くの忘れたけど、あんたのどこがいいの？　小鳥遊さん？」

「こんなので悪かったな。……どこがいいって、そんなの本人に聞けよ。それ俺が言うことじゃねえだろ」

「……仁侠映画が好きだとか？」

「チンピラ顔ですいませんでしたねえ！！」

思わず叫んでしまう俺。失礼すぎる。お冷ぶっかけてやるうか？　その声は意外と店内に響き渡ってしまい、ある人物の耳にも届い

てしまう。

「……あー、やっぱり山田君と美鈴ちゃんだー。なにー？ なになにー？ 山田君、今日は美鈴ちゃんとデートなのー？ ふたまたー？」

そんな天使のような声でとんでもないことを抜かしつつ、美鈴の隣に腰掛ける俺的絶世の美少女。すなわち。

「あー。長谷川さん、偶然だねえ。デートじゃないよ。お昼食ベてるだけ」

「お、おつ、そうだぞ長谷川さん。こいつとは腐れ縁だしな！」

「ちょっと！ まさか冬休み中にも会えるなんて！ 神様ありがとう！」

「でも今日イヴだよー？ イヴに二人きりで食事ってどうなのさー美鈴ちゃん？」

「どうもなにもないの。……長谷川さんは待ち合わせかなにか？ そっちこそこれから素敵な彼氏とデートとかじゃないの？」

「……神様っ！ 俺はこの返答しだいでは樹海へ行くことになりそうです！」

『YES』だったら俺はもう生きていきません！ むしろその彼氏とやらに何をするか自分でも分かりません！！

「ざーんねん。お母さんと待ち合わせー。イヴと一緒に過ごす相手

なんていませんよー。美鈴ちゃん、誰か紹介してー」

……俺の脳内にファンファーレが響き渡る！

よっしゃ！ おいちょつと聞きましたか！？ 彼氏いないって！
いないって！

俺が脳内パレードしている間に、長谷川さんの言葉に笑って答える美鈴。

「紹介するくらいなら自分の彼氏にするさー。出会えないしねえ」

「ま、お前はまだ色気より食い気だしなあ。美鈴」

「あー、山田君失礼ー。そういうこといってると、今に美鈴ちゃん誰かに取られちゃうからねえ？」

「取られるもなにも、もともと晴樹のものじゃないしねえ私」

「む？ 本当にそうなんだ？」

「そつそ。……ところで長谷川さん、ほんとに彼氏いないの？」

よつし美鈴よく言った。聞き出せ！ 聞き出すんだ真実を！

俺はぼつちの基本スキル、『隠密』を使い聞き耳を立てる。

「いないいないー。いたらイヴにお母さんといないよー。出会いがないもの」

「あーそつかー。長谷川さんならどんな出会いなら惚れちゃう？」

そうねえ……そう呟いて考え込む彼女。その仕草すら可愛くて困る。

「たとえばー。入学式。友達いなくて一人で不安なところに声をか

けてくれるとか?」

「あーいいね。そういうことができる人。……晴樹、なに变な顔してるのよ?」

「い、いや別に……」

「あとはそうだなー。遠い異国に私ただ一人。そこで偶然に再会するとか?」

「ロマンよねえそれも。……晴樹あんたどうしたの? おなかでも痛いのか?」

「あ、う、き、気にしないでくれ……」

「ちょっと夢見ちゃうとー、私の中にある制御できない力が暴走したときに助けしてくれるとか、かつこよくないかなー?」

「あはは、さすがにそれはないない。……ちょっと晴樹! 顔色が白を通り越して土気色! 死にそうよあんた!?」

「ご、ごめんなさい……。生きててごめんなさい……」

つまりあれか。

小鳥遊の気持ちは、成るべくしてあなっただってことなのね……。

「わあ! すごいー! まっしろだよー!」

食事を済ませ外へ出ると、そこは白い世界だった。

しんしんと降り積る雪の中、そう言って赤いコートを翻してはしやぐ長谷川さんはまるで妖精のように綺麗で一枚の絵画のよう……

…。

「ホワイトクリスマス……だね」

「ああ……。俺、この光景見ただけで生きてて良かったって思えるわ……」

神様もたまには粹なことしやがる。うん。心からありがとう。

「話しこんでる間にずいぶん積ったみたいー！　きれいだねー！……っと。お母さんきたー。じゃあ二人とも、またねー！　メリー・クリー！」

「はい。またねえー長谷川さん」

「ま、またな！　転ぶなよー！」

ぶんぶんと元気よく手を振る長谷川さん。……ああ、来年までの天使に会えないのか……そう思うと悲しくて泣きそうだ。

「……よかったね。晴樹」

この千里眼め。

「ああ……。誘ってくれてありがとな」

——ここで終われば、俺にとっては幸せな、いや、切なく『ない』イヴだった。

爆弾は自宅リビングの留守電の中に仕掛けられていた

『一件のメッセージがあります。二十四日、十二時十五分』

『——あ、山田さんのお宅でしょうか？ 小鳥遊といいます。……あの、晴樹くんへ伝言お願いします。——私の勘違いでした。お父さん、無事でした。……あの、やっぱり今日会いたいので、約束の場所に待ってます。もし、時間があつたら、来てください。お願いします』

ピーッ。

俺は走りにくい雪の上を全力疾走する。

静かに降り続ける雪は、いまだやむ気配を見せない。

今の時間、夕方の四時過ぎ。

美鈴と別れた俺はそのまま街を無意味にぶらつき、本屋で時間を潰し、ゲーセンで時間を潰し……帰宅して聞いた留守電のメッセージに肝を潰した。

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ げほっ！ はあ……」

四時間だ。常識で考えれば待つてゐるはずがないと思う。しかし、俺は知っている。小鳥遊が帰るわけではない。

あいつは多分、俺が行くまで何時間でも駅前で待ち続ける。そういうやつだ。

だから、いると確信していたから、すぐに見つけることができた。

小柄で地味で影が薄くて、このホワイトクリスマスに浮かれた人々に埋もれてしまっていた、ぽつんと一人立ち尽くす寂しげな彼女のことを。

人波をかき分け進む俺に気がついた彼女の表情が輝く。
主人を待つ忠実な飼い犬のように。ただただ、嬉しそうに微笑む。

「はあ……はあ……。すまん。小鳥遊。遅くなった。すまん」
「う……ううん。わ、私も今来たところ、ですから……」

嘘を、嘘をつくならもう少しまともな嘘をつけ。
俺は小さな小鳥遊の髪に積った雪を落としつつ思う。……髪に雪が積もるって、お前、絶対ここから一步も動いてないよな。

「……せめて、そのコートのフードを被っていれば……」
「あ、その、私、影が薄いから、フード被ってたら見つからないかなーって……」
「……あほだろお前……」

この期に及んでこいつは、俺に気を使うのだ。
俺が見つけやすいように、と。

「親父さんは？」

「あ、あれは……その……」

「事故じゃなかったならいいけどさあ……」

「で、電話がかかってきたんです。『もしもし、俺、俺。実は事故っちゃって大至急お金が必要なんだ。ちょっと振り込んでもらえないかな？』って。……うち、自分のこと俺っていうのお父さんしかないし……」

「オレオレ詐欺じゃねえかそれ！ 今時そんなもんに引つかかるやついねえぞおい！」

「ジ、ジンバブエにいるはずなのに、ナンバーディスプレイに市街局番が出てたから、おかしいなーって思ったんですけど……」

「番号発信しているその犯人もお前も大馬鹿野郎だ！……」

俺は天を仰ぐ。

魔王よ。変な魔法を授ける前にこいつに知恵を与えてほしかったよ……。

「ご、ごめんなさい晴樹くん……。心配掛けて……」

「あーもういいもしいい。お前はそういう奴だ鳥頭め。……しかしそれならそうと、早く教えてくれればよかったんだよ。携帯に電話するとかさあ」

俺の言葉に寂しそうに首を振る小鳥遊。

「だ、だって知らない、ですもん。晴樹くんの番号……」

「ああそうか、教えてなかったな。じゃあ誰かに聞くとかさあ？」

美鈴とか美鈴とかあと美鈴とか。……やべえ。クラスで俺の番号知ってるのって、実は美鈴だけなんじゃねえか？ ……地味に落ち込んできたぞ俺。

「それは、嫌だったんです……。好きな人の番号、他人から聞くのが……。好きな人、じゃなくてもマナー違反ですよねそれ」
「……………」

うん。この件に関してはもういいや。平行線になりそうだ。

「そ、それに、待ってる間、いろいろ考えて学べましたし……」
「なにをだよ。駅前留学でもしてたのか？」

ジンバブエ目指して。英語圏かどうか知らんけど。

「初めの一時間は、その、晴樹くん怒ってるだろうなーとかそういうのばかりでしたけど、二時間過ぎたあたりから、これだけ待てば許してくれるかなーって思ってた。ちよつとホツとして、三時間過ぎたところから今度は逆に晴樹くん、なにかあったのかなー、事故とかじゃないよなーって不安になって……」

そこでちよつと言葉を切り、顔をあげて続ける小鳥遊。

「四時間過ぎたころ、晴樹くんが来てくれました。……すごい必死に走って来てくれました。それから迷わず私を見つけてくれました。優しく雪を振り払ってくれました。……ああ、やっぱり私はこの人が大好きなんだ、って、会えるだけでこんなにうれしくなる人なんて、もう、晴樹くんしかいないなーって。……だから」

何も言い返せない俺に、そつと大事に抱えていた紙袋を差し出す

小鳥遊。

「晴樹くん。……受け取ってもらえますか？」

……袋の中には、黒い毛糸で編みこまれたちよつとだけ目の粗いマフラー。

黙って受け取り、それを首に巻いてみる俺。

「……にあうか？」

「……！！はいっ！はいっ！とってもかっこいいです晴樹くん！……受け取ってくれて、身につけてくれてありがとうございます！……」

なんで。

プレゼントをもらった俺よりも贈ったお前のほうがうれしそうなんだよ。

どうしたらそんなに、献身的に尽くせるようになるんだろう。

どれほどの想いがあれば、人はこうなれるのだろう。

こんな、俺のために。

「あ、あはは。うれしいな。すっごくうれしいです。イヴに間に合わなくなりそうになって時間を止めてまでがんばった甲斐がありましたー！」

「そんなことに魔法つかってんじゃねえよ！」

「う、ごめんなさい！ ……ごめんなさいついでに、その。あの。わ、私も、晴樹くんからプレゼントもらっても、い、いいですか？」

……珍しいなこいつがおねだりとは。

あーあれか。俺のコートのポケットも膨らんでるしな。さすがに気がつくか。

俺が答えるより早く、小鳥遊はポケットに向かって手を伸ばし……そのままその小さな手はさらに前に進み、俺の手をそっとつかむ。

氷のように冷え切ったその手。その冷たさ、それは彼女が俺を待っていた時間の長さを何よりも雄弁に語っていて。

「あ、あったかい……。えへへ。あったかいです。晴樹くん。……少しだけ、ほんの少しだけでいいから、こうしていてもいいですか？」

俺の手を嬉しそうに両手で抱え込み、そして俺の返答を待つ小鳥遊。

「俺からのプレゼント、って、これのことなのか？」

「はい。好きな人の手の温もりですよ？ これ以上のものなんてありませんよう」

そう言って幸せそうに微笑む小鳥遊に、俺は何と言えいいのか。

……こいつは、こういうやつだった。ただただ俺に注がれる無償

の愛情。

その見返りに求めるものは、こんなちっぽけなもので。

言葉にできない。だから俺は行動する。開いているほうの手でポケットからその小さな小箱を取り出す。

「……それだけでいいのか。残念だ。俺も用意してきたのにな。プレゼント」

人付き合いの下手な俺はこういう言葉しか紡ぐことができない。

ぱつと顔をあげた小鳥遊がそのきれいにラッピングされた小箱を見る。

信じられない……そう顔に書いてある。わかりやすいなお前は。

「あ、あの！ あの！ あのー！」

「いけないならしかたない。これは誰かほかの人に」

「だめだめだめだめっ！ だめです！ ください！ 見せてください！ ええっ！？ どうして手が届かないくらい高く掲げるんですかいじわるです！」

「ほーらたかいたかいー」

「今の晴樹くんは知りあってから一番ひどいです！ 泣きますからね！ 大声で！ もうわんわん泣きますからね！ 人目もはばからず！」

それは困るな。

だから、俺は彼女にそれを差し出す。

震える手で受け取る小鳥遊。しかしその小さな手は寒さでかじかんでいてリボンをほどこすできない。

「晴樹くん！ 晴樹くん！ 手が！ 手が震えて開けられません！」
「ん？ しゃーねえなあ。ほれ」

びりっ！

「ああああああああっ！ なんてことするんですか晴樹くん！
包装紙！ 破れましたよ今！ もっと優しく！ 丁寧に！」

「なんだよ袋なんてどうでもいいだろ。大事なのは中身であって」
「晴樹くんは女心をこれっぽっちもわかっていません！ 好きな人
からもらった初めてのプレゼントなんですよ！ 包装紙もリボンも
宝物に決まってるじゃないですか！」

ああ、女ってめんどくせえ。

しかし、本気で怒ってる小鳥遊が怖いので言つとおり丁寧に丁寧に封
を開ける。

——小鳥遊に見せたものは、シンプルな黒のチョコレート。

震える手でそれを受け取った小鳥遊が、ぼろり、ぼろりと涙を零
す。

「お、おい……？ 不満か？ デザインが気に入らなかったか？」
すまん小鳥遊。お前〓子犬ってイメージでこれにしたんだがダメ
だったか？

ふるふる、ふるふると首を振る小鳥遊。そのたびに涙が流れ落ち
る。

「うれしくて、うれしくて、もう、うれしくて……。でも、どうしよう。晴樹くん。すぐにこの素敵な贈り物をつけたいのに、涙で見えません……。つけられませんよう……」

目をこする小鳥遊だが、涙は後から後から湧いてきて、一向に止まる様子がない。

「ありがとうございます、ありがとうございます……。ごめんなさい。晴樹くんはすぐに私のマフラー使ってくれたのに、私はこんで、ごめんなさい。ありがとうございます……。ありがとうございます……」

……………。

……。あー、もう、うん。だめだなこれは。やっちゃいけないことだろ。

わかってはいる。わかってはいるのだ。これが友達にすることではないと。

でもな。

不誠実と呼ぶなら呼んでくれ。甘んじて受ける。優柔不断のそしりも。

——そつと小鳥遊の手からチョーカーを受け取る。留め具を外す。

小鳥遊の首は細くて、触れたら壊れそうで、チョーカーのオサレな長さなんか俺にわかるはずもなく、でも俺は、不器用ながらも

彼女にそれをつけてやる。

振り払っても振り払っても、どうしても俺から離れない小さな涙目の捨て犬に、ついに諦めて首輪をつけるかのごとく。

——もう、認めよう。俺はこいつを、見捨てられない。

たとえ俺に、好きな人がいたとしても、だ。

「に、にあい、ます、か？」

不安そうに不安そうに、そのチェーカーをつまみ俺に聞いてくるこいつを。

「あー、うん。世界首輪コンテストがあつたらお前が優勝だ」

「え？ あのそれ？ ほめてます？ あれ？」

答える代りに、俺はマフラーを外し、小鳥遊の首に巻きつける。顔を隠すように。俺の顔が見れないように。きっと真っ赤になるから俺が。

「……ああ。よくにあってる」

「……！！ あの！ あの！ あのっ！！」

「帰るぞ。小鳥遊。このままじゃ風邪ひくだろっし、それ巻いてけ」

「あ、あの、これはあげたもので晴樹くんのもので、あれ？」

「そうだそれは俺のものだ。それ以前にお前のものは俺のものだ」
「ジ、ジャ。アンですか？」

「だから早く返しに來い。新学期が始まる前に。……そうだな。俺はこの休みはひきこもる予定だが、初詣だけは行こうと思ってる。その時寒いと嫌だからな、持って來い」

「は、はい！……え？ あ的那样って」

「その先を口にしたら」

慌ててマフラーを引き絞る小鳥遊。……新しい芸を覚えたなこいつ。

話はこれまで、とばかりに背を向ける俺。……寒いんだよ。早く帰ろう。

その後ろを、俺に遅れないように必死についてくる小動物。

「あ、あの！ じゃあ連絡とれないと不便ですよね！？ ねっ！？」

「ほれ。携帯。赤外線ついてるから勝手に登録しろ」

「は、はい！ はい！ ありがとうございます！……あ、あの！ たまに、で、電話とかしても、いいですか？」

「用があるならな」

「じゃ、じゃあ！ メールとかしちゃっても！？」

「三日に一回くらいならな」

「晴樹くんのほうの携帯の私の名前登録、『彼女』にしているのですか！？」

「ふざけんな調子に乗るなそんなことしたら黙って機種変更するわ」

「うつつ……。そこも流して許可して欲しかったですよ……」

「甘いわけ」

……雪は、まだやまない。

ずかずか歩く目つきの悪い寒そうな男と、そのあとをちょこまか必死についていく薄倅そうな少女にも、優しく優しく降り続ける。

「……あ。大事なことを忘れてました。晴樹くん」
「なんだよ」

「メリークリスマス。……私に、最高のイヴを贈ってくれてありがとうございました。……私は今日のことを一生忘れません。私は、今、きつと世界で一番幸せです。絶対、絶対。……私、晴樹くんを好きになって本当によかった。……大好き、です。晴樹くん。ずっと、ずっと、これからもずっと、大好き、です」

……しんと、静かに雪は街を白く染めていく。

——目つきの悪い男の持っていた、どうしようもないほど深く、暗いコンプレックスすら、純白に塗り替えるように。

——諦めないと誓った少女の、その強い想いを、その控えめな笑

顔を、白銀に輝く光でより一層引き立てるように。

……そんなことがあってもいい。だって今日は聖なる夜。
神様だって魔王だって、優しい奇跡を起こしてくれる、そんな日
だから。

世界中のみんなに。

Merry, Merry Christmas!

不幸な彼女のクリスマスイヴ　　く後編く（後書き）

——不幸な小鳥遊さんが、ちょっとだけ幸せになるお話でした。

以上で今現在、私の中にあるこの物語は全て出し切りました。

ゆつくり時間をかけて、また小鳥遊さんや晴樹君、美鈴さんや長谷川さんの

これからの物語を紡ぎあげていこうと思います。

その時にはまた、お付き合い頂ければ幸いです。

ありがとうございました。そして、Merry・Merry Christmas!

あなたの聖夜が、幸せなものでありますように……。

山田晴樹の華麗なる休日

——リア充どもは言う。

「友達とか彼女のいない奴らってかわいそうだな。休みの日に出かける予定がないとか、すっげー暇そうだし（笑）」

……奴らは何もわかつちやいない。

俺たちぼっちの休日がどれほど充実しているのかを。
どれだけ多くのタスクを抱えているのかを。

買うだけ買って読む時間の無かったラノベ。やる時間の無かったゲーム。

録画してためておいたアニメ鑑賞。動画サイト検索。ニュースサイト検索。

常駐スレの警備。ネットゲでのクエスト消化。凜子にそつと愛をささやく大事な時間。

いやもう真面目な話、休日のぼっちのスケジュールはもはや分単位で管理されているといっても過言ではない。ちなみに俺自身はそのタスク消化のために専用のアプリを使っている。高度に洗練されたぼっちの休日とはここまで過酷なものなのだ……。

と、いうわけで。

この冬休み。俺は、それはもうすっかりと引きこもった。

将棋の穴熊戦法の王将ですら、俺の引きこもりっぷりには負けるであろう。何しろ、『あの』二十四日以来、今日三十日に至るまでの六日間、俺は家から一步も出ていない。ここまでくるといつそ清々しいほどの引きこもりっぷりである。またそれで『寂しい』とか『つまらない』とかいう感情が全く沸いてこないのが俺のぼっちレベルの高さを表している。

多分、俺は二次元の世界、つまりゲーム画面の中に閉じ込められてもきつと困らないと思う。だから早く迎えに来ておくれ。凜子。俺は待ってるよ。

ちなみにこういった長期の休みの場合、三日と開けずにうちに押しかけてくる美鈴は、何でも母方の実家に顔を出さなくてはならないとこのことで、明日三十一日まで帰ってこない。さすがの千里眼も田舎からここまでちょっかいを出すことは出来ないようだ。

——そして。最大の懸念であつた『彼女』。

……小鳥遊が俺の携帯アドレスを入手したことにより、怒涛のようなメール攻撃を覚悟していたのだが、これがまた拍子抜けするくらいに全然こない。もしかしたら友達のない小鳥遊さん、メールという機能を使ったことが無くて俺のアドレス登録に失敗したのかなと、だったらラッキーだなあ……なんて油断していたら、二十七日、ありえないほどの長文メールが一通だけ届いた。

その途方もない長さに度肝を抜かれた俺が、思わずパソコンに転

送した上、念入りに縦読みが仕込まれていないか探し始めたレベルの長文である。

……結局縦読みは見つからず——というか『拝啓』で始まり『敬具』で終わるメールに縦を仕込めたとすれば小鳥遊はある意味天才だ——しぶしぶ中身を読みだした俺は、時候の挨拶から始まり、小鳥遊家の日々の献立、今年の干支に関する豆知識、ミシルちゃんの生態、そして来年の抱負から果てはユー口圏内を襲う経済危機にまで話が及ぶそのメールの意味不明さに頭を抱えた。

これほどまでに意味が分からないメールというのは、先月知らないアドレスから届いた『主人がオオアリクイに殺されて一年が過ぎました』という件名のメール以来の事だ。……なんだっただろうかなあ、あれは。どうでもいいけど。

……とりあえず熱意だけは感じられたので、返信をしておくことにする。

『長い。まとまりがない。読みにくい。』

文章評価 1P

ストーリー評価 1P

これではお気に入り登録は無理』

……はい。送信つと

ちょっと評価が甘い気もするが、まあ最初だし、おまけだ。

あの小鳥遊の事だから即座に涙目で返信してくるだろうし、その時に問答無用でポイントを0に入れ直してやればいいだけの話だしな。うんうん。

……しかし小鳥遊からの返信は俺の予想を大きく外し、三日後の三十日、つまり今日まで返ってこなかったのである。

うつかりそんなメールの存在を忘れてネトゲのレベル上げに勤んでいた俺は、再び小鳥遊から送られてきた、メール機能の限界に挑むかのような長文メールに驚かされる。

天災と小鳥遊メールは忘れた頃にやってくるのだ。

……またその内容というのが『如何に山田晴樹という男はひどい奴か』ということが長々と述べられた見るに耐えないもので、その彼のあまりの極悪非道っぷりには思わず俺が俺に義憤を感じるレベル。危うく闇に葬ってやろうかと思ったもん。山田晴樹の事。俺の事だけだ。

……うん。まあ、内容に関してはこの際置いといて、だ。

なんでまた小鳥遊は、こんな長文メールを、しかも目を開けて送ってくるのか……その理由を考えていた俺の脳裏に先日のイヴのことが甦る。

『じゃ、じゃあ！ メールとかしちゃっても！？』

『三日に一回くらいならな』

……一回目のメールが届いたのが、三日前。二十七日。

……二回目のメールが届いたのが、今日。三十日。

……。

「あのバカ……」

俺は頭を抱える。素直にも程があると言つか何と言つか……。

あの鳥頭は、律儀にも守っているのだ。

俺の言った『三日に一回メールしていい』ルールを。

三日に一回しか送れない貴重なものだから、こんな長くなるのだから。本来であれば一日数回やりとりすれば終わってしまうような大して意味のない話題を三日分まとめてお届けしているわけだ。……いや、もう、ね……。

……とりあえず、正確に三日に一回、こんなトンデモ長文メールが来るのは、読んだら寿命が縮まる新聞が自宅に届けられるくらい心臓に悪いので何とかしよう。

しかし、『三日に一回』と言い出したのはそもそも俺だし、今さら『もつと頻繁にメールを送ってきてもいいんだぞ?』とか言ったら分単位で新規メールが送信されてきそうだしなあ……。

——散々悩んだ挙句、俺は一通のメールを作成する。

『更新はもっと早い方がいいと思います』

送信つと。……この意味に気がついてくれるといいんだけどな……。

——ま、あれだ。

長文でどれだけ文句を重ねようと、最後の最後にこう書いてしま
うのが小鳥遊らしいんだけど、な。

『大晦日、会えるのを楽しみにしています』

……美鈴からの電話は、俺の大事な日課の一つである小説投稿サ
イト『小説家の過労！』閲覧中にかかってきた。小説家労働組合の
サイトというわけではない。念のため。

『小説家の過労！』というのは誰でも簡単に小説の投稿、閲覧が出
来るサイトで、そのシステム上、文章というものを書き始めた中学
生の妄想小説からプロ顔負けの作品まで幅広く掲載されており、見
ていて飽きる事がない。

特に今日は俺の自慢のスコップが良作を掘り当て、さあ、これか
ら一気にこの作品を読むぞと思っていた矢先の電話だったため、何

となく氣勢をそがれた気分になってしまう。

ピッ。

『はい。晴樹。おひさしー』

「おう」

『あれ？　なんか機嫌悪い？　どうかしたん？』

「ん。いや実は今、面白いネット小説読んでいるところだな。要件は手短に頼む」

えー……と電話口で美鈴が不満げな声をあげている。

『せっかく電話してあげたのにそれはないんじゃないかなー』

「ばっかお前。生まれた時から毎日会ってるお前と希少な優良ネット小説、どっちのほうが優先順位が上か考えるまでもないだろ」

今こうしてる間にも続きが気になって仕方がない。

『へー。ほー。そういうこと言うんだ。……ちなみにどんな小説なのよ？』

「ん？　これがまたすごくてな。開幕早々、魔王と戦闘中の勇者がパーティーメンバーに裏切られるんだ。もうこのオープニングだけで秀逸だろ」

『あーなるほどね。うんうん。あれは面白いよね。じゃあ晴樹の時間短縮の為に教えてあげるね。あの話、実は魔王の正体が』

ピッ。ガチャ、ツーツー……。

一秒後に再びかかってくる美鈴からの電話。

『ちよつと！　なんで無言で切るのよ！？』

「当たり前だこのどあほう！　お前は今、人としてやってはいけない事をしようとしてたんだぞ！！　その罪、万死に値するわ！！」

なんてことしやがるこの悪魔め！　……あ、いやそれより。

「……お前も見てるの？　『小説家の過労！』」

『実は日刊一位をとった事もある』

「ちよつと待てお前。タイトルが作者名教える。感想欄荒らしにいつてやる」

『やーよ。それにうちの読者様は怖いわよ？　そんなことしたらあんな、下手したらリアル割られて晒されるわよ？』

……くそう。こうなつたら意地でも探し当ててポイント入れた後、ランキング集計時間直前にそのポイント消してやる……。

『何かよからぬ事を考えてるみたいだけど……？』

「とんでもございません」

この千里眼、どうにかならないものだろうか？

『ま、いいわ。とにかく本題ね。……明日の初詣、私たちも行くから』

「はっ？」

え？　なに？　何を言い出したこいつ？？

『いやだからね。明日。小鳥ちゃんと初詣行く約束してるんでしょ？　それに私たちもいっしょにいくから、って話なんだけど。……あれ？　もしかして小鳥ちゃんから聞いてない？』

何してくれやがる小鳥遊のやつ！ あんな俺への恨み事だけで何千文字も使うような呪いのメールする暇があるなら、そういう肝心な一言添えるよ！

『なんかねー。小鳥ちゃん。まだあんたと二人きりでいると緊張しちゃうんだってさ。だから、もしよければいつしよに行ってほしい、って。いやー、乙女だねー、かわいいねー、うらやましいねー』
「もういつそ、お前と小鳥遊で行くというのはどうだろう？」

割と名案じゃないかこれ。俺、『行く年くる年』見てたいし。外寒いし。

『……このヘタレ引きこもりめ』
「うつせ」

『んー。まあ、晴樹が乗り気じゃないならしかたないかなあ。……ん！ わかった。やっぱり小鳥ちゃんと二人で行きなよ。こっちはこっちで二人で行くからさ』

それはそれで気が重いんだがな……。ところで。

「お前は誰と行くん？」

……なぜか、電話口の向こうで美鈴がにやりと笑った気がした。

『ん？ 佐代ちゃん。長谷川佐代子さん。……いやー、あのイヴ以来、なーんか妙に仲良くなってねえ。初詣もいつしよに行く約束してたんだけどさ。小鳥ちゃんからお願いされたから、『じゃー四人でいこー！』なんて佐代ちゃんも楽しみにしてたみたいだけどねえ。晴樹にその気がないならしかたないよね。うんうん』

絶句。

「こっ、こっ、こっ、こっ……」

『コケコッコー?』

「この腐れ外道がああ!!! おいキサマ! 何を企んでいる!?
俺と、お前と、長谷川さんと、小鳥遊だとおお!? お前それ俺
の立場は!? もうそれ針のむしろとかそういうレベルじゃないん
だけど!?!」

「んー。自業自得って言葉、知ってる?」

「ぐっ……」

「または、二兎を追うもの一兎も得ず、でもいいけど」

「ぐぐっ……」

美鈴の言葉に反論できず唸る俺。

だがしかし、敵は追撃をするのではなく、静かで優しくな声で言
ってきた。

『……なーんてね。別に晴樹をいじめるつもりはないのよ。むしろ

逆、かな?』

「逆?」

『そっそ。……あのね、こういうことをばらすのは反則なのかもしれ
ないけどさ、小鳥ちゃんが言うのよ。「長谷川さんといっしょで
も構いません。むしろうれしいです」って。……なんで? って聞
いたらさ、「晴樹くんが好きになった人の事をもっと知りたいから」
、だってさ。つまりこれは小鳥ちゃんの願いでもあるの』

「……………」

『恋する乙女は強いって言うけどさ。あれ、本当だね。美鈴さんは驚いたよ。あの小鳥ちゃんにこうまで言わせるとはね』

「……………小鳥遊は、強いからな」

『うん。そうだね。…………だから晴樹。あんたもがんばなさい。……小鳥ちゃんの想いに応えろ、なんてお節介は言わない。でもさ、小鳥ちゃんはこちらまでしてるのよ？ あんたもさ、あんたの好きな人の事をもっと知ろうとするべきじゃないのかな？ そう言う機会があつたら積極的に行くべきなんじゃないかな？』

「……………」

『佐代ちゃんね、とってもいい子だよ。でもあんたが思ってるような『天使』じゃなく、普通の女の子だよ。…………天使には、空を飛ば天使には手は届かないかもしれないけどさ、自分と同じ人間になら、いつか、その想いは届くんじゃないかな？ ……ごめんね、晴樹。やっぱりお節介だったかな。私』

「……………いや。すまん。ありがとう」

——何だかんだ言っても、こいつはこういうやつなのだ。

俺の幼馴染は、千里眼で、悪魔の頭脳を持ち、日刊一位のランカ―様で。

そして俺に手厳しくも優しい。

「行くわ。明日。待ち合わせは何時？」

「ん。夜九時に姫神社だからさ、八時半くらいに迎えに行くよ。晴樹んちのマンションのエントランスで待ち合わせよう」

「おう。わかった」

行つてやろうじゃないか。美鈴の気持ちに応えるためにもな。

『OK。じゃあ切るねー。また明日ー』

「あ、おい。ちよつと待て」

『ん？ なに？』

「せめてジャンル名だけでも教えるよ。日刊一位とつた奴」

『あー。……そんなん決まつてるじゃん』

『恋愛ジャンル、だよ』

……そういつて『まだ人を好きになつた経験がない』と言つていた我が幼馴染は、静かに電話を切つたのである。

こうして俺、山田晴樹は美鈴たちと初詣に行くことに決めただけである。

……この時、俺は長谷川さんに会える喜びのあまり、すっかり失念していた。

自分が持っている異能の能力のことを。無敵の『ハーレム機能』
のことを。

——のちに『姫神神社の乱』と呼ばれることになるその事件が発生したのは、この年の暮れ。十二月三十一日。主犯はもちろん、山田晴樹。この俺であった……。

山田晴樹の華麗なる休日（後書き）

自身の中で基本構成が固まりましたので、再開しようと思います。
これからでしょうかよろしく願います。

なお、今回の作中にあるネット小説、なろう様のユーザーであれば
気づく方もいらっしゃると思いますが、モデルが存在します。

作者様にご迷惑をかけるといけないのでタイトルとお名前は出しま
せんが

私にとつてとても思い入れの深い、素敵な作品です。

今回の掲載に関し、事前に作者様の了承を得ていることを報告する
と同時に

この場をお借りして、あらためてお礼申し上げます。

快く快諾して頂いたこと、そして温かい励ましの言葉、ありがとう
ございました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

騒乱の大晦日

十二月三十一日。夜八時。

俺は鏡の前で身だしなみの最終確認を行う。

前髪、よし！ ヒゲ、よし！ 服装、よし！ 目つき！ よ、…
…うおっ！ 怖ええ！ おい睨むなよそのお前！ お前だよ山田
晴樹！！ ……はあ。

俺はため息をついて鏡の前から動く。

もう、とりあえずさ、この目つきはどうしようもないんだし、諦めよう。

せめて清潔感のある服装でいよう。うん。そうしよう。

「…じゃ、かーちゃん行ってくるわー」

「あいよー。美鈴ちゃんとた・か・な・し・さんによろしくねー」

「うるさいですよ母様。だから誤解だと言ってるのに……」

「ま、なんだっていいわよ。いつてらっしゃいー」

俺が出かけるおかげで年末時代劇スペシャルを見れるかーちゃん
はご機嫌だった。まあ、普段は俺が独占してるからなあ、テレビ。
ごめんなかーちゃん。

そんなことを考えつつ、俺は玄関の扉を外開きに開けた

カカカツ！！

そんな鋭い音を立てて一応鉄製であるはずのドアにナイフが突き刺さる。しかも三本。そのうちの一本は俺の前髪をかすめ、さくつとその数本を切り落とす。

「……………はっ？」

人間、余りにも信じられない光景を目にすると硬直する。これ豆知識な。

油切れのロボットのようなきこちない動きでナイフの刺さったドアと反対方向を見ると、なぜかそこには呆然とした顔のチャイナ服の少女。

そしてさらになにかの気配を感じ恐る恐るドアの影を見ると、こちらには俺をうつとりとした顔で見上げる金髪のおねーさま。

……………これは、つまり、あれか。

理由は分らんがチャイナ服の少女が金髪おねーさまの命を奪う為に投げたナイフを、俺が玄関のドアを開けたことにより防いだ……………ってことか。

「ア、アナタハ、イノチノオンジンデース。イッショウ、ツクシマース！ イッショニ、アンナコトヤ、コンナコト、シマショウ！」
「わ、私の投げナイフが防がれたアル。……………こんなことができる凄い男には生まれて初めて会ったアル！ これは運命アル！ 私の全てをもらってくださいアル！」

俺の右側からはチャイナの少女が、左側からは金髪のおねーさまが、そういいつつ擦り寄ってくる。チャイナ少女の抱きしめたら折

れそんな華奢な体と、金髪おねーさまのボリウム満点の体が俺に押し付けられる……。なにこの国際色豊かな天国。蕩けそう……。

「……じゃねえ！ なにしてんだあんたたち！ 人んちの玄関挟んで殺し合いとかマジ勘弁なんですけど！？」

「コ、コレニハ、フカイワケガ……」

「でも、あなたが言うならやめるアル。人類皆兄弟ね！」

「うるせえ！いいからまずこのドア弁償しやがれえええ！」

……右手にチャイナ、左手に金髪を従えた俺は、三人一緒にエレベーターに乗り込みマンションのエントランスに降りる。

こうして左右に人がいると、なんつーか、自分がご隠居様にでもなった気分だ。この紋所が目に入らぬかーって。……うん。これ現実逃避な。

しかし話はこれだけでは終わらない。

エレベーターの扉が開き、俺の目に飛び込んできたもの。それは。

……自衛隊の正式装備に身を包み、エントランス全体に散開した一個小隊が構える自動小銃の銃口。なぜか、というべきか、それとも当然と言うべきか、全員女性隊員。

「女性自衛官だけの小隊。……これが噂のWAC……なのか？」
すげーなおい。あの数日前の小鳥遊のボケはここに至るための複線
だったのかよ……。

「せ、世界的に有名な国際スパイ、秋麗とナターシャを同時に捕ら
えるなんて……」

先頭に立つ隊長格の髪の短い女性自衛官がそう呟く。その目は既
にピンク色。

「しかも、南雲隊長。彼、無傷です……」

「それどころか、彼、素手みたい。武器もなしにあの二人を……」
「なにかしら？ あ目の。まるで野生の獣のようなあの目。やだ、
くらくらしちゃう……」

後ろにいる隊員たちも口々にそう呟く。もはやエントランス全体
がピンク色。

——くらくらするのはこっちのほうだ。頭がだけど。……しかし、
なんだこれ？

いや、わかってる。わかってはいるんだ。これが『ハーレム機
能』の力だということは。でもさ、ちょっと、なんつーか、ねえ？

……とにかく、この出てくる場所を間違えたような皆さんを相手
しては待ち合わせに遅れてしまう。俺は隙を見てチャイナと金
髪から身を離し、一個小隊の中央を突破し、マンションの出口に向
かう。

——ようやく外に出ることが出来た俺は、マンション正面の前に集まる多くの女性の視線をまともに浴びて硬直する。

え？ 今つて夜の八時過ぎだよな？ 何でこんなに人がいるの？

想像外のことに思考停止した俺ではあったが、そのヤジ馬の中に生まれたときから知っている顔を見つけ、安堵のため息とともに手を上げる。

「おい、美鈴、ここだここ……うおおおおお！！」

なんとという偶然！ 俺が上げたその手の先に、なぜか空から落ちてきた赤ん坊がしがみつく。その重さに驚きつつも反射的に全身の力で抱きしめる。赤ん坊とはいえ軽くは無い。必死に両腕に力を入れ、腰を落とす。……うつし！ 落とさずにすんだぞ！

『き、奇跡です！ 私は今、奇跡を目撃しています！ マンション3階のベランダの柵をよじ登った赤ちゃん！ その小さな命は、一人の勇敢な少年のおかげで救われました！ 姫神テレビの清水陽子が現場からお伝えいたしました！！ とりあえず放送が終わったらふたりつきりでインタビューを試みたいと思います！ ええ！ ふたりつきりで！ それはもう朝までじつくりと！！』

赤ちゃんの無事をはらはらしながら祈っていたのだろっ、数多く

のヤジ馬の皆さんから割れるような拍手を頂く。拍手だけではなく、
すげー色っぽい声も頂く。

「なにあの子！　すごいかつこいいんだけど!？」

「ワイルドよね!」

「抱かletたいわ!」

「あんなすごいことをしたのに平然としているのも素敵!」
いやむしろ平然と言うより呆然としているんだが。

しかし。うん。これでわかった。つまりこういうことだろう？

——これは、『異世界ハーレム機能の暴走』だ……。

ぞっぞっぞ……。

俺と美鈴は前を見て歩く。というか前しか見れない。

ぞっぞっぞ……。

二人とも無言。超真顔。ひたすら前だけを見て進む。

ぞっぞっぞ……。

やがて見えてきた姫神社の大鳥居。夜目にも鮮やかな朱色の柱。
その根元にいる、ちよつと寒そうなクラスメイトに向かい、競歩

のように歩く。

「……あ、やつときた！　おーい美鈴ちゃ……ん？　や、山田く、ん？」

「晴樹くん。元気でしたか？　私は……げん……、え？　な、なんですか一体！」

「よう……」

「はあい……佐代ちゃん小鳥ちゃん。元気だった……？」

約一週間ぶりにあったクラスメイトと挨拶を交わすために立ち止まった俺たち。

問題はその後。俺たちの後ろ。小鳥遊たちが見つめるその先には。

ぞっぞっぞ……。

「ぜんだーい！　とまれ！　いつち、に！」

ピシッ！　ピシッ！

そのキレのいい動きを見て俺もキレる。

「なにしてんだよあんたらは！！　まず国際スパイの二人！　和解したのならさっさと国へ帰れ！　それから自衛隊の皆さん！　こんなところで民間人相手に行進の指揮なんぞとる暇があるならとつとと習志野でも富良野でもいいから戻って演習してろ！　それからそれから姫神テレビのあんた！　あんたこのあと深夜一時からのスポ

「ッ番組のキャスターだろうが！ はよ局に戻れ！ 番組に穴開ける気か！？ 最後にヤジ馬の皆さん！ もう赤ちゃんは無事ですから！ 何の心配も要りませんから！ とつと家に帰りなさい！
ゴー！ ホーム！」

一気にそう突っ込み、ぜえぜえと息を切らす俺に、美鈴がそつとペットボトルを差し出す。……すまん美鈴。その心遣いは嬉しいが、今のこの状態で『濃〜い。お茶』のぬるりとした喉越しは自殺行為だ。気持だけありがたく受け取っておく。

「デモ、ワタシたち、クニヲウラギッタコトニナルノデ……」
「もう、祖国には帰れないアルヨ……」

うつ……。

「わ、我々自衛隊は民間人の安全を守るために存在します。具体的には、国際スパイ二人に付きまとわれている貴方を護衛する義務があります！」

うつつ……。

「今日は姫神テレビは正月特番で、私、出番がないの……。部屋に戻っても一人だし……」

うつうつ……。

「わ、私たちは別にあなたについて行ってるわけじゃないしね！」
「そ、そうそう！ 大晦日だね！ 初詣に来ただけだし！」

「いやまてその理屈はおかしい。自分の格好をよく見る。誰が見たって今のあんたらは『あら？ 近所で何か事件があったみたいだね。ちよっと見てくるわね』って格好だろうが」

そんなパジャマの上にとりあえずコートだけ着ていますみたいな恰好で、よく寒くないなあんだたち。完全防寒装備の俺ですら寒くて仕方ないのに。

「……愛の力の前では、大自然の脅威なんて些細なことなのよ……」

「かつこいいこと言ってますけどね、ヤジ馬のおねーさん。今あなたすっぴんパジャマでサンダル履きですからね。わかってますか？」

そんな俺たちのやり取りを呆然と見ていた長谷川さんが、やっと口を開く。

「ねえ、美鈴ちゃんー。これ、なにかなー？」

「私にもわかんない。ただ晴樹が道を歩くだけで、次から次へと女の人が寄ってくるのよ……。もう年齢問わず。下は十歳前後から上は還暦の方まで」

……………。

「……ね、ねえ山田君。愛に年の差はないっていうけどさ、しょ、小学生は、その、いろいろとまずいと思う、よー？ 青少年育成条例的な意味でー」

「まって長谷川さん！ 俺そんな趣味ないから！ お願いだから誤解しないで！」

俺マジで泣きそう。なんなのこれ！ 俺何か悪いことしたか！？

「は、晴樹くん。晴樹くん。あ、あの……」

「おう！ 小鳥遊！ お前から長谷川さんに言ってくれ！ 俺はまともだと！」

なぜかもしもと俯きつつ呟く小鳥遊。

「わ、私、背も低いし、どちらかといえば童顔なほうだし、その、あの、ぺ、ぺったんこだし。……だ、だから、私なら見た目は晴樹くんの願望満たせる上に、実は高校生だから合法？ だし？ お得だと思います……」

「てめえこの一大事になに誤解を深めるようなこと言つてやがんだ！ 羽むしり取るぞこの鳥類が！ しかもほんのり頬まで染めやがつて！ それからお前は『どちらかと言えば童顔』ってレベルじゃねえ！ 世界一ランドセルが似合う女子高生だよお前は……」

「そ、そんなに誉められると照れちゃいます……」

「誉めてねえよおおお！！ 嫌みだよそれくらいわかれよおおお！！……」

……俺の魂の叫びが、姫神神社前に響き渡った……。

「……なるほど。『ハーレム機能』の暴走ですか……」

——あれからしばらくの後。

なんとか『晴樹様と初詣に行こう』臨時募集パーティーメンバーを追い払い（しかし、一部はこの神社に潜伏し接触の機会を窺っている模様）神社の境内を歩く俺たち。

本来ならば長谷川さんの横を歩きたいところだが、まずはこの『ハーレム機能』の暴走をどうにかしたい俺は、あえて長谷川さんと美鈴からちよつと離れた後ろを、小鳥遊と二人で歩く。今はこいつに頼るしかないからな。

……目の前では二人が仲良さそうにお互いの今日の服装について話している。

ちなみに長谷川さんの今日のコーディネートは白のふわっふわなセーターの上に赤いコート。ショートパンツ。太もものかなり上までを覆う黒のハイソックス。

そのあまりに素敵な絶対領域をまともに見たら、俺の目は失明するに違いない。

……ん？ 美鈴の服装？ そんなのどうでもいい。いつも通りだきつと。

くそっ！ いいなあ美鈴のやつ……。腕なんか組んじやったりして……。

「何か心当たりはないんですか？ 晴樹くん」

「ん？ いや。やはり太ももというのは素晴らしいものだよな」

「……は？」

「あ。すまん間違えた。……心当たりなんぞなんもないぞ」

むー……と唸りつつ首を傾げる小鳥遊。

「この冬休み。特訓して能力強化を図っていたとかではないのですね？」

「特訓どころか、俺はこの一週間、家から一步も出てないぞ？」

「家から一步も……あ、もしかして……」

「なんだ小鳥遊。なにかわかったのか？」

「はい。……多分、ですけど、それが原因です。……魔力というのは自然に溜まっていくものなので、使わないでいるとどんどん大きくなっちゃうんです。今回の場合、晴樹くんが引きこもっていたせいで発揮されなかった『ハーレム機能』がどんどん凝縮されちゃって……」

「……それで、今回のような暴走を？」

こくりと頷く小鳥遊。

なんてこった……。俺はもう今後、引きこもることさえ出来ないのか……。

「でも、晴樹くん。晴樹くんはそんな力がなくてもとても素敵で……。あ、忘れてました。はい。これ。どうぞ」

そう言って自分が付けていた黒いマフラーを差し出してくる小鳥遊。

「……いいよ。お前が寒いだろそれじゃ」

「全然平気ですよ？ ……だって私にはこれがありますもの」

小鳥遊は愛おしげに首に手を当てる。……正確には、その細い首に巻かれている黒いシンプルなチエーカーを。

「……これつけているだけで、私はぼつかばかです。うそじゃないですよ？ 本当にこの素敵なチエーカーをつけていれば、あの日を、あのイヴを思い出して心があつたかくなるんです。だから……」

「……わかったよ」

俺はマフラーを首に巻く。それを見る小鳥遊の、本当に嬉しそうな顔。

「……本当は、思うところもあります。言いたい事もあります」

小鳥遊は、そつと長谷川さんを見つめつつ呟く。

「でも、やっぱり、今日、会えてうれしい、です」

……。

「——おい、うしろのふたりー！ なにしてんのさー！ のんびりしてると置いてくぞーー！」

「置いてっちゃうよー！ あははー！」

前方にいる二人がこちらに向かい叫ぶ。
置いていかれたらかなわない。

「いくぞ。小鳥遊」

「はい！」

……大晦日。除夜の鐘はまだ鳴り始めない。

——夜はまだまだ、これからだった。

騒乱の大晦日（後書き）

本年最後の更新です。

皆さん、よいお年を！

来年が皆さんにとって素敵な一年になりますように……。

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

状況開始

姫神神社はこのあたりでは一番大きな神社で、当然敷地面積も広い。

子供の頃は、よくここで美鈴と日が暮れるまで遊んだものだった。

「……さてと、まずはどうしようか？」

合流した俺たちを迎え入れ、美鈴が全員を見回すように言う。

「んー。参拝しようにも並んでいる人多いし、時間かかりそうだな」
「だねー。私はちよつと屋台もみたいかなー。焼きそばおいしそー」

「わ、私はおみくじが引きたいです」

「ん。りょーかい。じゃあまず軽く屋台を回ってからおみくじ引こう。参拝はそのあとで。みんな、OK？」

……こういう団体行動をする場合、美鈴はごく自然にリーダーシップを発揮してその場を仕切る。それでいて「偉そう」だとか思われないのがすごいところだと思う。

「はいー！ じゃあまずは焼きそばー！ とつげきー！」

長谷川さん、すつごく楽しそう。無邪気な子供みたいにはしゃいでる。

……あれ？ なんか、うん……あれ？

「おじさーん！ やきそばひとつー！ 大盛りでー！」

「あいよ！ 焼き立てだ！」

「おおー！ おいしそー！ ありがとー！ ……みんなー！ おまけしてもらったよー！ さー食べてくれー！」

そう言いつつまず自分から、はふはふ言いながら口に含む長谷川さん。猫舌なのかな？ 確かに仔猫のように愛らしいけどな。うん。

「……んー！ このチープさがたまらない！ ……あれ？ どうしたの山田君？ 変な顔してるけど……？ もしかして焼きそば嫌いだった？」

「あ、いや。そうじゃなくて」

いいんだろうか。こういうことを素直に伝えても。

「……なんか、意外だなーと思って、さ」

「意外ってー？」

「や、あのさ、長谷川さんってもっと大人しい人なのかなーって……」

俺の言葉に、んー……と首を傾げる長谷川さん。

「そっかー。私ってそういう風に見られてたんだねー。でも、残念でした。長谷川佐代子さんは、屋台の焼きそばで喜んじゃうような子なのですー。幻滅したー？」

「い、いや！ そんなことはない！ 全然ないぞ！ うん！」
むしろ好感度アップだ。いやもともとMAXだったけどさ！

慌てて頷く俺に向け、にっこり笑いかけてくる長谷川さん。なんだよもう！ 可愛すぎるんだよこんちくしょうめ！

「そかそかー。よかったー。じゃあ山田君も一口どーぞ！」

そう言ってお箸につまんだ麺をこちらに向ける長谷川さん。……え！？　ちよっと待って！　これってあれか！？　伝説の「あーん」じゃないか！　都市伝説と思っていたあの「あーん」が今俺の目の前に！？　いいの！？　俺、これ食べていいの！？

日本中のぼっち仲間のみんな！　すまん。俺は一足早く大人の階段登るぜ！

「よ、よし。あ、あー……」

「あーん。……んーっ！　いいねーこの香ばしいソースの味わいが「でしょー！　美鈴ちゃん！　やっぱり焼きそばは屋台に限りますなー」

「あ、あ、あ……」

「……ん？　なに晴樹どうしたの？　バカ見たいに口開けながら涙流して」

日本中のぼっち仲間のみんな。俺ちよっとこいつ殴っていいかな？　いいよな？

「お、おま、おま、それ、それ、俺の！　長谷川さんが俺に……！」
「ん？　いやだってせっかく佐代ちゃんがくれるって言うてるのに、晴樹ったら固まったまま動かないからさー、おなかすいてないのかなーって思っ」

「んなわけあるかあああ！　お前！　お前は全男子の夢の『あーん』を」

「『あーん』？」

長谷川さんが俺の発言の途中で「ん？」という表情を浮かべる。

「あ、あ、あーん……。そう！ 餡！ せっかく長谷川さんがその焼きそばの餡の部分、つまり具を多くしてくれたのに！」

このへタレ俺め！

「……餡って言ってもこの焼きそば、餡かけじゃないからキャベツとほんの少しの豚肉しかなかったと思うけど……。？　そこが欲しかったの？　晴樹」

「……そうだよ！　ああそうさ！　俺は屋台の焼きそばのちっこい豚肉とキャベツの切れ端が好物なんだよ！　悪いか！」

「そんな泣きながら言わなくてもわかったわよ！　はい！　残りどうぞ！　……ごめん佐代ちゃん。晴樹がおかしくなったから、残りの焼きそば全部あげてもいい？」

「あははー。いいよー。大好きなんだねえ晴樹くん」

はい。そうです大好きなんですよ長谷川さんが。

……俺は美鈴から容器ごと渡された焼きそばをやけくそのように泣きながら頬張った。

本来は香ばしいソースの味がするそれは、なぜか薄い塩味がきいていた……。

「晴樹くん。晴樹くん。晴樹くん」

「連呼すんな。晴樹くんは一人しかいねえ」

今日は人が多いせいかもしれない。もさらに大人しく影の薄い小鳥遊が、俺のコートの袖をツンツン引っ張りつつ前方を指さす。その先にあるのは。

「……おみくじ、か。」

「は、はい！」

「おー、おみくじー！」

「初詣の定番よね。みんなで引こうか」

美鈴と長谷川さんがきやいきや言いながら売り子の巫女さんに突撃する。

……華やかでいいなあ。俺の隣は地味空間だけど。

「……小吉。『変わらぬものに気付く』だつてさ」

美鈴。

「私は中吉ー！ 『大きな変化あり』！ おおー！ なにかなー！
長谷川さん。」

「……なんかやけにシンプルなおみくじだな。普通はこう、『失せ物見つかる』とか『待ち人來たらず』とか、項目ごとに書かれてるもんじゃないのか？」

「あれ？ 晴樹知らないの？ ここの神社って特化だからね」

「特化？ ステータス一極全振りか？」

「ネトゲのあんたのキャラじゃあるまいし……。AGI特化はやめときなさい。今、時代はバランスよバランス。そのうち泣くことに

なるわよ……。じゃなくてね」

うるせえ大きなお世話だ。早いのが好きなんだよ俺は。……弱いけど。

「ここって縁結び専門だからね」

「ほー。そうだったんだ。……え？ まじで？」

ちよつと俺俄然やる気出てきましたよ！ 頼むぜ神様。

「……い、行ってきますね！ 晴樹くん！ 私、がんばります！」

隣にもつと気合が入ってる奴がいた。小鳥遊の背後に炎が見えそうな勢い。

いやでもさ、おみくじ引くのに気合入れても意味ないような……？

「お、大人一枚お願いします！」

映画館の切符買っんじゃないんだから、「大人」はいらんだろ。それに多分お前なら電車の切符小人で買っても絶対にばれないぞ。世界一ランドセル似合うし。

「はい。どーぞ」

「むー！ えーい！」

謎の気合と共におみくじを開く小鳥遊。

……これは俺の勝手な想像だが、きっと中身は「アレ」だろうな。見てもいないのに中身がわかるような気がするのは何故なんだろうな……。

「きよ、『凶』です！」

高々とそのおみくじを掲げる小鳥遊。

……うつわー。予想どおりなのはともかく、そのおみくじインパクトすげーな。紙面の三分の二をでかでかと『凶』って漢字が占めてる。すげー不吉そう。

「あらら……。残念小鳥ちゃん」

「おー。『凶』ってほんとにあるんだねえ。ある意味ラッキーだよー」

美鈴と長谷川さんがフオローしてる。

「……まあ、あれだ。事実かどうかは知らんが、おみくじの『凶』ってやつは『大吉』より数が少ないらしいからな。長谷川さんの言う通り、逆に希少価値があってラッキーだと思えば……」

「すごいです晴樹くん！ 十年連続だった『大吉』がついに止まりました！ー」

「『大吉』！？ そんなおみくじあるのか！？」

聞くともなく聞いていた売り子の巫女さんが呟く。

「す、すごいですね。毎年一枚だけ入ってる、通称呪いのおみくじ『大吉』を十年連続だなんて……」

「いや。呪いのアイテム売っちゃだめだろう神社として」
被ってやれよ。その不幸を。

「……えへへ。やっぱり今年はいいいことありそうです。えへへ……」

小鳥遊さん超幸せそう。いやでもな。それ『凶』だからな。普通の人ならがっかりして正月中ずつと気にしちゃっても不思議じゃない不幸だからなそれ。

「ま、まあ。よかったじゃない……」

「そ、そうだよー。十年連続を止めたっていうのはすごいよー……」

見る。美鈴も長谷川さんもフォローの仕方に困ってるじゃないか。

「……で、何が書いてある？ お告げみたいなのは」

「あつ！ うれしくてまだ見てませんでした晴樹くん！ えっと……」

「『ちよつと待て 考え直せ もう一度』でした！」

「なんだその飛び降り名所の崖っぷちに立ってる看板みたいなやつは！ それ本当におみくじなのか！ ……あ、いや。そうか。うん……それきつと当たるからな！ よーくその意味を考えるんだ！ わかったな！」

「はい！」

元気よく返事をする小鳥遊。うん。いいぞ。

——考え直すんだぞ。お前の好きな人ってやつを。よーく、な。

「……次は晴樹の番ね」

「おー。落ちに期待ー！」

「が、がんばってください！」

背後から応援とプレッシャーがかかる。落ちってなんですか長谷川さん？

「一枚ください」

「はい。ありがとうございます。……私を選んでくださって……」

あ。やべ。ハーレム機能!?

おみくじを渡されたその手がそのままぎゅっと握りしめられる。

「いや！ あー！ 選んだのはおみくじですから！ ねっ!？」

「て、照れなくてもいいんですよ……」

「照れてない！ ……っていうかあんた巫女さんでしょ!? 俗世の穢れに身を染めちゃだめでしょ！ 神にその身を捧げたんでしょ!？」

「私バイトだし！ むしろこの身はあなたに捧げるし!」

「もつと自分を大事にするんだ!」

無理矢理何とか手をひきはがす。……ふう。危ない危ない。

「……何してんのよ。あんたは」

「今の、俺は何もしてないだろう美鈴……」

むしろ俺が被害者だ。セクハラ。セクハラ巫女……。あれちよつとドキドキするなその言葉の響きには。この気持ちに同意してくれる人は多いに違いなと思う。

「まあいいわ。……で、どうだった?」

「ん。……『小吉』だ」

「わーい。私の勝ち」

「すごいです晴樹くん!」

「小吉ですか。おめでとうございます。今なら小吉を引いた人には先着一名様で私がついてきます！」

「……と、思ったら『大吉』だった」

「どっちなのよ」

「えー。残念ー。負けたー」

「すごいです晴樹くん！ さすがです！」

「大吉ですか。おめでとうございます。今なら大吉を引いた人にはもれなく私がついてきます！」

「……………あ。よく見たら『吉』だった」

「いい加減にしなさいあんたは」

「やっぱり私の勝ちだー。いえーい」

「それでもすごいですよ晴樹くん！」

「吉ですか。おめでとうございます。今なら吉というかもう何を引いても私がセットでついてきます！」

「めげないなあんたは！！　っていうか売り場離れていいのかよ！」

「売り場なんてどうでもいいです！ 私を貰ってください！ 何なら今ここで三つ指ついて正座してもいいです！」

「神聖な巫女服が汚れるだろうが！」

「晴樹晴樹。突っ込みどころが違う違う」

「おう。ありがとう美鈴。……巫女服……じゃなくてバイトだろ！ 勝手に職場離れていいのかよ！」

えー……と巫女さんが呟く。なにが「えー」だ仕事しろ。

「これも仕事ですよ。おみくじ売場暇だし、せっかくだから皆さん

を案内しますよ」

ずいぶんフレキシブルな職場だなそれ。

「一応これでも三年連続、お正月はここでバイトしてますからね」
多分、あなたの四年目はないと思うぞ？

「だから、まあ気にしないでくださいな。さ、境内に案内します」

……そう言つて先導する巫女さん。
なんとなくという感じでついていくことになってしまつ俺たち。

——背後から『おい！ おみくじ売場のバイトはどこいった！？
今が一番忙しい時間なのに！』という大声が聞こえてきたのはき
つと俺の気のせいだろう。うん。

「……うわー。すつごい混んでるね」

「ほんとだー。大盛況だねー」

「は、はぐれちゃいそうです……」

……境内の前は大混雑だった。不思議なことにそのわりにはお参
りする人は少ない。あの「ガラングラン」と鳴らす大鈴の音はさつ
きからあんまり聞こえない。

「そろそろ時間ですからね。皆さん除夜の鐘が鳴り始めるのを待っているですよ」

そう言って巫女さんが解説してくれる。……本当についてきちゃったよこの人。いいのかなあ……？ まあ、それはともかく。

「時間？ 除夜の鐘にあわせて何かするの？」

「はい。この神社のジnkスで『除夜の鐘が鳴り始めてから終わるまでの間に、二人一緒に大鈴を鳴らすとそのカップルは幸せになれる』っていうのがあるですよ。……だから、ほら、見てください。周り、カップルばかりでしょ？」

ぐると周囲を見回す。……おう。確かに石投げつけたくなるカップルばかりだ。神聖な境内でいちゃつくんじゃねえよ滅びろよ全く。

巫女さんが続ける。

「もうすぐ、鐘が鳴り始める時間だから……。だから、よかつたら私と……」

そう言って頬を染める巫女さん。絵になるなあ。いいものだ巫女服。うん。

だがしかし。

ざわっ！

「なっ……！　なんだこの殺気は！？」
俺は思わず背後を見る。そこにいたのは。

「……イイコトヲキキマシタ」

「……逃がさないアルネ」

「……甲より乙小隊へ。目標発見。これより状況を開始する」

金髪。チャイナ。WACが揃っていた。その目は獲物を前にした肉食獣のそれだった。

そしてそして……。

「なあ。もうすぐ除夜の鐘だぜ明美。幸せになろうな俺たち」

「ごめん武。私、たった今好きな人が出来た」

「な、なんだってー！？」

「……俺、お前とこの鈴を鳴らせたなら結婚するんだ……」

「死亡フラグ乙。じゃあさよなら二郎。私はあの人と添い遂げる」

「美香……！！」

「ぼく、おおきくなったらみすずちゃんとけっこんする！」

「えー。わたしゆうきくんよりあのおにいちゃんがいいー」

「お、おさななじみなのに！　えーん！」

——異世界製の高性能カップル爆弾が甚大な被害を巻き起こしている。

「ごめん。武。二郎。ゆうきくん！ 恨むなら神を恨んでくれ！！

「「「「……ルールはたったひとつ。彼と鐘を鳴らした人が勝ち！
「「「「」

なに言っただよお前ら！ 今すぐ彼氏の元に返れ！
あとスパイとWAC！ お前らもだ！ 今すぐ国と原隊に戻るんだ！ 親兄弟は泣いているぞ！

「……ちょ、ちょっと晴樹。背中からすごいプレッシャーがかかるんだけど！？」

「あ、あははー。なんか睨まれてるねー私たち。あははー……」
「……あの世界にいたときでも感じたことがないほどの殺気です……！」

……。

「……おい。一斉に散開して逃げるぞ。五、四、三、二、一……」

「ooooooooon！」

……百八の煩悩を払うと言うその鐘の音が戦闘開始のゴングとなった。

「……ゼロ!! 散れええええ!!」

「「「「逃がさないわよおおおお!!!!」「「「「

……後に「姫神社の乱」と言われた事件。その狂乱の鬼ごっこの幕はこうして切って落とされたのである……。

状況開始（後書き）

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

このおバカな話で初笑いをして頂けたら幸いです。

姫神神社の乱　く幼馴染編く

俺は走った。参道を。屋台の隙間を。それはもう必死に。背後から迫る猛烈な殺気、いや狂気に押されるように。

「……くっそ！　なんでこんなことに！？」

……男なら誰でも一度は考えたことがあるだろう。いや今でも心密かに願っている奴、夢見てる奴は多いに違いない。

『あー、女の子にきゃーきゃー言われながら追いかけてえ……』と。

もちろん俺自身も例外ではない。そうさ。俺だってそう思っていたさ。でもな、実際その立場に立ってこそ初めてわかることもあるんだぜ？

ちらりと背後を振り返る。

「「「「まーてー……」」」」

夢にまで見たその状況。それが現実化した時、それは悪夢へと変わる。

こえええええ！！　なにあの目！　血走ってる！！　下手なゾンビ映画より怖いんだぞ！？　だってゾンビと違ってあの人たち走るんだもん！　早いんだもん！　あれ捕まったら何されるか、いや、ナニさせられるかわかったもんじゃねえぞ！？

「ちょっとみなさん落ち着いてー！！ 我に返ってー！！」
「「「私は本気よー！！」」」

だから逆に怖いんだよ！！

「今の皆さん、かなりイタイ人になってますからね！？ あとで絶対『あああ！ 私なんであんなことしちゃったんだろ……』って後悔しますからね！？」

「「「だいじょうぶ！ 痛いのは最初だけだから！ 優しくするから！」」」

な、な、なんだと！？ 痛い思いをするのは俺のほうだと言うのか！？ えっ、それどういことなの俺わからないんですけど！？

ホントまずい！ こいつら俺を俺の知らない世界に連れてこうとしてやがる！ 死んでも捕まる訳にはいかねえ！！

——俺は走りながら対策を練る。多対一の絶対的に不利な鬼ごっこではあるが、俺にとって有利なこともある。それは地の利。なにしろここは子供の頃から美鈴と遊び尽くした、言わば俺のホームグラウンド。隠れる場所も逃走路もばっちり頭に入っている。

この姫神神社の敷地は広い。どこかに身を潜めて、除夜の鐘が鳴り終わるまで隠れていればいいのだ。なにしろこの広さだ。本気で隠れたらバレやしねえ！

しかし。俺の希望は、神社内に響き渡るその放送により打ち碎かれる。

ピンポンパンポン。

『えー。姫神社特設会場からお知らせいたします。……現在、目標の『彼氏』は参道を階段方面に向け移動中。参加者の皆さんは参道方面への集合をお勧めします。……申し遅れました。私、この『第一回姫神社杯彼氏争奪戦』の実況を務めさせていただきます、姫神テレビの清水陽子と申します。……解説は『恋愛なら俺に任せろ！』のキャッチフレーズでおなじみの姫神社神主 鈴木太郎氏です。よろしく願います』

……な、な、な……！！

「なにしてくれがるんだ清水陽子！！ おいもう絶対てめえの番組見ねえからな！！ …… ってかさつさと帰れよう！！」

『さあ始まりましたこのレース、早速ですが鈴木さん。予想を一言』
『山田君…… ああ、『彼氏』さんは幼少の頃からこの神社を遊び場にしており、その点は非常に有利と言えます。が、しかし、この放送により常にその所在地が判明することになると隠れる事は出来ませんので、参加者の誰にでも優勝のチャンスはあるかと』

『なるほど。つまりこの放送をきちんと聞いていることが優勝への近道だと』

『そういうことになりますね。はっはっは』

「神主いいいい！！ お前いいのかよ！？ 子供の頃ここで鬼ごっこしてたら『神聖な神社を走り回るんじゃない！』ってゲンコツ

くれたじゃねーか!!」

しかも俺にだけ！ 美鈴には「めっ！」の一言で済ませたくせに！！

「いたわ、あつちよ！」

「発見！」

ああああ、しまった！ 余りの事に思わず突っ込んでしまったその声を聞きつけて、続々と参加者の皆さんが集まってくる！！ あももうどうしよう!!？

「バカ晴樹！ なにしてんのよ！ 早くこつち!!！」

その声は!!？

「美鈴!!？」

「こつちよこつち！ なにバカみたいに大声で突っ込みあげてんのよ！ 早く！ 逃げるわよ!!！」

「……神社の出入り口、大鳥居の前には自衛隊の人が検問張ってる。あれは突破出そうにない。だからこのまま神社内でやりすごすしかないわ！」

走りながら美鈴が重要情報をくれる。……って検問!? どんだけ無駄に本気なんだよ自衛隊!？

「敷地外の森に潜むってというのはどうだ!？」

俺の提案に首を振る美鈴。どうでもいいけど走りながらそれって器用だな。

「いいアイデアだとは思うけどね。問題は神社敷地を囲う塀ね。あれをよじ登ってる間に捕まるんじゃないかな!？」

俺はちらりと背後を見る。……あー、この距離じゃ美鈴の言う通り、よじ登ってる間に引きずりおろされるな。一瞬で飛び越えられると言うならともかく、あの塀って多分2mくらいはあるし、屋根瓦つきの立派なものだしな……。

……俺と美鈴はこうして対策を相談しつつも一瞬も停滞することはない。時に右へ、かと思えば左へ、お互いの目を見るだけで次に進む方向がわかりあえる。阿吽の呼吸ってやつだ。

生まれた時からいっしょにいる、幼馴染ゆえの、ある種のチート能力。

幼い頃から友達のいなかった俺と、幼い頃からクラスの人気者だった美鈴。俺たちはなぜかいつも一緒だった。

……そう言えばなんでこいつは、クラスの仲間とではなく俺といつも遊んでいたのだろう? 本人が望めば、俺を除くクラス全員を集めることだって出来たろうに。

何となくそんな事を考え始めた俺に向け、美鈴の鋭い声が飛ぶ。

「晴樹! あれ!」

その視線の先。俺たちの右斜め前方。そこに置いてあったのは参拝客誘導路を作るためのロープ。よく工事現場で見かけるような、黄色と赤でねじられたあれだ。

俺がそれを目にしたのを確認すると、今度は前方にちらり目線を送る美鈴。

そこにそびえ立つのは、神社外周を囲う2mの堀。……なるほど。

「……よし。やるか」

「ひっさしぶりよね!!　しくじらないでよ!!」

そう叫んだ美鈴がぐんとスピードを上げ右に進み、ロープを手に取り。

俺はその美鈴を追い抜き真つすぐ堀まで進み、そこで方向転換。堀に背を預け、両手を組み、その掌の部分を上に向け腰を落とす。

俺がその姿勢をとると同時に、追いついてきた美鈴が俺に向かって突っ込んでくる。そのしなやかな脚を俺の掌に乗せる。そのタイミングで跳び上がる美鈴。同時にそれを渾身の力で押し上げる俺。

……一瞬の停滞もなく、まるで蝶のように2mの高さを舞い上がった美鈴は、その堀の屋根瓦の部分に華麗に着地した。

即座に反対側に飛び降りた美鈴が、向こう側からロープを投げて

くる。軽く引いてそれが固定されていることを確認すると、俺は一瞬の迷いもなくそれを伝い塀に登り上がる。

「ふはははは！　さらばじゃー！」

——屋根の上から参加者の皆さんの驚いた顔と悔しそうな顔を見下ろし、俺はそう一声叫んだあと、美鈴の待つ敷地外の森へと飛び降りた……。

「……とりあえず一安心つてとこねー」

「おう。……しかし、よく覚えていたな。あの特訓の事」

……飛び越えた塀を背に座り込む俺たち。塀の向こう側からは「消えたわ！」とか「どこから出ればいいのよ！？」とかいう声が聞こえる。ふっふっふ。この塀はぐるつと神社を囲ってるから正門か裏門からしか出入りできないんだぜ。ざまーみる。

「あー……うん。私も自分で良く覚えてたなーって思っわ。あれだよきつと。『三つ子の魂百まで』ってやつだよ」

軽く笑いながら美鈴が言う。

「まあ、あれだけ失敗を繰り返して我がものにした技術だしな……」

——幼少の頃。某国民的人気を誇る週刊誌において、過去に連載されていた幕末もののマンガのアニメ、その再放送。……その登場人物がさっきの俺たちのように二人で壁を乗り越える描写があった。それになぜか強くあこがれた美鈴が、俺を相棒に始めた特訓と言うのが、さっきのあれ。

いやあ、今だから笑って話せるが当時の俺は何度も美鈴に踏まれ、蹴られ、毎日が地獄だった。……一度、美鈴が『ダッシュ力をつけるために！』とか言いつつスパイクを履いてきた時は、こいつ特訓という名目の元に俺を亡き者にしようとしているだけなんじゃないかと本気で疑ったものである。

「でも、なんだかんだ言っても晴樹だってすぐに反応したじゃない」
「ん？ そりゃまあ……な」

まさか高校生にもなってアニメの登場人物を真似るとは思わなかったけどな。

「……懐かしいね。ふふふ……」

美鈴がそう言いつつちょっと微笑む。その笑顔は、こんな状況にもかかわらず妙に楽しげで、子供みたいに無邪気で……。

「なんか、いいな。こういうのも。晴樹、覚えてる？ 昔の事」
「お前が覚えてることは、多分、全部」

何しろ常に二人でいたんだ。こいつにあって俺にない記憶ってやつは、多分こいつの入浴シーンくらいしかないんじゃないだろうか？

……さっきの疑問が甦る。なぜこいつは俺といつしょにいたんだろっ？

「……いい機会だから言っておくね。私、別に晴樹に同情していつしょにいた訳じゃないからね。単純に一番気が許せる友達だったから、だからね」

千里眼、発動。お前もやっぱり、実は異世界に行って神様に会ってその力をもらったんじゃないかねえの？

「なんて言ったらいいのかな？ ……そう。子供って無邪気そうに見えてもさ、実はしっかり悪意だってもってるよね。わがままだし、嫉妬深いし。……晴樹といるとさ、そりゃ喧嘩もしたけどそういう気が重くなることはなかったからね」

「そりゃお前。ただ単に付き合いが長いってだけじゃねえの？」

「そう……かもしれないね。でもさ晴樹。『付き合いが長い』っていうのはそれだけで立派な理由になると思うんだ。気が合わない人と長い付き合いなんてできないでしょ？」

「……まあな」

「だから、晴樹。私は晴樹といるのが、自然。そうなっちゃったんだ。……だから、私はずっと晴樹の親友でいたいと思ってる。それってなにかおかしいことなのかな？」

……こいつに千里眼があるように、俺にだってこいつの考えがわかる時がある。

多分、不安なのだこいつは。俺が変わってしまったから。……いや違うな。俺を取り巻く環境が変わってしまったからだ。

もし。もしだ。

仮に俺に、か、か、彼女が出来てしまったとしよう。凜子以外の。

その時、親友でありながらも異性である自分の立場は、どうなるのだろう……？　きっとこいつはそんなことを考えているんじゃないかと思う。多分、な。

だから俺はこう言う。大事な親友に、腐れ縁の幼馴染に向かって。

「なんにもおかしくねえよ。……これからよろしくな。親友」

「……ん。わかった。面倒みるよ。親友」

「……ヤットミツケマシタ」

「なん……だと……」

——妙な、それでいて居心地のいい雰囲気が終わらせるように片言の日本語が聞こえた。……目の前の大木からすつと出てきた金髪グラマラスおねーさんから。

「い、いつのまに……」

「どうしてここがわかったの!？」

「カンタンナコトデス。ワタシハ、スパイ。ニゲルコトトカクレルコトノセンモンカデス。……あ、ちょっと面倒なので言葉直しますね」

「ええっ!？ あんたきれいな日本語話せるのかよ!! なんだっただよ今までの片言のたどたどしい言葉は!？」

「いえ。そのほうが『ああ、この人は日本に慣れていないんだな……きつと孤独な人なんだ俺が支えてやらなきゃ』と同情を貰えるかと思ったので」

「それだけ!？ そんな理由で!？」

「あとは『萌えポイント』という感じですかね。金髪片言は萌えませんか?」

「ふざけんな! 国際スパイが『萌え』とか言うな日本の事もっと勉強してから出直してこいや!!」

「……萌えませんでしたか」

「しょぼーんという感じで言う金髪。そこ落ち込むところなんだろうか……?」

「まあ、いいです。……とりあえず、見つけました。もう逃げられませんよ?」

「ぐっ……」

正面に立つこの女。ちょっと頭が残念ではあるが、それでも世界にその名を知られる国際スパイらしく、一切の隙がない。背後は壁。

……ここまでか……。

「……ちよつと待ってもらえますか」

すつと俺をかばうように立つこいつ。我が幼馴染。

「おい美鈴！」

「いいから……。えつと、ちよつといいでしょうか？ ああ、私は美鈴と言います」

美鈴の凜とした表情を見て、軽く驚く金髪。

「……ナターシャよ。何かしら？」

「さすがはナターシャさんです。ここは私たちの負けです。……ですけど、いいんですか？ ナターシャさん。こんなことが『あの人』に知られたらどうなるか、わかっていますよね？」

美鈴の問い掛けに首を傾げる金髪。いやナターシャ。

「『あの人』？」

「そう。『あの人』です。……あなたの祖国。厳しい冬の大地にてあなたを待つ『あの人』。……彼はこの裏切り行為を決して許しはしないでしょう。それだけの覚悟があつての事ですか？」

ナターシャが微かに動揺を見せる。

「ま、まさか『將軍』のことかしら……？ いいえそんな筈はない。あの人の存在は国家級の機密扱いになっているはず……！」

その動揺に気がつかないのか、淡々と話し続ける美鈴。

「『將軍』……。あの人がどんな人なのかはあなたが一番よく存じの筈でしょう？ ……今ならまだ引き返せます。これ以上、騒ぎが大きくならないうちに手を引くことをお勧めします。……それにこれ以上は、あの『組織』の目をごまかせないでしょう」

ナターシャの綺麗なブルーアイが大きく開かれる。

「『組織』！？ 『北の大地』がもうすでに動いているとも言っている！？」

悲しげに首を振りつつ答える美鈴。

「さすがにそれは、今の私にはわかりません。……でも、どうでしょうナターシャさん。あなたの知る『北の大地』なら、その程度は容易いと思いませんか？」

見る間に蒼ざめていくナターシャ。西欧系の白人でも動揺すると顔から血の気が引いてわかるもんなんだな。……と、置いてきぼりの俺はのんびり考える。……置いてけー置いてけー。妖怪置いてけぼりって知ってる？ あ、知らない。そうですか。

そんなマイナー妖怪のもののまねをしている俺をよそに話がまとまりつつある。

「……どうでしょう？ ここは痛み分けというところで引いてはもらえませんか？」

「……しかし！ しかし私はその彼と！」

「痛み分けといたしました。ですからこれを差し上げます」

そう言いつつ美鈴はメモを取り出し、さらさらと何かを書いて渡す。

「彼のアドレスです。……今日はこれで満足して頂けませんか？」
おい美鈴てめえなに俺の個人情報売ってるんだよ！

「……わかったわ。今日はこれで引く。……あなた、美鈴と言ったわね。あなたの名前と、私の身を案じてくれたその優しさは忘れない」
そう言いつつメモを大事そうにポケットにしまい込むナターシャ。

——最後に一度、俺に向け切なげな視線を投げかけた彼女は、やがてさつと振り向き、その豪奢な金髪を風になびかせつつ去っていったのである……。

「……お前、やっぱり千里眼なんだろ？」
「はあ？ なに言ってるの？」

金髪の脅威が去った後、俺は美鈴に問い掛ける。

「え？ いやだってお前、あの人の裏の事情とか全部知ってたじゃん。『將軍』とか『北の大地』とか？」
「……あー、あれね。あれのことか」

そうだよ。それだよ。なんで一高校生であるお前が国際的な裏組織の事とか知ってるんだよ。それもう千里眼以外あり得ねえだろ。それとも実はお前もスパイなの？

「知ってる訳ないじゃんそんなの。あれ全部『はったり』だもん」
「……………はっ？」

美鈴は何事もなかったかのように言う。

「さっきの会話の中で、私から具体的な事、何か言った？ 『あの人』とか『あの組織』とか曖昧なことしか言っていないでしょ？ ……ああいう頭のいい人はね、人の言葉の裏の裏まで読もうとして、自爆したりするものなの。…………本物のおバカさんよりも、実は頭のいい人のほうが騙しやすかったりするのよねえ」

「……………」

——美鈴んちのおじさんおばさん。あんたたちの娘は口先一つだけで国際的に有名なスパイを追い払いましたよ！？ どういう教育してるんです！？

「あつ！ でもお前！ 俺のアドレス勝手に渡してたよな！？ どうしてくれる！？」

「あれもウソよ。…………あのアドレスにメール送るとね、自動返信で変なメールが届くってそういう仕掛けがあるのよ」

「そ、そうなのか……」

「うん。そう。――『主人がオオアリクイに殺されて一年が過ぎました』って件名のメールが届くの。先月、晴樹の携帯で試したから間違いないよ」

「あれもてめえの仕業だったのかよ……!」

……もう！　もう！　こ、こいつは、こいつはあああああ……!

「……つまり、あれか。全てその場で考えたウソと思い付きだけであいつを追い払ったってわけか……。なんつーか、やっぱすげえなお前は……」

打ちのめされた俺が呆然とつぶやく。美鈴がそれに応えて曰く。

「ふふふ。当たり前じゃない」

俺の大事な幼馴染は笑う。強気に。力強く。かつこよく。

「だって私は日刊ランカー様よ！　お話作るのは大得意に決まってるでしょ！」

姫神神社の乱　く幼馴染編く（後書き）

個人的に、自分の親友が異性だということもあり、美鈴さんと晴樹君の関係はすいすい書けるのですが、これって世間一般では少数派だそうですね。

読んで頂いている皆さんから見たらどうなのでしょう？
やっぱり男女間の友情はないという考えなのかなあ……。

そのあたりを聞かせてもらえたらうれしいです。

姫神社の乱　く片思いの彼女編く

「……どうだ？」

「ん。正門よりは少ない。けど三人？　あ、四人いるね、自衛隊の人」

——北欧からの刺客。ナターシャを美鈴が撃退（？）した後。

『あんな口から出まかせ、すぐばれる。あの人が戻ってくる前に移動するよ』

『つつたつてな、この深夜に森を抜けるのはさすがに危ねえだろ』

『うん。だからもうこの際、神社内に戻ろう。乱戦でひつかきまわそう』

『……えー』

『別に捕まっただって命まで取られる訳じゃないんだし、いいじゃない』

『命よりも大事な男の尊厳が奪われる可能性もあるんだけどな……』
……何かあの人たち、俺の尻ばかり見てたような気がするし。

『正門突破は無理。だから裏門から行こう』

『……ま、しゃーないか』

俺と美鈴はそんなやり取りの末、今こうして裏門の様子を窺っている。

「四人か……。んー……」

美鈴がそう呟きながら爪を噛む。何かを考え込む時のこいつの癖

だ。

「よし。私があの人たち誘導するからその隙に晴樹は中に」

「ちよつと待て。危険じゃないのかそれは？」

いくら俺の貞操を守るためとはいえ、美鈴を危険な目にあわせるのはダメだろ。その辺は男としての矜持だ。……捕まったら俺はオトコノコじゃなくなるかもしれないけど。

「だいじょうぶ。危ないことはしない。信じて」

真剣な目で俺を見つめる美鈴。……あー、うん。美鈴がこうなったらもう梃子でも動かないんだよな。無理でもなんでも押し通して、結局、うまくいってしまうんだ。

「……任せたぞ。相棒」

「任されたわ。相棒」

暗闇の中で軽く拳を打ちつけ合う俺と美鈴。頼むぜランカー様よ。

……最後にとびっきりの笑顔で微笑んだ美鈴が、裏門前へと飛び出した。

「……あ、あの！ 自衛隊の皆さん！ 見つけました！ あの人見つけました！ 神社の外！ 森に潜んでいました！！」

裏門を警備している自衛隊の人に向かって美鈴が叫んだ。

「なに！？……そうですか！ 情報提供に感謝します！ それで獲物……おっと失礼間違えました。彼は今どこに？」

「あつちです！ あつちにある大きな杉の木の根元にいました！」

美鈴はそう言つて、俺が隠れている場所とは反対方向を指さす。

いいぞ美鈴！ その調子で全員反対方向へ引つ張つて行つてくれ！
あと自衛隊の人、今俺の事を「獲物」って言つたよな！？ ますます捕まる訳にはいかねえ！

「よし。……南雲隊長に連絡するぞ。全部隊をここに集め、隊を三つに分けて山狩りといこう。もちろんここにも何名かを残して警備に当たる」

……え？ ちょっと待つてそれじゃ俺、中に入れない。

俺はこつそり美鈴に目線を送る。……一見、平然としているように見えるが、俺にはわかる。あせっている。あの美鈴にもこうなるとは思つていなかったようだ。……さすが腐つても自衛隊の精鋭WAC。作戦遂行能力は高いと見える。腐つてるけどな。いろいろと頭とか。

ぐつと唇を噛みしめた美鈴。だが迷いは一瞬だった。即座に次の手を打つ。

「……あ、あの、部隊つて何人くらいいるんですか？」

「うん？ うちの南雲小隊は三十名だが。それがどうかしましたか？」

そこで美鈴は長い付き合いの俺ですら見たことがないような、伏

し目がちの、なんとなく妙に色っぽいとさえ言える表情で呟く。

「あ、あの、こういうこと言ったらいけないのかもしれないけど……。三十人で彼を相手するより、この五人で捕まえちゃう方が、彼に『いろいろ』なことができるんじゃないかなって……」

「『いろいろ』？ ……ちょっと詳しく聞かせて貰いましょうか」

なぜかすごい勢いで乗り出してくる自衛官の皆さん。おい美鈴。お前いったい何を言い出す気だ？ なんかすごい悪寒がするんだが？

「た、たとえば（ピーッ）で（ズキューン！）なことしちゃうとか……」

「……（ピーッ）で（ズキューン！）だと……！」「……」

もじもじと顔を赤らめつつも続ける美鈴。おいお前。ちょっと待て。

「ほ、ほかに（ドカーン！）で（ズドーン！）しちゃうとか、その上（バババーン！）とかも……」

「……（ドカーン！）で（ズドーン！）でその上（バババーン！）まで……！ な、なんと破廉恥な……！ けしからんもつとやれ……！」「……」

「じゃ、じゃあ、（○×）を（□）して（*）。……そのあとゆっくりと（\$#）するとかはどうでしょう……！？」

「……（○×）！（□）……！（*）……！そして（\$#）とな……！」「……」

『どうでしょう!?!』、じゃねーよ。

……うん。あのさ美鈴。多分お前は俺を助けようとしてくれてるんだろうよ。でもな、そのお前のせいで俺の精神的ヒットポイントがすげー勢いで削られていくんだが。なんかもう、俺、お嫁に行けない体になっちゃった気すらするぞおい。

まさかお前が日刊トップを獲ったのって十八禁OKの「ノックダウン」のほうじゃないだろうな? どこで覚えてきたんだそんな……な言葉。親が聞いたら泣くぞ。

——俺がそうして深く昏い闇の奥に沈んでいくような気持ちになっているのをよそに、自衛隊の皆さん+『悪魔の言語使い』こと美鈴さんはいつのまにか意気投合して「D・V・D! D・V・D!」とか叫んでらっしゃる。もうどうでもいい。そのDVDは誰が主演でナニをするのかとか考えると涙が出ちゃうから。

そして。

……やがて狂乱の「DVD祭り」を終えた自衛隊の皆さんは、ごく自然に美鈴に向け最敬礼をする。照れもせずそれに応えて片手を上げる美鈴。その美鈴に先導され、納豆のごとく腐りきったやつらは静かに森の奥に消えて行ったのであった。

俺の心に深い傷を残して……。くすん。

「ぬおおおおお!!!」

裁判を起こしたら絶対勝てたに違いない、そんな美鈴からのセクハラ行為に打ちのめされトボトボ歩いてた俺には、しかし落ち込む暇すらなかった。すぐに四方八方から追手がかかったのである。自衛隊の組織だった行動ではないただけだけどさ!

俺は走った。全力で。何しろさっきの美鈴の言葉が頭にこびりついて、捕まった後の事がハンパなく怖い。いやそんなことはされないとは思っけどさ! でもほら、万が一ってこともあるし! ……ないよね。ないと思う。ないんじゃないかな。ま、ちよつとは覚悟しておけ。

「……って!! そんな覚悟できるかあああ!!!」

動け俺の脚! 守るんだ自分の処女……じゃない貞操を! 走れ走れ走れ!!

すげー必死になる俺。……というのは、背後から聞こえる足音のせい。

明らかにとんでもない速さで迫ってくるやつがいる。その性能差たるや、F3レースにたった一台参加しているF1仕様車のごとく。もう基本性能が段違い。

怖くて振り返れない。しかしその足音は確実に近づいてくる。ほら! もつすぐ背後まで!! ぎゃー! やめて(ピーッ)はいや
――!!

……しかしその足音の主は俺を捕まえず、その横に並ぶ。ええっ！？

「やー！ 山田君！ がんばってるねー！」

「は、長谷川さん！？」

「だよー！ 美鈴ちゃんから頼まれてー！ 助っ人にきましたー！」

そう言いつつ携帯を見せる長谷川さん。この早さでそれをする余裕があるのはすごいけど、こっちは無理だから！ 誰からのメールかなんて見えないからね！？

美鈴。気持ちはありがたい。でもこの状態で長谷川さんというのはどうなんだ？ さすがの俺でも長谷川さんを守りつつ逃走って困難だぞ！？ いや確かにこの笑顔を見てるだけでやる気は出るけどさ！ 精神論で何とかなる場面じゃねえだろこれ！

ああああ！ そんなこと考えてる間に目の前から刺客が！ 腰を低く落としてタックルしてくる人がいますよ！？ しかも標的は長谷川さん！？ まずい！？

「ちえいさー！」

……俺が見たもの。それは跳び箱の要領でその女性を軽々と飛び越える天使の姿。

その華麗な、しかしあまりにも想像外の光景に思わずあっけにとられた俺を、その天使は思いつきり力一杯抱きよせる！ ええええ

っ！？

俺の胸元に飛び込んだ長谷川さんは、そのまま勢いをつけて俺ごとくるりと回転する。まるでダンスのように。舞踏会のように。美しく淀みなく。

……それは俺の一瞬の隙について突っ込んできた参加者を回避するため。

そして。

長谷川さんは踊る。情熱的なダンスのような動きで参加者を惑わす。

長谷川さんは廻る。凄腕の闘牛士のように参加者をひらりひらりと回避する。

長谷川さんは跳ぶ。妖精のように軽々と参加者を飛び越えまた舞い上がる。

「やっまだくーん！ 逃げるよーー！！ それーー！！」

……やがて、その場を一人で支配した羽毛のように軽い体を持つ少女は、俺の手を握りしめ走り出す。風のように。誰よりも早く。何人たりとも追いつけない早さで。

——出会って五分で俺を虜にした、あの最高の笑顔を浮かべたま

まで。

「……やー。走った走ったー」

「あ、うん。そうだな」

——ここは神社の隅にある物置小屋。

追手を巻いた俺たちは、とりあえずこの照明もない小屋に逃げ込んだ。

「こんなに走ったの久しぶりー。気持ちいいねー」

にこにこ長谷川さんが微笑んでいる。俺のすぐそばで。隣に座っている。

この距離。平気だろうか？　もしかしたら俺の心臓の音が聞こえるんじゃないか？

全力疾走とは別の原因で激しく脈打つこの鼓動が。

「……あ、あのさ、長谷川さん？」

「んー？　なにかなー？」

「さっきのあれ、すごかった。運動得意なの？」

「うんー。体動かすのは好きだよー。知らなかったー？」

……そのおつとりとした言葉使い。たれ目がちなその優しい笑顔。俺はその外見だけで、きつとちよつと運動は苦手なんだろうと思っただ。

「見よー。このカモシカのような脚をー」

「お、おう……。うおっ！ あぶね！」

座ったまま、そのすらりとした脚を伸ばす長谷川さん。危なく直視するところだった！ そんな素晴らしいものを見せられたら俺の目は失明する。眩しすぎて。

いや脚はどうでもいい。どうでもよくない！ なんだその素晴らしい絶対領域！ 神の作られたもう物の中で最高の一品といっても過言ではない！ ……ああああ！ 違う！ 今の論点はそこじゃない！ そうじゃないんだよ！

「は、長谷川さん。その、ありがとう。助かったよ」

もっと、もっといい言葉はないのか。この気持ちを、感謝とかいう言葉じゃ生ぬるいこの気持ちを伝えられる言葉は。おかしいな。凜子相手になら常に最高の言葉を紡ぎ出せる俺なのに。

「や。美鈴ちゃんに頼まれたしねー。それに」

「それに？」

「楽しかったー。うん。むしろ私の方がありがとうだよー」

「楽しかった？」

長谷川さんが言う。少し照れたように。ちよっただけ頬を染めて。

「んー。あのさ。実はうらやましかった。美鈴ちゃんと山田君」

「へ？」

俺たちのどこにうらやましい要素があるんだ？ さっきの美鈴とか鬼だぞ？

「なんて言えいいのか？　なんか、本当の『親友』っていうのは、山田君たちみたいなの二人の事をいうのかなーって。……別に私にお友達がいなくてわけじゃないけどねー、でも二人の絆みたいなのは、きっと私と私のお友達にはないなーって」

いえ。俺には本当に友達はいませんからよくわかりませんが。

「だから、よく見てたんだよー。ふたりのこと。何かをする時に息がぴったり合うところ、けんかしてもすぐ仲直り、というかけんか自体がなかったみたいになっちゃうところ、たまに目だけで会話できちゃうところ。……いいなーって思ってたー」

「……そうなんだ」

いろんな思いを詰め込み過ぎて、逆に短くそっけなくなってしまう
った俺の言葉に、にっこりと笑顔で頷く長谷川さん。

「だから、今日は楽しかった。二人の仲間になれたみたいで。今日だけで終わっちゃうのが惜しいくらいー。もっと二人の事を知りたいなあ。もっと仲良くしたいなあ」

「……………」

神様。『ハーレム機能』をお返しします。だから、頼む。お願いだ。

俺の口を、舌を、動くようにしてくれ。

この願いを叶えてくれるのであれば、俺は魔王にだって喜んで魂を差し出す。

……人間ってさ、驚いた時、悲しい時、思わず絶句するだろう？
あれってさ、本当に心から嬉しいことがあった時も起こる現象なんだな。初めて知ったよ。

ここは何でもいい。何かを伝えるべきだ。そう思った俺が口を開く――。

「ここにいたアルカ！！」

ばーん！ と小屋の扉を開けはなって叫んだのはチャイナ。春麗とか呼ばれていた国際スパイの少女。……いや、そんなことはどうでもいい。……こ、こいつ、こいつ……！！

「ふっふっふ……。見つけたアル。もう逃がさない……。あ、あれ？
か、彼氏？　なんでそんな視線だけで人を殺せそうな、そんな目で私をみるアルカ？」

「……上等……上等だこらあああ！！　国際スパイだあ！？
投げナイフだあ！？　そんなもの今の俺にはきかねえええ！！　死んで詫びろおおお！！！」

――もし。もし魂というものが目に見えるのであれば、この時の俺の魂が赤い血の涙を流していたのを見る事が出来たであろう。

「か、彼氏がおかしくなったアルネ！　……わかったアル！　原因

はその娘アルネ！ 想像するに、きっと何かとても大事な場面にその娘が空気を読まずにいきなり突入してきたに違いないアル！ ……心配しないで彼氏！ 私が仇をとるアル！！！」

「よくわかったなこんちくしょう！！ それ『誰が』の部分さえ間違っただけは百点満点だからな！！ ……むしろ仇は俺にとらせろおお！！！」

しかし春麗は俺を見ていない。その視線の、その拳の先にいるのは、長谷川さん！

「おい待て！！！」

止まらない。力強いその拳は止まらない。

「はああっ！！！！！」

——刹那。

とすん。

見た目通りの軽い音を立てて、埃の積もった床に倒れ伏したのは、春麗。

「え………？」

……俺は見ていた。いや見ていたのだがそれが事実と認識できない。

渾身の力を込めて放たれた春麗の一撃。それを音もなく半身になりすつとかわした長谷川さんが、その無防備に晒された首筋に鋭く手刀を落し、意識を断ち切ったのだ。

「は、はせ、がわ、さん？」

「あー、うん。多分平気ー。きれーいに入っただからすっと意識が落ちただけー。怪我とかはしてないと思うよー」

そりゃよかった。空気読めない国際スパイとはいえ少女は少女。怪我とかさせたら夢見が悪いしね。俺のポリシーにも反する。うん。……じゃねえ！？

「な、な、なに今の！？」

「えっと、護身術？ ……うちのお父さん、道場開いてるんだー」
初耳である。

「そ、それであんなことが出来たのか……。段とか持つてるの？」
「ううんー。段どころか私、まともにそれ習ったことないもん。うちのお父さんね、ちょっと過保護きみでねー、『女の子が武術とかするもんじゃない！』って言うって、私を道場に入れてくれないのー」

え？ じゃあ今のは？ すっげーきれいに決まっただけど？

「だから、今のは見よう見まねでやってみただけー。……もう一回やれって言われても無理だからね。この人、私を素人だと思ってまっすぐ力一杯、フエイントもなにもかけずに突っ込んできてくれたからさー。次は警戒されるだろうし、きつとだめだろうねー」

……つまり、あれか。この人は天性の運動神経で、過去に見ていただけの技を実戦でいきなり、百戦錬磨だったであろう武術の達人に決めたつていうことなのか。

なにこの人。チートなの？　あなたも異世界帰りだったりするの？

「……あ、そういえば山田君。さっき何か言いかけてなかったー？」
「え？　あ、うん。えっと……」

ああ、くそっ！　さっきのタイミングなら言えたかもしれないのに！　改めてそう聞かれると言葉に詰まってしまう。ああ、おいもつとがんばれよ俺！　熱くなれよ！

——その時、小屋の明かり取りの窓から白い月光が差し込む。

その光は、少女の女性らしい曲線を、さらさらと流れる腰まで届く黒髪を、不思議そうに傾けた卵型の小さな顔を、ぱちりと開いたその目を、自然に軽く開く桜色の唇を照らした。

とても、とても神秘的な一枚の絵のように。

「かぐや姫……」
「えっ……？」

……月は、魔性のモノと言う。

その白光は綺麗な少女を古い物語の姫に変える。
口下手な俺にほんの少しの力を与えてくれる。

……不意に思い出す。数日前の公園の夜。今の彼女と同じように
月明かりに照らされた不幸な少女は、俺からの返事を知りつつも勇
気をもって想いを伝えた。

……俺は、あいつに負ける訳にはいかない。

「長谷川さん。……俺、誤解してた。長谷川さんって運動苦手だと思
ってた。あんなに楽しそうに笑う子だってこと、知らなかった。
実家が道場やってるということも知らなかった。……それから、長
谷川さんが、俺と、俺たちと仲良くしたいって思っていてくれたな
んで、全然気づきもしなかった。だから」

——『……天使には、空を飛ぶ天使には手は届かないかもしれな
いけどさ、自分と同じ人間になら、いつか、その想いは届くんじや
ないかな？』——

……生まれた時から知っている、大事な親友の声が聞こえた気が

する。お節介だなんてとんでもない。お前はいつも俺を支えてくれる。今までも、そしてこれからも。きつと。ずっと。

「……俺はもつと長谷川さんの事を知りたいと思う。それから長谷川さんにも俺の事を知ってもらいたいと思う。だから、その、……俺と友達になってももらえないかな？」

……今はこれが精一杯。

どこかの怪盗の三代目だって、この場面じゃ小さな万国旗を掌から出すことくらいしかできない筈だ。そう思う。そうだよな、とつあん。

そして。

そして俺のお姫様はこう答えるのだ。

俺の思い描いていた勝手な想像とは、実は全く違っていたその少女は。

いつもの優しい笑顔で。穏やかな声で。まっすぐな視線で。天真爛漫に。

「……はい！　こちらこそ喜んでー！　嬉しいな。とっても嬉しいよ山田君！　これからずっと仲良くしてね。楽しい時間を、もっともーっといっぱい、過ごそうねー！」

姫神社の乱　く片思いの彼女編く（後書き）

難産でした。いやほんとに。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3797z/>

異世界ハーレム彼女の逆襲！

2012年1月4日12時40分発行